

# アラヤ遺跡

(第2地点)

— 市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007

水戸市教育委員会



## ごあいさつ

「アラヤ遺跡」は、那須茶臼岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しております。

この「アラヤ遺跡」の周辺には、古代常陸国那賀郡の郡衙周辺寺院である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や「愛宕山古墳」など多くの史跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に市道拡幅工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本調査により、台渡里廃寺跡に関連する溝や中世の長者山城跡に関連する瓦礫が敷かれた道路状遺構が確認されるとともに、各種の遺物が出土し、本市の古代史研究はもとより、今後において埋蔵文化財を保護保存するうえでも貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました周辺住民の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課、水戸市史跡等整備検討専門委員の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 19 年 3 月

水戸市教育委員会  
教育長 鯨 岡 武



# 目次

あいさつ 例言 凡例

第1章 調査に至る経緯と調査経過	
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	1
1-3 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の周辺と環境	3
2-1 地理的環境	3
2-2 歴史的環境	3
2-3 アラヤ遺跡における既往の調査	11
第3章 調査の方法と成果	12
3-1 調査の方法	12
3-2 基本土層	12
3-3 遺構	15
3-4 遺物	27
第4章 総括	59
4-1 古代のアラヤ遺跡	59
4-2 中世のアラヤ遺跡	61
補遺 工事立会い調査出土遺物	66
引用・参考文献	70
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図・表目次

第1図 アラヤ遺跡の位置	3	第27図 出土遺物 (15)	46
第2図 アラヤ遺跡と周辺の遺跡	4	第28図 長者山城縄張図	63
第3図 基本土層図	12	第29図 工事立会調査出土遺物	69
第4図 調査区の位置	13	第1表 アラヤ遺跡と周辺遺跡一覧	5
第5図 調査区方眼図	14	第2表 ビット一覧	26
第6図 1区遺構図	16	第3表 出土軒丸瓦属性一覧	47
第7図 2区遺構図 (1)	17	第4表 出土軒平瓦属性一覧	47
第8図 2区遺構図 (2)	18	第5表 出土丸瓦属性一覧	47
第9図 2区遺構図 (3)	19	第6表 出土平瓦属性一覧	48
第10図 3区遺構図	21	第7表 出土熨斗瓦属性一覧	49
第11図 4区遺構図	23	第8表 出土土器属性一覧	50
第12図 5区遺構図	25	第9表 出土石器・鉄製品・その他属性一覧	50
第13図 出土遺物 (1)	32	瓦計量表	51
第14図 出土遺物 (2)	33	第11表 土器計量表	56
第15図 出土遺物 (3)	34	第12表 工事立会調査出土遺物一覧	67
第16図 出土遺物 (4)	35	第13表 工事立会調査	
第17図 出土遺物 (5)	36	SD1 出土石器一覧	67
第18図 出土遺物 (6)	37	第14表 工事立会調査	
第19図 出土遺物 (7)	38	SD1 出土軒平瓦属性一覧	67
第20図 出土遺物 (8)	39	第15表 工事立会調査	
第21図 出土遺物 (9)	40	SD1 出土平瓦属性一覧	67
第22図 出土遺物 (10)	41	第16表 工事立会調査	
第23図 出土遺物 (11)	42	SD1 出土丸瓦属性一覧	68
第24図 出土遺物 (12)	43	第17表 工事立会調査	
第25図 出土遺物 (13)	44	SD1 出土土器属性一覧	68
第26図 出土遺物 (14)	45		

## 図版目次

図版1 1・2区の遺構調査状況	図版15 出土遺物 (7)
図版2 2区の遺構調査状況	図版16 出土遺物 (8)
図版3 2区の遺構調査状況	図版17 出土遺物 (9)
図版4 2・3区の遺構調査状況	図版18 出土遺物 (10)
図版5 3・4区の遺構調査状況	図版19 出土遺物 (11)
図版6 4・5区の遺構調査状況	図版20 出土遺物 (12)
図版7 5区の遺構調査状況	図版21 出土遺物 (13)
図版8 5区の遺構調査状況	図版22 出土遺物 (14)
図版9 出土遺物 (1)	図版23 出土遺物 (15)
図版10 出土遺物 (2)	図版24 出土遺物 (16)
図版11 出土遺物 (3)	図版25 出土遺物 (17)
図版12 出土遺物 (4)	図版26 出土遺物 (18)
図版13 出土遺物 (5)	図版27 工事立会い調査出土遺物 (1)
図版14 出土遺物 (6)	図版28 工事立会い調査出土遺物 (2)

## 例 言

1. 本書は、水戸市に所在するアラヤ遺跡（第2地点）の発掘調査報告書である。
2. 調査は市道常磐10号線道路改良工事に伴い、水戸市より委託契約を受けた東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、水戸市教育委員会の指導の下に行った。

所在地 水戸市渡里町字アラヤ 3061-4 地先

調査面積 244 m<sup>2</sup>

調査期間 平成19年1月22日～平成19年2月21日

調査担当 川口武彦（水戸市教育委員会）

調査支援 佐々木藤雄, 大橋 生（東京航業研究所文化財調査室）

調査参加者 飯野正子 石崎洋子 市瀬俊一 海老原四郎 小野麻人 富田 仁 林 邦雄  
村山彩子 渡辺恵子

4. 本書の執筆・編集は、佐々木・大橋・林・小野・市瀬・川口・関口・新垣・渥美賢吾（筑波大学大学院生）・木本孝周（帝塚山大学大学院生）が行った。
5. 調査組織は下記のとおりである。

水戸市教育委員会教育長 鯨岡 武

水戸市教育委員会教育次長 小澤 邦夫

水戸市教育委員会生涯学習課長 森田 秀人

水戸市教育委員会生涯学習課長補佐 成田 行弘

事務局

宮崎 賢司 水戸市教育委員会生涯学習課文化財係長

黒須 雅継 水戸市教育委員会生涯学習課文化財係主事

関口 慶久 水戸市教育委員会生涯学習課文化財係文化財主事

新垣 清貴 水戸市教育委員会生涯学習課文化財係埋蔵文化財専門員

6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。

記して深く謝意を表す次第です（敬称略・順不同）。

青山俊明, 渥美賢吾, 飯島一生, 今尾文昭, 岡本東三, 大塚初重, 川崎純徳, 瓦吹 堅, 黒澤彰哉, 後藤道雄,  
斎藤弘道, 坂井秀弥, 清野孝之, 日高 慎, 山中敏史, 横倉要次

茨城県教育庁文化課, 文化庁文化財部記念物課

## 凡 例

1. 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。

全体図 1/800 各区全体図 1/60, 1/80

土器 1/3 瓦 1/4 土器拓影 1/3 石器 1/3 石製品 1/3 鉄製品 1/2

2. 遺構実測図中のレベルは海拔高, 方位は座標北を示す。
3. 写真図版は原則として土器類 1/2, 瓦 1/3 とした。
4. 遺物番号は本文, 挿図, 写真図版と一致する。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 2-1 地理的環境

アラヤ遺跡は、北緯 36 度 24 分 36 秒、東経 140 度 25 分 49 秒（世界測地系）の茨城県水戸市渡里町字アラヤ 3090 ほかに所在する。30～32.7m の台地上に営まれた先土器時代～中・近世の複合遺跡であり、東西 300m、南北 220m の範囲に広がっている。戦前および昭和 20 年代にはこの一帯に畑地が広がっており、所々に雑木林が残っていたが、昭和 40 年代の後半から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。

アラヤ遺跡が所在する水戸市渡里地区は、北を那珂川に、南を桜川に挟まれた、通称「上市台地」と呼ばれる那珂川によって形成された河岸段丘上に位置しており、南北方向に流れていた那珂川が渡里地区付近で緩やかに東の方向へ蛇行していく場所である（第1図）。渡里という地名がいつ頃まで遡り得るのか定かではないが、渡河点との関わりが想定される地名である。上市台地の東側斜面から斜面下にかけては愛宕町滝坂の曝井推定地に代表される湧水点が点在しており、古くから住み良い土地であったと考えられる。低地との比高は約 30m である。

### 2-2 歴史的環境

アラヤ遺跡が立地する那珂川流域の台地上には先土器時代から近代に至るまでの多数の集落跡と古墳・横穴墓、寺院跡・官衙跡、城館跡が確認されている（第2図第1表）。以下では周辺の先土器時代～中・近世遺跡を概観する。



第1図 アラヤ遺跡の位置（国土地理院発行 1：50,000「水戸」に加筆）





第1表 アラヤ遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石錘・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古)・須恵器(古)	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石剣・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古前)・須恵器	
24	アラヤ遺跡	集落跡	尖頭器(先), 縄文土器(早～晩)・石斧・石剣・土偶, 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	S27年, H1年調査
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器(後), 土師器(古・奈・平)	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 土師器(奈・平), 須恵器(奈・平)	
37	阿川遺跡	集落跡	縄文土器(中～後), 土師器(古), 土師器(奈・平)	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器(後), 土師器(古前・後)	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器(前), 弥生土器(後), 土師器(古前・後)	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)・石錘・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
46	軍民坂遺跡	集落跡	搔器(先), 縄文土器(前～後)・土器片・石製品, 弥生土器(後), 土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後), 弥生土器(後), 土師器(古), 土師器(奈・平)	
63	环渡里遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平)・須恵器(古・奈・平)	
64	堀遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古前・奈・平)・須恵器(奈・平)・灰釉陶器(奈良・平安)・紡錘車・砥石・鉄製品(鎌・鏃・刀子・釘)・瓦, 内耳土器(中)・土師質土器(中)・常滑焼(中)・掘り鉢(中)・石臼, 瓦質土器(近)・磁器(近)	H5年, H6年度調査
65	中河内遺跡	集落跡	古墳(前)・土師器(奈・平)	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀(古)	前方後円墳1(2), 円墳1(2)
80	西原古墳群	古墳群	土師器(古)・円筒埴輪(古)・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄族(古)	H17年, H18年度調査, 度前方後円墳1, 円墳8(11)
94	権現山古墳群	古墳群		円墳1(2)
95	権現山横穴群	横穴群	土師器(古)・須恵器(古)・水晶製切子玉・ガラス製小玉(古)	横穴墓0(4)?
96	富士山古墳群	古墳群	土師器(古)・円筒埴輪・人物埴輪(古)	前方後円墳1(?), 円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀(古)	前方後円墳1, 円墳2(4)
98	台渡里廃寺跡	寺院跡/官衙跡	ナイフ形石器・男女倉型有柄尖頭器・剥片(先), 縄文土器(前・後～晩)・石器, 弥生土器(後), 土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)・墨書土器・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・面戸瓦・隅切り瓦・文字瓦・瓦塔・陶製相輪・金箔製品・鉄製品(釘・鏃)・青銅製品・鉄滓・羽口, カワラケ(中)・内耳土器(中)	S14～S19年, S46～S49年, H6年, H9～H10, H12～H18年度調査
99	台谷廃寺跡	寺院跡/官衙跡	土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦(奈・平)	
100	長者山城跡	城館跡		H18年度調査, 土塁と堀が良好な状態で遺存
121	渡里町遺跡	城館跡	縄文土器(早・中・後), 土師器(古・奈・平)・須恵器(奈・平)・灰釉陶器(奈・平)	H15年, H16年度調査
125	塚宮遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 弥生土器(後), 土師器(古前・後)	
126	塚宮古墳群	古墳群		前方後円墳0(1), 円墳0(2), 湮滅
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)・石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦(奈・平)	
225	白石遺跡	城館跡/集落跡	角錐状石器(先)・削器(先), 尖頭器(草創)・有舌尖頭器(草創)・石鏃(草創), 縄文土器(中), 弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(古・奈・平), 内耳土器(中)・陶器(中)・磁器(中)	H2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器(古前)	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳0(1), 湮滅
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器(後), 土師器(古), 陶器	円墳1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
232	中河内館跡	城館跡		
276	台渡里遺跡	集落跡	縄文土器(晩), 土師器(古・奈・平)・須恵器(古・奈・平)・墨書土器(奈)・炭化米(奈・平)・軒平瓦・平瓦・鉄製刀子(古)・鉄製鎌(古)・砥石(古), 内耳土器(中), 陶器(近)・磁器(近)・銅銭(近)・銅製箸(近)・砥石(近)	H6年, H8年, H14～H17年度調査

(井上・蓼沼・仁平・根本 1999) に加筆

### (1) 先土器時代～縄文時代草創期

那珂川を挟んだ対岸の軍民坂遺跡と白石遺跡からは、先土器時代～縄文時代草創期の石器が出土している。軍民坂遺跡からは、長者久保・神子柴文化に帰属すると見られる石刃製の搔器が採集されている(吹野・江幡 1998)。平成2年～3年にかけて実施された白石遺跡の発掘調査では橋本編年Ⅱb期(橋本 1995, 2002)に帰属する頁岩製の角錐状石器や時期不明の削器と剥片(いずれもメノウ製), 長者久保・神子柴文化期の尖頭器(頁岩製), 縄文時代草創期の有舌尖頭器(黒曜石製・頁岩製)・石鏃(ガラス質黒色安山岩製・頁岩製)が出土している(櫻村 1993)。

アラヤ遺跡と同じ台地上に所在する台渡里廃寺跡からは、断片的ながら先土器時代の石器が出土している。平成16年度に行われた確認調査では、2点の石器が出土している。ひとつは南方地区の塔跡の基壇の断ち割り調査の際に掘り込み地業の基底部直下のローム層から出土したメノウの剥片である。

出土層位は第二黒色帯とみられる。もうひとつは、南方地区の東側寺院地区画溝の確認を目的とした平成16年度調査南方地区第2トレンチ(DWT04N-T2)から出土した、硬質頁岩製の男女倉型有樋尖頭器である。さらに平成18年度に行われた長者山地区の範囲確認調査において、正倉院区画溝確認トレンチ1検出の堀跡からチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が1点出土している。技術的・形態的特徴および利用石材から橋本編年Ⅱc期Aグループ(いわゆる「砂川期」)のものと考えられる。

以上のようにアラヤ遺跡の周辺では、AT下位の橋本編年Ⅱa期から縄文時代草創期にかけての石器が出土しており、更新世後半から最終氷期人類の土地利用が展開していたことは確実である。

しかしながら、殆どの資料が後世の遺構内覆土出土資料であったり、単独出土品であることから、どのような土地利用が展開していたのかについては、定かではない。今後は、調査時の偶然の発見に委ねるのではなく、最終氷期人類の具体的な活動内容を探るために石器集中地点や礫群、炉跡等の遺構の確認を目的としたローム層内の調査事例を積極的に増やしていく必要があるだろう。(川口)

## (2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、長者山遺跡、西原遺跡、阿川遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、小原内遺跡、渡里町遺跡、塚宮遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、笠原神社古墳、台渡里遺跡が該当する。これらのうち、発掘調査が行われているのは、砂川遺跡、白石遺跡、台渡里遺跡のみであり、他の遺跡はすべて踏査により確認されている。

砂川遺跡からは昭和55年に常磐自動車道敷設に伴い実施された発掘調査の際に加曾利E3-4式(柳澤 1995)期の竪穴住居跡4軒、加曾利E4式期の竪穴住居跡15軒、加曾利E4式期の土坑141基、加曾利E4式期の埋設土器14基が検出されている(渡辺 1981)。竪穴住居跡は円形、隅丸方形、楕円形のものから構成され、炉の形態には地床炉、石囲い炉、埋設炉があるが、時期による形態差は認められない。

軍民坂遺跡では、平成17年度の個人住宅建設に伴う試掘・確認調査において、縄文時代中期後半加曾利E3式期の竪穴住居跡が調査され、うち1軒は東北地方においてよく知られる石組複式炉を持つことが明らかとなった。県内でも類例が少ない貴重な例としてあげられよう。この背景には、中期後半に東北地方の大木式土器文化圏と非常に密接な交流があったと理解できる。

白石遺跡からは、平成2～3年に水戸浄水場建設に伴い実施された発掘調査の際に加曾利E3式期の竪穴住居跡1軒、加曾利E4式期の竪穴住居跡2軒が検出されている(櫻村 1993)。いずれも円形あるいは不整円形のものであり、加曾利E3式期の竪穴住居跡が地床炉であるのに対し、加曾利E4式期の竪穴住居跡の炉は石囲い炉となっている。また、遺構外より阿玉台式、加曾利E3式、加曾利E4式、大木式土器の破片が出土している。

台渡里遺跡からは、平成6年に都市計画道路3・6・30号線敷設に伴い実施された発掘調査の第二調査区から縄文時代晩期の大洞C2式土器の破片が出土している(井上・千葉 1995)。(新垣)

## (3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、長者山遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、富士山遺跡、小原内遺跡、堀遺跡、塚宮遺跡、白石遺跡、文京2丁目遺跡が該当する。これらのうち

発掘調査で遺構が確認されているのは堀遺跡だけであり、ほかは全て表面採集によるものである。堀遺跡からは、弥生時代後期の竪穴住居跡が1軒検出されており、弥生土器の壺2個体と土師器の壺と埴が共伴して出土している(井上・千葉・檜村 1995)。(新垣)

#### (4) 古墳時代

アラヤ遺跡の周辺における古墳時代の集落跡は愛宕町遺跡, 文京1丁目遺跡, 長者山遺跡, 阿川遺跡, 梵天遺跡, 権現山遺跡, 平塚遺跡, 富士山遺跡, 小原内遺跡, 坏渡里遺跡, 堀遺跡, 中河内遺跡, 渡里町遺跡, 塚宮遺跡, 白石遺跡, 宮元遺跡, 文京2丁目遺跡, 台渡里遺跡が該当する。これらの大半は踏査により確認された遺跡であるが、これらのうち、時期が判明しているのは前期の遺物が確認されている文京1丁目遺跡, 堀遺跡, 中河内遺跡の4遺跡および古墳後期の土師器が出土している塚宮遺跡, 7世紀後半の土師器や須恵器が出土している台渡里遺跡に限られる。

これらの集落跡のうち発掘調査が行われているのは、白石遺跡, 堀遺跡, 塚宮遺跡, 台渡里遺跡である。白石遺跡からは、7世紀前葉の住居跡が3軒確認されている(檜村 1993)。台渡里遺跡からは都市計画道路3・6・30号線の新設に伴い調査された「第二調査区」において7世紀後半の住居跡が4軒検出されている(井上・千葉 1995)。

集落跡の周辺に営まれている古墳は中期～終末期のものが確認されている。中期古墳は国指定史跡愛宕山古墳が該当する。本古墳は全長136.5m, 後円部径78m, 前方部幅75m, 後円部高10.5m, 前方部高9mを測り、楕形の周壕を巡らす大型の前方後円墳である。採集されている埴輪に黒斑がみられることから5世紀前半に築造されたとする見解がある(井・小宮山 1999)。

また、その近傍に営まれたといわれる姫塚古墳もこの時期に該当するらしい。本古墳は愛宕山古墳の西方にかつて存在したらしいが、1971年に宅地造成のため破壊されてしまった。全長58m, 後円部径40m, 前方部幅20m, 後円部高4m, 前方部高3.5mという古い特徴を持つこと、有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられており、盗掘孔の状況から粘土槨であったと推定されていることなどから(藤村・塩谷 1982)、愛宕山古墳に近接した時期が推定されている(井・小宮山 1999)。

後期の古墳は、富士山古墳群, 小原内古墳群が該当する。富士山古墳群, 小原内古墳群からは円筒埴輪や形象埴輪, 直刀, 鉄鏃などが出土しており、いずれも6世紀代の築造と考えられる。終末期の古墳は、西原古墳群と権現山横穴群が該当する。権現山横穴群の第1号墓および第2号墓の玄室には線刻壁画が認められる。第1号墓からは須恵器と土師器が出土しており、玄室の左右側壁に放射状線文が描かれている。第2号墓からは遺物は出土していないが、玄室の左右側壁に稲妻形文・縦線・横線・建物・冑が描かれている。第3号墓からはガラス製小玉2点, 水晶製切子玉8点, 第4号墓からはガラス製丸玉4点, 金環2点が出土している。造営年代は7世紀前葉とする見解(大森 1974, 生田目・稲田 2002)と8世紀前後とする見解(川崎 1982)とがある。

白石古墳群は5基の円墳から構成され、第2号墳の墳頂には凝灰岩片が散乱している箇所があることから横穴式石室の存在が想定される。また、第3号墳の南側からは石棺が検出されており、いずれも埴輪を伴っていない。

西原古墳群は前方後円墳1基と円墳8基から構成される古墳群である。凝灰岩の横穴式石室を持つ

と考えられる古墳が存在する点、須恵器、勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄鏃などが出土している点（大森 1952a, 1952b）、埴輪を持たない点3点が従来の特徴として挙げられた。ところが、平成17年度に水戸市教育委員会が実施した個人住宅建設に伴う発掘調査で墳丘が削平された円墳の周溝が検出され、内部から円筒埴輪片が多数出土したことから、少なくとも本古墳群は6世紀代から形成され、7世紀まで造墓活動が続くことが判明した。また、本古墳群には全長約50m、後円部径30m、高さ3.5m前後、前方部幅15mの規模を持つ前方後円墳があり、注目される。上記以外の古墳については未詳である。

（川口・渥美）

## （5）奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡のうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、堀遺跡、台渡里廃寺跡、渡里町遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、台渡里遺跡である。

堀遺跡は、平成5年に実施された建売住宅の建設に伴う発掘調査において、平安時代の竪穴住居跡6軒とともに、3棟の側柱掘立柱建物跡、土坑9基、溝状遺構2条が検出されており、このうち建物跡は、3×2間、2×1間、1×1間がそれぞれ1棟ずつ確認された（伊藤 1995）。平成6年に実施された住宅団地造成工事に伴う発掘調査において奈良・平安時代の竪穴住居跡39軒、掘立柱建物跡5棟、井戸跡2基、溝跡2条、土坑1基が検出されている（井上・千葉・櫻村 1995）。竪穴住居跡は8世紀前半が6軒、8世紀後半が15軒、9世紀前半が13軒、9世紀後半が5軒確認されており、土師器、須恵器、鉄製刀子・窯・雁又鏃・釣針・釘・くり錠などのほかに須恵器壺Gが2点出土している。建物跡のうち第5号掘立柱建物跡は長舎風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性が指摘されている（櫻村 2005）。また土坑からは人面墨書土器が出土している。

砂川遺跡からは、昭和55年に常磐自動車道敷設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴住居跡19軒、竪穴状遺構6基、溝2条、井戸1基が検出されている（渡辺 1981）。竪穴住居跡からは土師器、須恵器とともに鉄製足金具や刀子、雁又鏃、鎌、土製紡錘車などが出土しており、井戸跡からは木製の曲物や櫛、高台付盤など注目される遺物が出土している。

台渡里廃寺跡の調査・研究は、高井悌三郎氏による戦前の学術調査を嚆矢とする（高井 1964）。その成果を受けて昭和20年長者山地区と観音堂山地区、南方地区の3地区が県指定史跡に指定された。

長者山地区は、炭化米が出土すること、瓦倉が4棟確認されていることから（高井 1964、瓦吹 1991）、那賀郡衛正倉院と推定されていた（瓦吹 1991、黒澤 1998）。平成18年度には、市教育委員会が行った範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と北側区画溝が確認され、郡衛正倉院であることが確定的になったといえる。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衛政庁跡や河内駅家とする見解もあったが（瓦吹 1991、外山 1993）、平成14年から16年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極に位置するところには中門が配置される東向きの独自の伽藍配置をもつとみられ、その創建年代が7世紀後半に遡るものであることが明らかとなった（川口・小松崎・新垣編 2005、川口 2006, 2007）。出土遺物には平瓦や丸瓦の凹面や凸面に「吉(土)田」、「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志

□」など台渡里廢寺跡の造営に關与した那賀郡内の郷名や「年足」のような個人名がヘラ書きされたもの、「川マ」や「禾」、「石上」銘の押印文字瓦、相輪の一部がヘラ書きされた瓦や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦、金箔製品、瓦製相輪の請花花弁と擦管など東国の初期寺院でも初見の例となる仏教關連遺物が確認されている。

南方地区についてはこれまでも寺院と考えられてきたが（高井 1964, 瓦吹 1991, 黒澤 1998）、平成14年から16年にかけて水戸市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、塔跡基壇の内部より内面黒色処理の施された土師器坏の破片が出土したことから、9世紀後半に入ってから造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。観音堂山地区の初期寺院が9世紀後半には火災で廢絶していることから、観音堂山地区の伽藍の焼亡後に、南方地区に再建しようとしたと考えられる。また瓦の出土量は建物規模に比べ少ないこと、区画溝の掘削が途中で廢絶されていることから、造営を途中で中止した可能性が高い（川口・小松崎・新垣編 2005）。従って、確認されなかった講堂は本来存在しない可能性が高い。なお、これらの成果に基づき、平成17年に観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

台渡里遺跡では、平成6年に都市計画道路3・6・30号線敷設に伴い実施された発掘調査の第二調査区において豎穴住居址4軒、溝6条、建物跡2棟が検出されている（井上・千葉 1995）。溝は出土遺物から1号溝が8世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期から9世紀第Ⅰ四半期、2号溝が8世紀前半、3号溝が8世紀後半から9世紀第Ⅰ四半期以降に埋没したと考えられる。中でも3号溝は溝の中に0.9～1.3mほどの掘方をもつ柱穴が2m間隔に列状に認められ、柵列もしくは掘立柱塀などの区画施設と考えられる。遺物では2号溝から7世紀末から8世紀前葉に位置づけられる土器が出土している。なかでも畿内系土師器や湖西産須恵器の存在が注目される。1号建物跡および3号溝などから近隣に公的施設の存在が予測される。

また、平成8年に集合住宅建設に伴い実施された確認調査では、3号溝の延長部分と7世紀第Ⅲ四半期の豎穴住居跡が1軒検出されている（井上・栗原 1996）。

さらに平成17年に実施された集合住宅建設に伴い実施された発掘調査では、奈良・平安時代の豎穴住居跡とともに正倉とみられる礎石建物跡1棟（総地業）とそれを区画する役割を果たしていた逆台形の区画溝1条が検出され、区画溝の覆土上層からは炭化米がまとまって出土した（小川・大淵・川口・松谷 2006）。豎穴住居跡からは「備所」と記銘された墨書土器が出土している。「備所」がどのような物品を備える施設なのかは、調査面積が限定されて、判然としないが、炭化米や礎石建物との関連から想起するならば、租税を備蓄しておくための施設名を示すと理解することができる。この調査により那賀郡衙に關わる官衙施設は台渡里遺跡の東端・南端にまで展開していることが判明した。

白石遺跡からは、平成2～3年に水戸浄水場建設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の豎穴住居跡16軒、掘立柱建物跡6棟、基壇1基、溝1条、土坑12基が検出されている（榎村 1993a）。特に注目されるのは東西2間、南北36間の第3号掘立柱建物跡であり、長さは桁行約88mにもなる。第1号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。溝の時期から8世紀前半に帰属すると考えられている。

白石遺跡に隣接する田谷廢寺跡からは、多数の瓦とともに「□里丈部里」、「生マ□里」、「岡田」など

台渡里廃寺跡の長者山地区と同様の文字瓦が多数、出土している。小字には「百壇」という基壇との関係が推測される名前が遺されており、3箇所の基壇と礎石の存在が報告されている（伊東 1975）。黒澤彰哉氏は本遺跡を新置の河内駅家跡と推定されているが（黒澤 1998）、田谷廃寺跡が河内駅家跡であったとすれば、白石遺跡で確認された第3号掘立柱建物跡は、檜村宜行氏の指摘するとおり、駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設として理解することも可能であろう（檜村 1993b）。

（川口・渥美）

## （6）中世～近代

中世～近代の遺跡は長者山城跡、台渡里遺跡、台渡里廃寺跡が挙げられる。長者山城跡は、これまで地形測量図や縄張り図が作成されたことはあったものの、発掘調査は行われていなかった。しかしながら、平成18年に水戸市教育委員会が行った個人住宅建設に伴う発掘調査で、15世紀後半～16世紀初頭の遺物が出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、長者山城跡の機能していた時期に関する手がかりが得られた。

台渡里遺跡では、平成6年に実施された都市計画道路3・6・30号線敷設に伴う発掘調査の第二調査区から厚手碗や銅銭・鉄銭を副葬した18世紀以降の近世墓が4基確認されている（井上・千葉 1995）。また、平成17年に実施された商業施設建設に伴う確認調査では、15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器が出土した井戸跡が1基確認されており、長者山城跡に関連する遺構と推定される。

台渡里廃寺跡では、平成6年に実施された都市計画道路3・6・30号線敷設に伴う発掘調査の第一調査区で確認された第一号井戸址から、15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器、播鉢などが出土しており（井上・千葉 1995）、平成15年に行われた範囲確認調査では、土塁に沿う形で観音堂山地区の初期寺院の礎石を落とし込んだ溝跡が確認されており、カワラケや内耳土器などが出土していることから、観音堂山地区の寺院は遅くとも15世紀には寺院の存在はなく、長者山城跡の一角として機能していたことが推定されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。また、南方地区からは平成16年に行われた範囲確認調査の際に、塔跡の基壇上およびその周辺から、多数の中・近世の土器類とともに五輪塔の部材、板碑片などが出土しており、基壇の南側には「咸平元寶」などの北宋銭や焼土・炭化物・骨粉を含む中世の火葬墓が集中して営まれている状況が確認されたことから、中・近世には塔跡が信仰の対象となっており、墓域としての土地利用が行われていたことが推察されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。

平成17年に行われた市道常磐17号線改良工事に伴う発掘調査では、2区からこぶし大の円礫を集めた集石遺構が3基見つかり、17世紀前半の瀬戸・美濃産の陶器や波佐見産の磁器碗、17世紀後半の瀬戸・美濃産陶器大鉢、18世紀前半の肥前系磁器碗が出土している。また、4区で確認された現代のゴミ穴からは、近世～近代の製品とみられるカワラケとともに益子焼の土瓶や土人形（恵比寿）が出土しており（佐々木・川口・大橋・林・渥美 2006）、近世村落の成立が17世紀前半まで遡ることを間接的に示す資料が得られた。以上の成果から、アラヤ遺跡の周辺では、15世紀後半～16世紀前半に長者山城に関わる土地利用が展開し、17世紀前半以降には近世村落が形成されていたと推定される。

（川口・関口）

### 2-3 アラヤ遺跡における既往の調査

アラヤ遺跡では、昭和26年と平成元年に発掘調査が行われている。ただし、昭和26年の調査については、調査地点がはっきりしないため、平成元年に行われた調査を第1地点とし、今般の調査地点を第2地点とする。

昭和26年の調査は10月4日～11日にかけて大森信英氏（当時茨城高等学校教諭）が調査を担当し、掘立柱建物跡とみられる12基の柱穴を検出したとするが、詳細は不明である。遺物は先土器時代のものとみられる硬質頁岩製の槍先形尖頭器、縄文時代後・晩期の土器とともに東北地方に分布する大河式土器や土偶、石棒などが出土している（大森 1952c）。その後、昭和48年には水戸市教育委員会による台渡里廃寺跡長者山地区の確認調査が行われているが、その一環でアラヤ遺跡の東端に設定された東西方向のトレンチから幅2.5mほどの瓦礫道が検出されている（瓦吹 1991）。なお、昭和61年には蓼沼香未由氏により「桶弓カ」の印面を持つ古代の銅印が採集され（蓼沼・川口・小松崎編 2004）、瓦吹堅氏により学会に紹介されている（瓦吹 1988）。平成元年に水戸老人福祉センター「長者山荘」の建設に伴い実施された記録保存を目的とした発掘調査（井上編 1992）はアラヤ遺跡における最初の本格的な発掘調査であり、先土器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が多数確認された。先土器時代の遺構は確認されていないが、ガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器が縄文時代の第5号竪穴状遺構から出土している。縄文時代の遺物は、台地中央にある古墳時代や奈良・平安時代の遺構からも出土しているが、遺構は台地縁に密集している。縄文時代早期の竪穴状遺構8基が確認され、早期後葉の茅山下層式、茅山上層式、子母口式、前期前葉の黒浜式、前期後葉の浮島式、中期初頭の五領ヶ台式、中期中葉の阿玉台式、中期末葉の加曾利E4式、後期初頭の称名寺式、前葉の堀之内1式、後期中葉の加曾利B2式土器の破片等とともに定角式磨製石斧や磨石、石錘等が多数出土している。

古墳時代の遺構は第1号竪穴状遺構で中期末～後期初頭の土師器壺と坏が出土している。また溝状遺構からは前期に帰属するとみられる土師器甕が5個体分出土している。奈良・平安時代の遺構は4軒の竪穴住居跡と工房跡1軒、掘立柱建物跡2棟、粘土採掘坑2基である。遺構の造営時期は出土土器から、工房跡が7世紀末～8世紀初頭、竪穴住居跡は8世紀～9世紀、掘立柱建物跡は竪穴住居跡との重複関係から9世紀以降とみられる。工房跡や竪穴住居跡からは刀子や砥石などが一定量出土しており、寺院や官衙の造営に係わる集落が展開していた可能性が高い。その後、官衙に関連する可能性がある掘立柱建物跡がこの地に展開していることから、土地利用が変化した状況がうかがえる。

以上の既往の調査成果から、アラヤ遺跡は先土器時代の槍先形尖頭器文化期から平安時代に至るまで断続的に土地利用が展開した複合遺跡であり、奈良・平安時代には那賀郡衙とその周辺寺院である台渡里廃寺跡と有機的な関係にあった遺跡であったことが理解できる。（川口）

## 第3章 調査の方法と成果

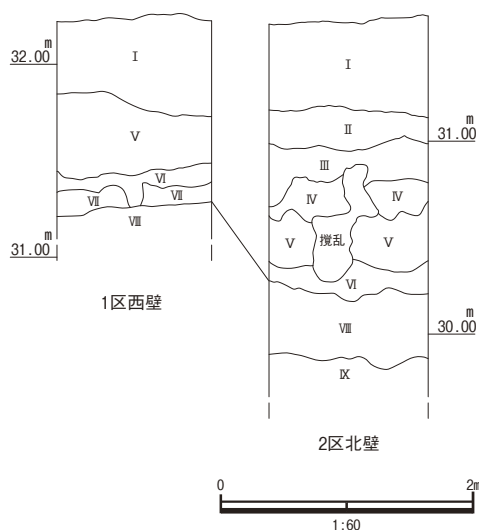
### 3-1 調査の方法

発掘調査は、周辺住民の交通路を確保するために調査区を5ヶ所に分け、幅4m程の南北に伸びる市道に1区、東西に伸びる市道に2～5区の調査範囲を設定した上で、各区毎に調査を実施した。また、各調査区中央には水道管が敷設されていたこともあり、2m方眼のグリッドを設定したものの、実作業では公共座標（日本測地系）を基準に基準点を設け、その既知点より光波測量器を使用して遺物取り上げ等の記録作業を行った。

調査区の掘り下げは、アスファルト舗装を除去後、重機により碎石・表土層を掘削し、その下部より遺構確認面までは、人力で掘り下げた。遺構実測については、デジタルカメラによる写真測量と手実測を併用して行った。遺物は、原則として包含層及び遺構内出土遺物については全点3次元で記録した。写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ（500万画素）を使用して、適宜記録撮影を行った。（大橋）

### 3-2 基本土層

1区南側と2区東側の2箇所をわたって基本土層確認のためのテストピットを設け、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。



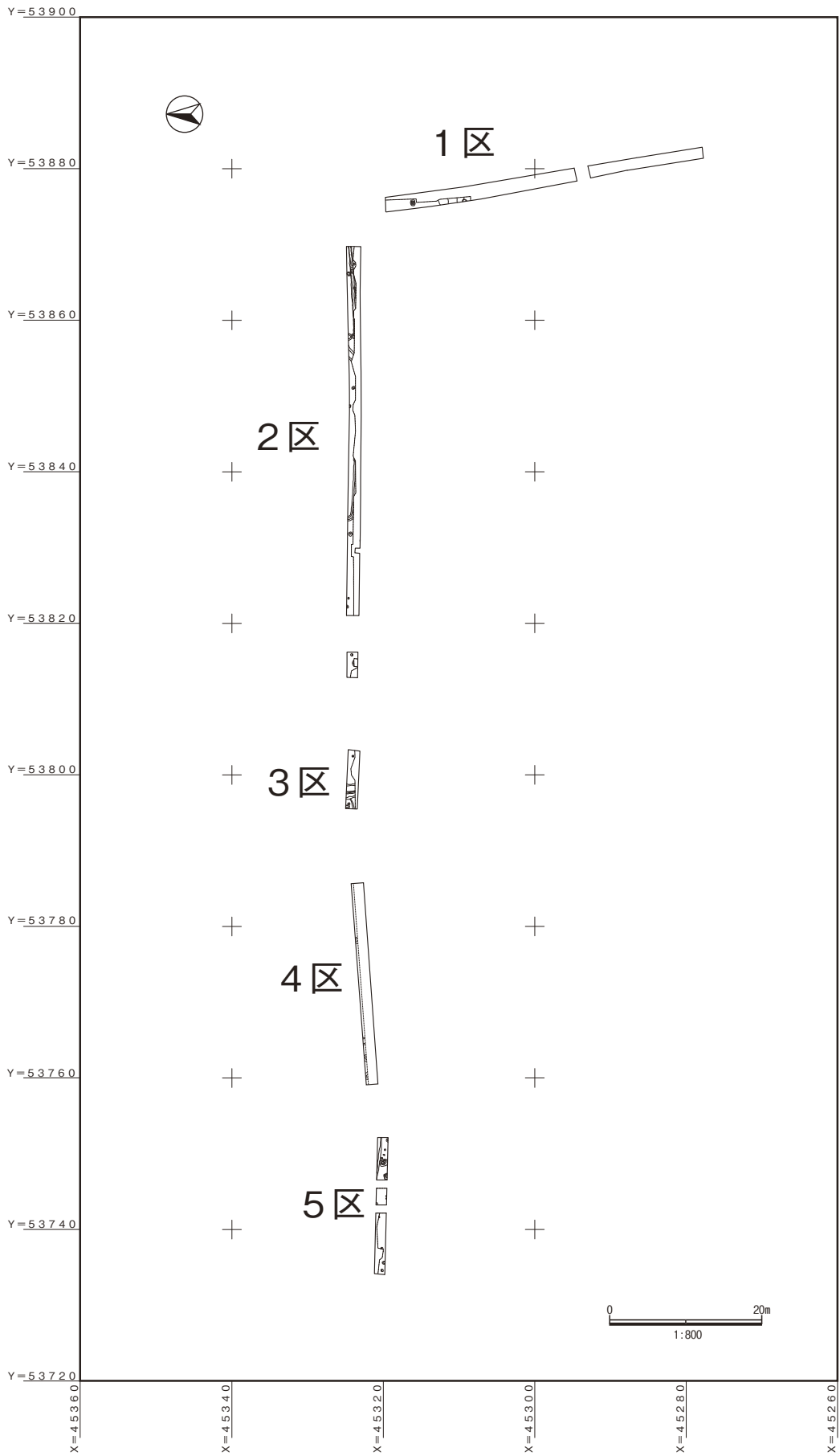
第3図 基本土層図

- I層 盛土層
- II層 10 Y R 3 / 4 暗褐色土層  
今市・七本桜軽石粒を中量混入。やや粘性をもち、締まる。瓦礫道出土層。
- III層 今市・七本桜軽石層
- IV層 7.5 Y R 5 / 8 明褐色ローム層  
赤色粒子を微量混入。粘性をもち、締まる。
- V層 5 Y R 5 / 8 明褐色ローム層  
黒色粒子・赤色粒子を微量混入。粘性をもち、締まる。
- VI層 10 Y R 6 / 8 明黄褐色ローム層  
黒色粒子・赤色粒子を微量混入。粘性をもち、堅く締まる。
- VII層 鹿沼軽石層
- VIII層 10YR5 / 6 明褐色ローム層  
黒色粒子を少量混入。粘性をもち、堅く締まる。
- IX層 10YR8 / 4 浅黄橙色粘土層  
粘性をもち、やや締まる。（市瀬）





第4図 調査区の位置



第5図 調査区方眼図

### 3-3 遺構

今回、調査を行った1～5区は台渡里廃寺跡観音堂山地区との境界線に近い長者山地区の南西部に位置し、大部分がアラヤ遺跡に重複する。観音堂山地区では平成6年に都市計画道路3・6・30号線整備に伴う発掘調査、平成13年に集合住宅建設に伴う発掘調査、平成14年から17年にかけて国の史跡指定に向けた範囲確認調査、平成17年に市道常磐17号線改良工事に伴う調査がそれぞれ実施され、観音堂山地区の初期寺院に関連する区画溝などが検出されている。

今回の調査は、市道改良工事に伴うものであるとともに、長者山地区の正倉域に関連する遺構分布の確認を目的に実施されたものである。以下、各調査区ごとに検出された遺構の説明を行う。なお、ピットの詳細についてはピット一覧表を参照されたい。

#### (1) 1区の遺構

中央近くに工事用基準点が存在するため、その部分をはさんだ北側と南側の2箇所について調査を実施した。北側は長さ23.3m、幅2.0m、南側は長さ17.0m、幅1.5mのいずれも南北に細長い区画である。南北方向に水道管が埋設されていたため、西側の一部を除いて調査を行うことができなかった。表土面より最大1.1mまで掘り下げたが、本調査区では今市・七本桜軽石層の堆積は認められなかった。

遺構としては、北側より溝1条、ピット1基が検出された。南側については全体として攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

##### 1号溝

Ⅱ層下部より掘り込まれているが、正確な掘り込み面は不明である。北側調査区の中央部やや北寄りに位置する。北東より南西方向に直進していたと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の全長は0.6m、上幅2.4m、底幅1.0m、深さ0.7mを測る。主軸の方向はN-82°-Eである。断面は薬研状を呈し、底面はやや起伏をもつ。底面の標高は31.07mを測り、勾配はほとんど認められない。遺物は丸瓦片1点、平瓦片6点、鬘斗瓦1点が出土している。また、覆土の上層から中層にかけて炭化米が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が強い。

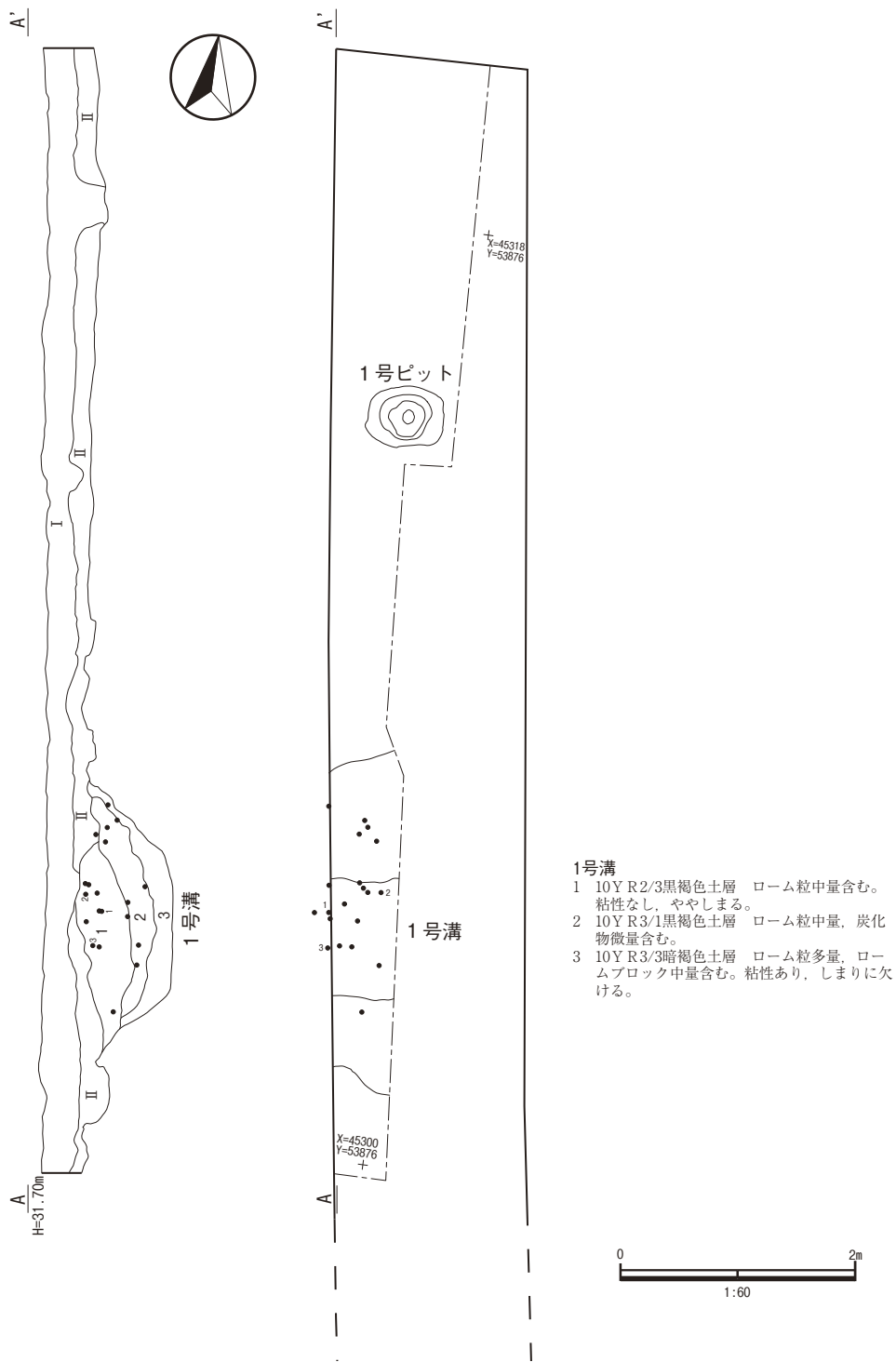
#### (2) 2区の遺構

長さ57.5m、幅1.8mの東西に細長い区画であるが、西寄りの区域では水道管の埋設工事による攪乱が著しかったため、東西幅4.0mにわたって調査を行うことができなかった。また、調査区南半部についても東西方向に水道管が埋設されていたことから、同じく調査を実施することはできなかった。今市・七本桜軽石層上面までの深さは約0.6～1.2mに達した。

遺構は瓦礫道1条、溝3条、土坑1基、ピット12基が検出された。

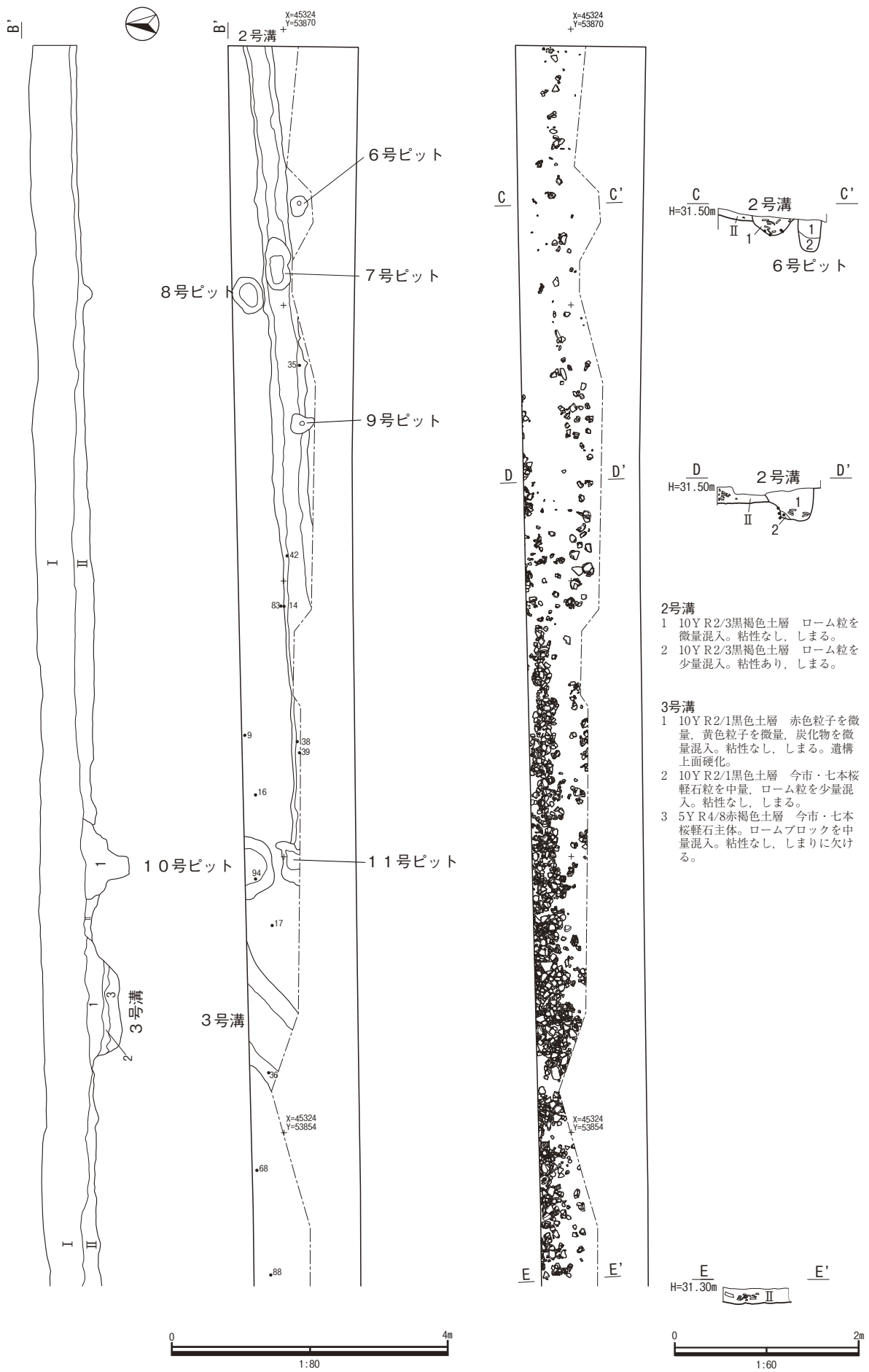
##### 瓦礫道

調査区の東端から中央部西側にかけて大量の古代瓦が敷き詰められた瓦礫道が検出された。Ⅱ区に東接する区域で昭和48年に行われた調査でも「東西に走る“瓦礫道”」（瓦吹 1991）が検出されていることから、今回の遺構はその延長部分と考えられる。瓦礫道はⅡ層中に構築されており、確認部分

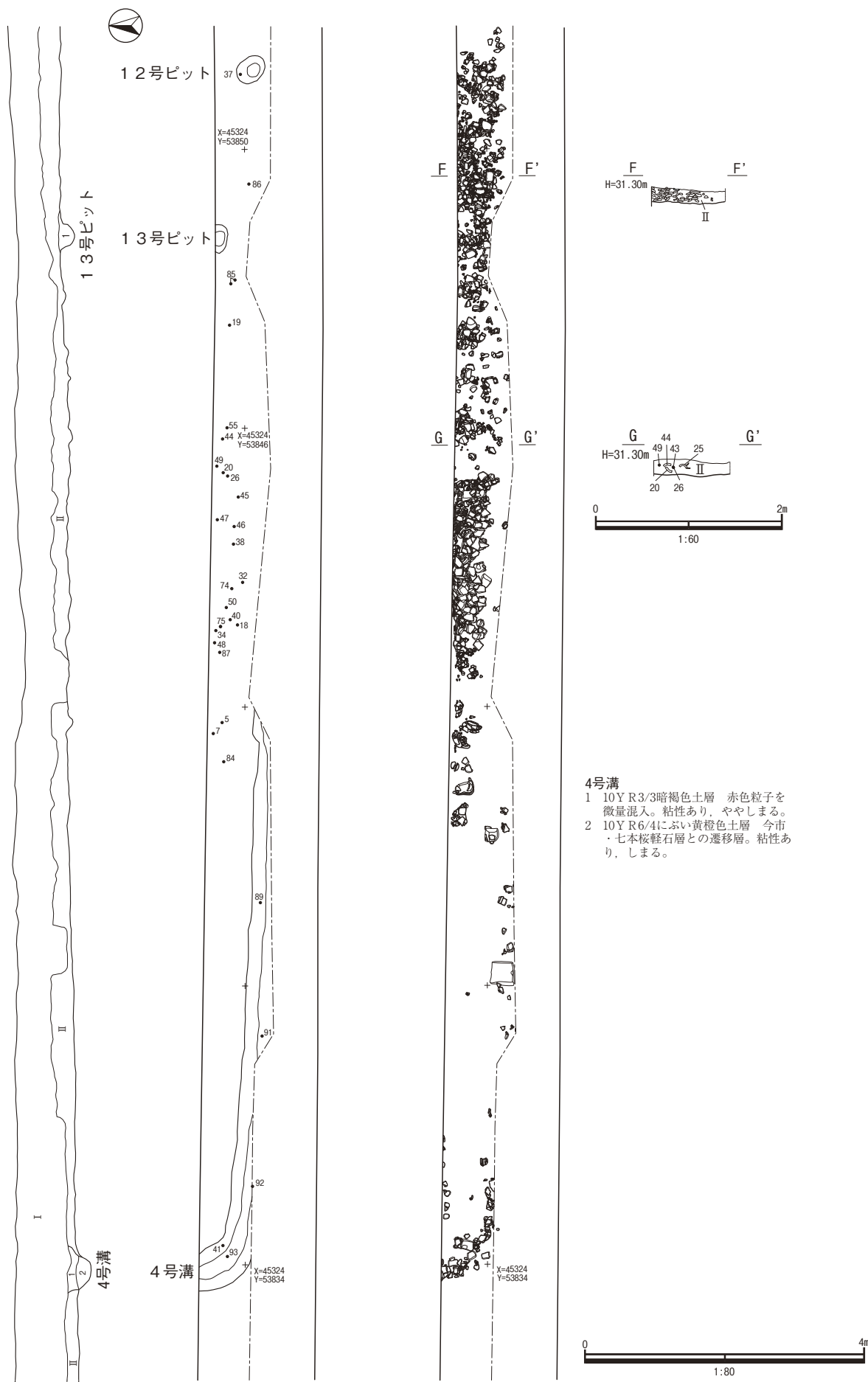


第6図 1区遺構図

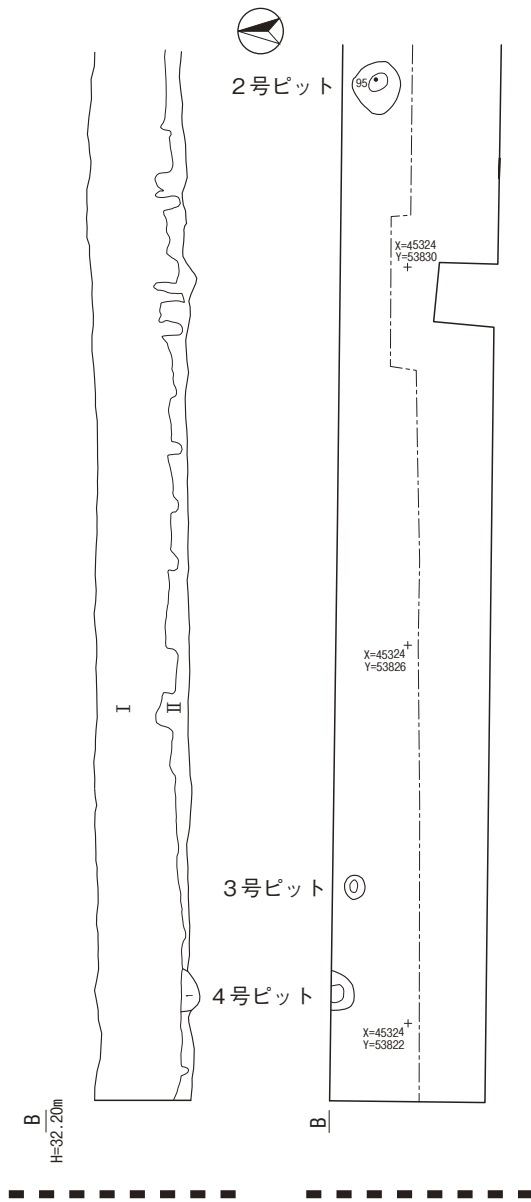
の全長は約 35.7 m, 幅約 1.0 m を測るが、瓦の堆積は調査区外にも続いていることから、瓦礫道の本来の幅はさらに広いものであったと考えられる。瓦礫道の厚さは一定しないが、残存状態の良好な部分では 30 ~ 40cm の範囲にわたって瓦が厚く堆積していた。瓦礫道は南側を東西に走る 2号溝とほぼ並走しており、4号溝と交わる付近で北に曲がることから、三者は密接な関係を有していたことが推測される。



第7図 2区遺構図(1)

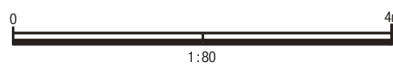
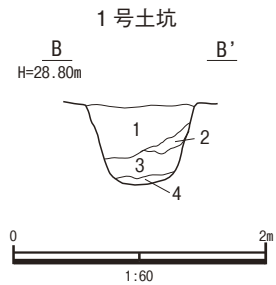
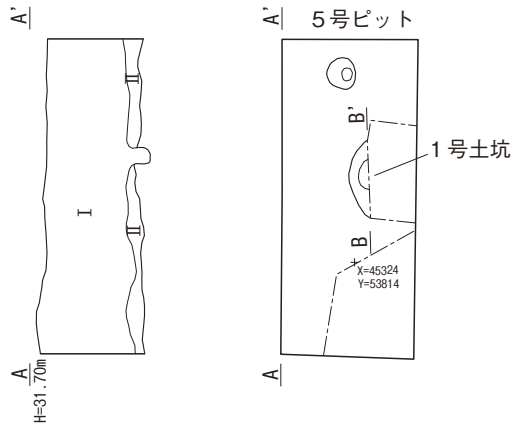


第8図 2区遺構図(2)



1号土坑

- 1 10Y R2/2黒褐色土層 ローム土を多量、ローム粒を多量、ロームブロックを多量混入。やや粘性あり、しまりに欠ける。
- 2 10Y R4/3にぶい黄褐色土層 ローム土、ローム粒主体。粘性あり、しまりなし。
- 3 10Y R6/6明黄褐色土層 ローム土、ロームブロック主体。粘性あり、しまりなし。
- 4 10Y R2/3黒褐色土層 ローム粒を少量、ロームブロックを少量混入。やや粘性あり、やしまる。



第9図 2区遺構図(3)

瓦礫道を構成する瓦の内訳は軒丸瓦片 8 点, 軒平瓦片 52 点, 丸瓦片 263 点, 平瓦片 1,180 点である。その他, 縄文土器片 4 点, 石器 4 点, 須恵器片 12 点, 土師器片 8 点, 中・近世の陶器片 11 点, 磁器片 3 点, 土師質土器片 2 点, 銭貨 (天聖元寶) 1 点, 礎石片 9 点が出土しているが, 瓦礫道はⅡ層中に残されていること, 常滑系の甕の破片が瓦礫道の最下層から発見されていることなどから, 本遺構は中世の所産であった可能性が強い。

## 2号溝

Ⅱ層中より掘り込まれている。調査区東端から中央部西側にかけてほぼ直進しているが, 南側を中心に水道管埋設工事による攪乱を各所に受けている。確認部分の全長は 11.7 m, 上幅約 0.5 m, 底幅約 0.3 m 深さ約 0.2 m を測る。主軸方向は N-84°-E である。断面は葉研状を呈し, 底面はやや起伏をもつ。底面の標高は 31.03 ~ 31.35 m を測り, 東から西に向かってゆるやかに傾斜している。遺物は丸瓦 5 点, 平瓦 28 点, 須恵器甕片 1 点が出土しているが, 瓦礫道からの流れ込みと考えられる。瓦礫道とほぼ並走しており, 側溝的な用途も想定されることから, 本遺構は中世の所産であった可能性が強い。

## 3号溝

Ⅱ層上面より掘り込まれている。北東より南西方向に直進していたと思われるが, 南側は水道管埋設工事によって大きく攪乱されており, 全容は不明である。確認部分の全長は 0.8 m, 上幅約 1.0 m, 底幅約 0.6 m 深さ 0. m を測る。主軸方向は N-43°-E である。断面は葉研状を呈し底面はやや起伏をもつ。底面の標高は 30.74 m を測り, 勾配はほとんど認められない。遺物は平瓦 10 点が出土している。掘り込み面や覆土のあり方などから中世の所産であった可能性が強いが, 上面を瓦礫道が覆っていることから, 瓦礫道より時間的には先行していた可能性が強い。

## 4号溝

Ⅱ層上面から掘り込まれている。2号溝の延長とも考えられたが, 底面標高が異なることから, 4号溝として区別した。確認部分の全長は 8.6 m, 上幅 0.6 m, 底幅 0.2 m を測る。やや弓なりにカーブしながら東西を走っており, 調査区西部で北へ曲がっている。主軸方向は N-89°-E である。断面は葉研状を呈し, 底面はやや起伏をもつ。底面の標高は 30.54 ~ 30.61 m を測り, 東から西に向かってゆるやかに傾斜している。遺物は軒丸瓦 1 点, 軒平瓦 4 点, 丸瓦 12 点, 平瓦 49 点, 熨斗瓦 1 点が出土している。瓦礫道とほぼ並走しており, 側溝的な用途も想定されることから, 本遺構は中世の所産であった可能性が強い。

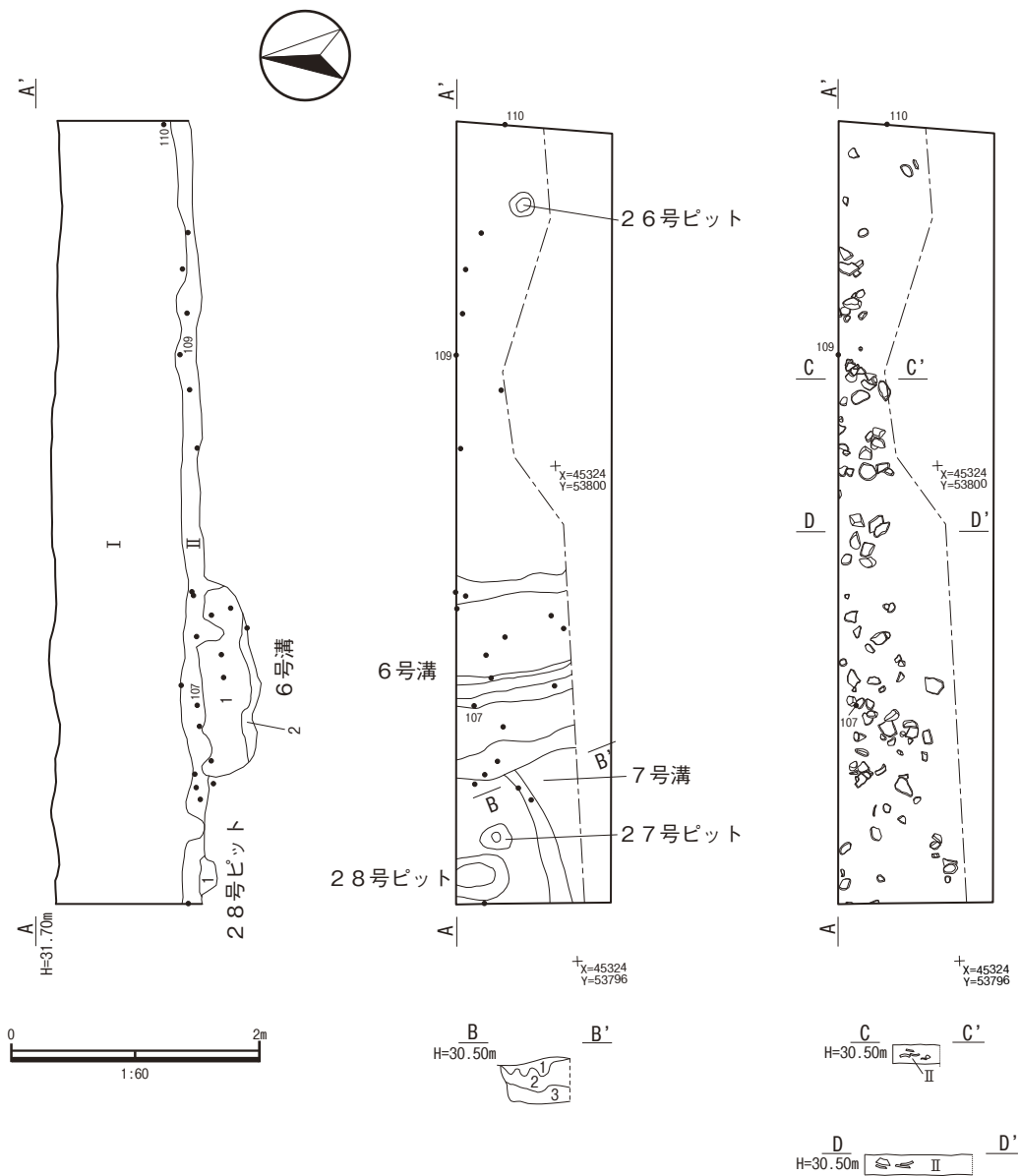
## 1号土坑

Ⅲ層上面で確認されたが, 正確な掘り込み面は不明である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが, 南半分を水道管埋設工事のために破壊されており, 全容は不明である。残存部の東西の径は 74 cm, 深さ 63 cm を測る。断面は挿鉢状を呈しており, 坑底はやや起伏をもつ。遺物の出土はみられなかったが, 覆土のあり方などから判断して近世以降の所産であった可能性が強い。

### (3) 3区の遺構

長さ 6.9 m, 幅約 2.0 m の東西に細長い区画である。調査区南半部については東西方向に水道管が埋設されていたため, 調査を行うことができなかった。今市・七本桜軽石層上面までの深さは約 1.1 ~





**6号溝**

- 1 10Y R2/3黒褐色土層 ローム粒を多量、赤色粒子を少量混入。やや粘性あり、しまりに欠ける。
- 2 10Y R7/3にぶい黄褐色土層 粘土粒を中量、赤色粒子を少量、ローム土を多量、ロームブロックを微粒混入。粘性あり、しまりなし。

**7号溝**

- 1 10Y R3/4暗褐色土層 ローム粒を中量混入。やや粘性あり、ややしまる。
- 2 10Y R2/1黒褐色土層 ローム粒を中量、赤色粒子を微量混入。やや粘性あり、しまる。
- 3 10Y R2/1黒褐色土層 ローム粒を少量、ロームブロックを微量、今市・七本桜軽石層ブロックを微量混入。やや粘性あり、しまる。

第10図 3区遺構図

1.2 mに達した。

遺構は瓦礫道1条、溝2条、ピット3基が検出された。

**瓦礫道**

調査区のほぼ全域にわたって大量の古代瓦が敷き詰められた瓦礫道が検出された。瓦礫道はII層中に構築されており、確認部分の全長は約6.4 m、幅約1.0 mを測るが、瓦の堆積は調査区外にも続いていることから、瓦礫道の本来の幅はさらに広いものであったと考えられる。瓦礫道の厚さは2区に比

べると薄く、12～17cmほどを測る。

瓦礫道を構成する瓦の内訳は軒丸瓦片1点、軒平瓦片4点、丸瓦片20点、平瓦片80点である。遺構のあり方や検出された土層などから、本遺構は、2区の瓦礫道と同じく中世の所産であった可能性が高い。

#### 6号溝

瓦礫道の下部から検出されたが、正確な掘り込み面は不明である。北より南方向に直進していたと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の全長は0.9m、上幅1.6m、底幅1.2m、深さ0.5mを測る。主軸の方向はN-9°-Wである。断面は葉研状を呈し、底面はやや起伏をもつ。底面の標高は29.93mを測り、勾配はほとんど認められない。遺物は平瓦片3点、土師器甕1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

#### 7号溝

瓦礫道の下部から検出されたが、正確な掘り込み面は不明である。東より西方向に直進していたと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の全長は1.2m、上幅0.7m以上、底幅0.5m以上、深さ0.4mを測り、東側を6号溝に切られる。主軸の方向はN-69°-Eである。断面は葉研状を呈し、底面はやや起伏をもつ。底面の標高は29.98～30.20mを測り、東から西に向かってゆるやかに傾斜している。遺物の出土はみられなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。切り合い関係を見ると6号溝に先行する。

### (4) 4区の遺構

長さ29.0m、幅約1.5mの東西に細長い区画である。調査区の大半は水道管理設工事によって破壊されていたため、北側のごく狭い範囲を除いて調査を行うことができなかった。今市・七本桜軽石層までの深さは約1.1～1.5mに達した。

遺構は土坑3基、ピット1基が検出された。5～7号土坑は調査区の西側にほぼ等間隔で分布しており、何らかの施設に伴うものであった可能性が高い。

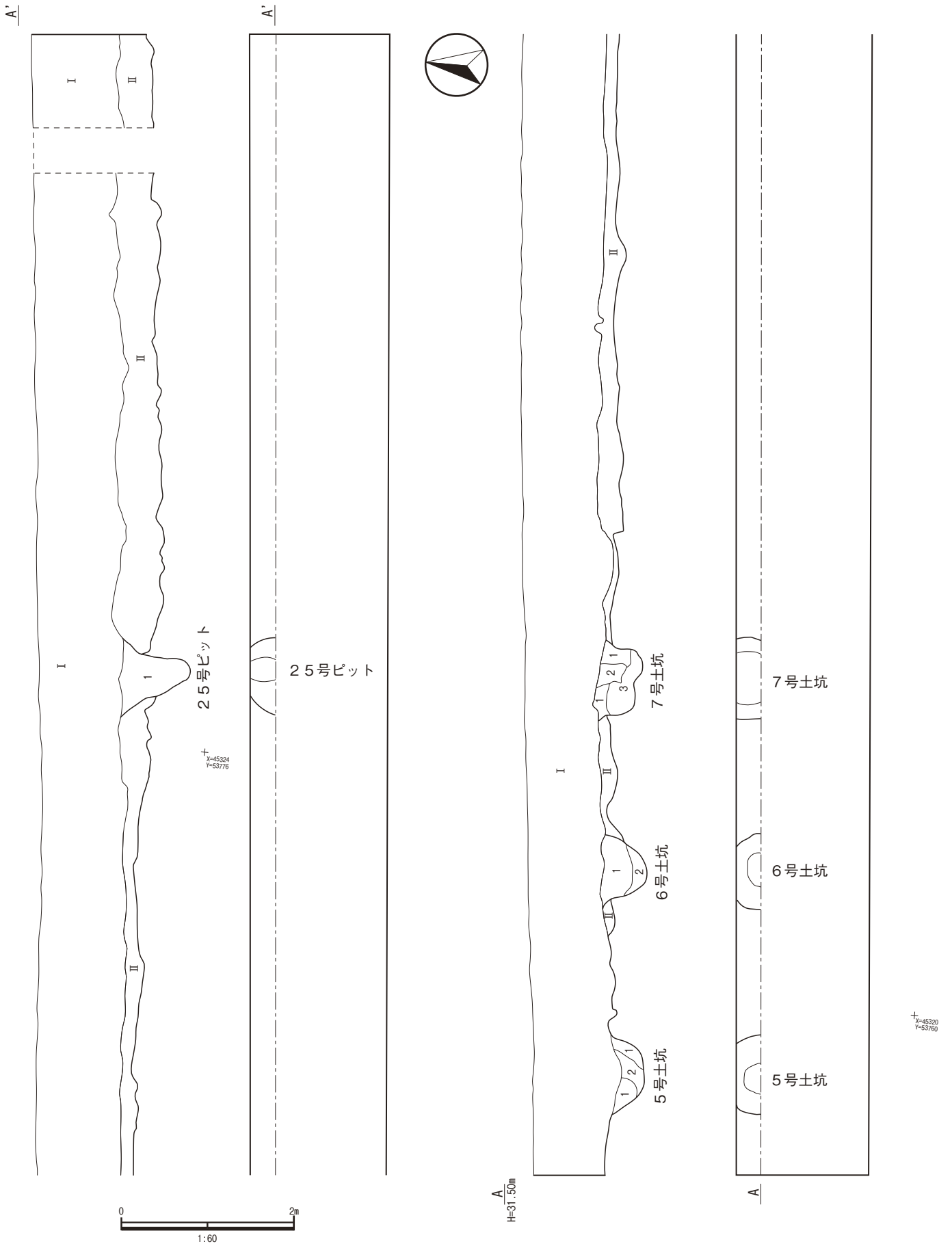
#### 5号土坑

上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。残存部の東西の径は65cm、深さ38cmを測る。断面は鍋底状を呈しており、坑底はやや起伏をもつ。遺物は平瓦片1点が出土しているが、覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

#### 6号土坑

Ⅱ層上面より掘り込まれている。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。残存部の東西の径は84cm、深さ52cmを測る。断面は筒状に近く、壁は比較的急傾斜で掘り込まれている。坑底はやや丸みをもつ。遺物は種別不明の瓦片1点が出土しているが、掘り込み面や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

#### 7号土坑



**5号土坑**

- 1 10Y R2/3黒褐色土層 粘土粒を多量、鹿沼軽石粒を少量、ロームブロックを少量混入。粘性あり、ややしまる。
- 2 10Y R2/3黒褐色土層 粘土粒を少量混入。粘性あり、ややしまる。

**6号土坑**

- 1 10Y R2/3黒褐色土層 粘土粒を少量、ローム粒を少量、ロームブロックを少量、赤色粒子を微量混入。粘性、しまりに欠ける。
- 2 10Y R2/3黒褐色土層 粘土ブロックを中量、粘土粒を少量、ロームブロックを中量、ローム粒を少量混入。粘性、しまりに欠ける。

**7号土坑**

- 1 10Y R2/2黒褐色土層 今市・七本桜軽石粒を少量、ロームブロックを少量、ローム粒を少量、粘土粒を少量混入。やや粘性あり、しまりに欠ける。
- 2 10Y R2/2黒褐色土層 今市・七本桜軽石粒を少量混入。やや粘性あり、しまりに欠ける。
- 3 10Y R3/3暗褐色土層 ロームブロックを中量、ローム土を多量混入。やや粘性あり、しまりに欠ける。

第 11 図 4区遺構図

Ⅱ層上面より掘り込まれている。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。残存部の東西の径は95 cm、深さ50 cmを測る。断面は筒状に近く、壁は比較的急傾斜で掘り込まれている。坑底はやや起伏をもつ。遺物は縄文土器片1点が出土しているが、掘り込み面や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が強い。

### (5) 5区の遺構

長さ18.0 m、幅約1.5 mの東西に細長い区画である。調査区の中央部近くに2個所にわたって水道管が南北に埋設されていたため、この部分については調査を行うことができなかった。また、調査区の西半部でも、北側を中心に東西方向に水道管が埋設されていたことから、同じくこの部分については調査を実施することができなかった。今市・七本桜軽石層上面までの深さは約0.7～0.9 mに達した。

遺構は溝1条、土坑2基、ピット11基が検出された。

#### 5号溝

上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。南東より北西方向にほぼ直進していたと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部分の全長は5.5 m、上幅0.6 m以上、底幅0.4 m以上、深さ0.5 mを測る。主軸の方向はN-84°-Wである。断面は薬研状を呈し、底面はやや起伏をもつ。底面の標高は30.08～30.10 mを測り、勾配はほとんど認められない。遺物は平瓦片2点、須恵器甕片2点が出土したが、覆土のあり方などから判断して近世以降の所産であった可能性が強い。

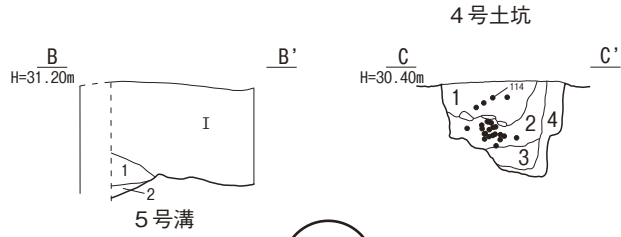
#### 3号土坑

上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。平面形は隅丸方形を呈するものと思われるが、ごく一部が確認されただけであり、全容は不明である。確認部の東西の径は80 cm以上、深さ60 cmを測る。断面は筒状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底はやや起伏をもち、中央部近くが一段深く掘りくぼめられていた。覆土は粘土層を主体としており、中央に柱痕跡とも思われる黒褐色土層が認められたことから、本土坑は古代の掘立柱建物の柱穴であった可能性が強い。遺物の出土はみられなかった。

#### 4号土坑

上面を削平されているため、掘り込み面は不明である。一部を5号溝によって切られているが、平面形は隅丸方形を呈し、長径102 cm、深さ76 cmを測る。断面は筒状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底の一部が一段深く掘りくぼめられており、上部には河原石や古代瓦が敷き詰められていたことから、本土坑は、3号と同様、古代の掘立柱建物の柱穴であった可能性が強い。遺物は平瓦片6点、土師器坏片2点、土師器甕片3点が出土した。

(市瀬)



5号溝

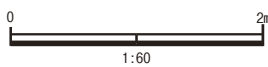
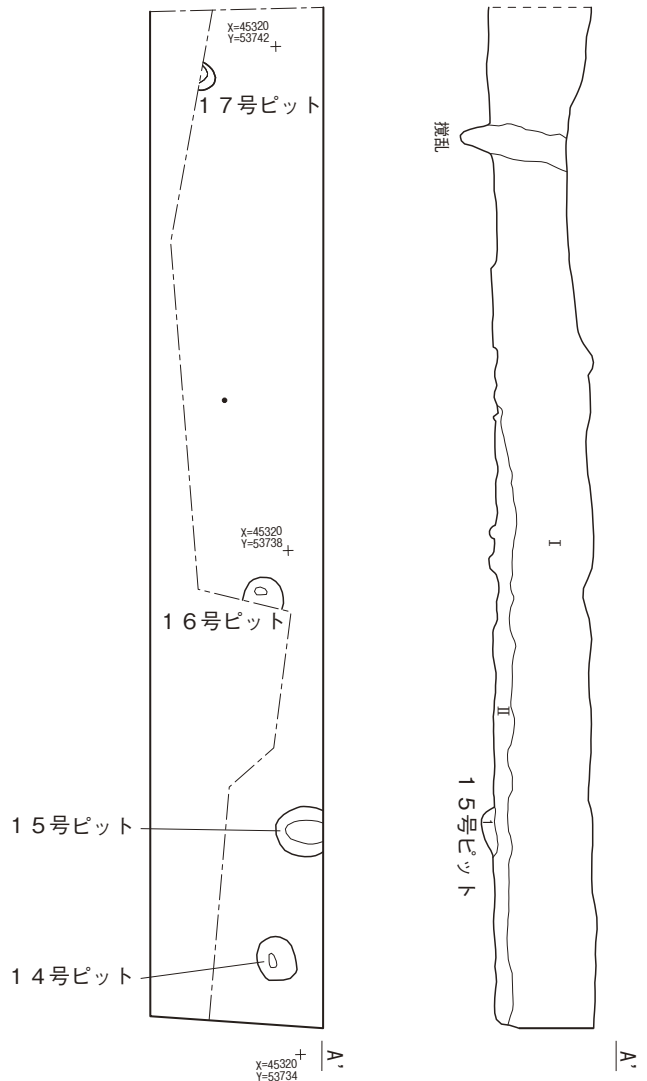
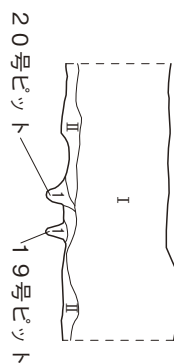
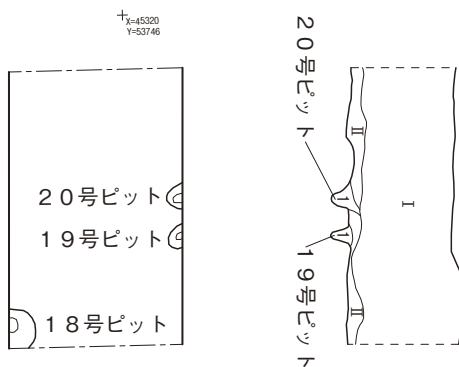
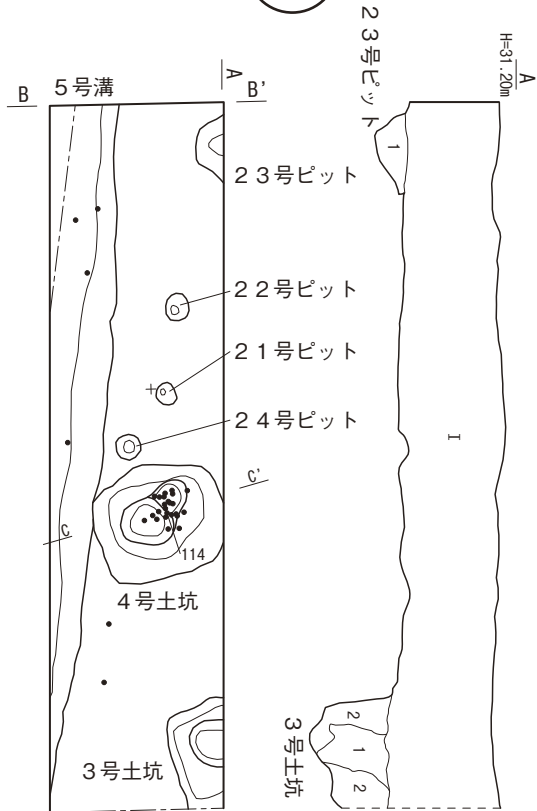
- 1 10Y R2/3黒褐色土層 ローム粒を微量, 黄色粒子を微量, 黒褐色粒子を微量, 砂粒を微量, 炭化物を微量混入。粘性あり, ややしまる。
- 2 10Y R2/3黒褐色土層 ローム粒を少量, 黄色粒子を少量混入。粘性あり, しまる。

3号土坑

- 1 10Y R2/2黒褐色土層 粘土粒を少量, ローム粒を中量混入。粘性あり, ややしまる。
- 2 10Y R2/3黒褐色土層 粘土主体。ロームブロックを中量混入。粘性あり, しまる。

4号土坑

- 1 10Y R2/2黒褐色土層 粘土粒を少量, 橙色粒子を微量混入。粘性あり, しまる。
- 2 10Y R3/2黒褐色土層 粘土粒を微量, 今市・七本桜軽石粒を微量混入。粘性あり, しまる。
- 3 10Y R3/2黒褐色土層 粘土粒を微量, ロームブロックを中量, 今市・七本桜軽石層ブロックを中量混入。粘性あり, しまる。
- 4 10Y R8/4浅黄橙色土層 粘土主体。粘性あり, しまる。



第12図 5区遺構図

第2表 ピット一覧

遺構番号	調査区	平面形態	規模 長径 (c m)	規模 短径 (c m)	断面形態	確認標高 (m)	確認面からの 深さ (c m)	出土遺物
P1	1	楕円形	64	54	逆台形	31.72	42	-
P2	2	不整楕円形	57	50	逆台形	30.72	37	平瓦
P3	2	楕円形	25	22	逆台形	30.68	12	-
P4	2	-	35	(35)	逆円錐形	30.66	11	-
P5	2	円形	32	-	浅逆台形	30.53	27	-
P6	2	不整楕円形	32	27	逆円錐形	31.32	36	-
P7	2	楕円形	54	26	浅逆台形	31.29	6	-
P8	2	楕円形	49	40	逆台形	31.27	13	-
P9	2	楕円形	27	20	逆円錐形	31.27	30	-
P10	2	-	50	-	有段	31.02	12	須恵器
P11	2	-	55	-	逆台形	31.08	17	
P12	2	-	38	22	浅逆台形	31.01	13	-
P13	2	不整楕円形	40	15	浅逆円錐形	31.01	20	-
P14	5	楕円形	33	30	有段	30.20	29	-
P15	5	楕円形	(39)	(38)	浅逆台形	30.21	13	-
P16	5	-	-	(31)	逆台形	30.18	6	-
P17	5	-	-	(24)	逆台形	30.20	34	-
P18	5	-	32	(32)	逆台形	30.20	22	-
P19	5	-	33	(18)	逆台形	30.18	5	-
P20	5	-	31	(21)	逆台形	30.18	4	-
P21	5	円形	16	-	逆台形	30.26	17	-
P22	5	楕円形	22	18	逆円錐形	30.26	16	-
P23	5	-	-	(55)	逆台形	30.23	16	-
P24	5	円形	20	-	逆台形	30.26	11	-
P25	4	-	-	(90)	有段	30.22	80	釘
P26	3	円形	20	-	有段	30.42	10	-
P27	3	楕円形	25	20	浅逆台形	30.30	10	-
P28	3	-	-	(45)	浅逆台形	30.30	14	-

### 3-4 遺物

今回の調査地点からは縄文土器、石器、土師器、須恵器、古代瓦、カワラケ、陶器、磁器、砥石、銭貨、釘、鉄滓、礎石片などが遺物収納箱にして28箱分、約2,469点、378.481kgが出土した。2区及び3区検出の瓦礫道から出土した遺物が大半であり、全体の約76%、1,892点、300.570kgにのぼる。主体となるのは古代瓦であり、遺物全体の7割以上を占める。土師器や須恵器類は細片が多く、時期の判定の困難なものが多い。

#### 1. 土器

縄文土器4は2区より出土している。「く」字に屈折する口縁部をもち、屈折先端には刻み、その下位にLR縄文を施すもので、後期堀ノ内1式に比定できる。

土師器・須恵器は遺構に伴うものを中心に掲載した。2の土師器坏は1号溝の中層から出土している。表面に墨書で「上」が書かれている。1の須恵器高台付碗は1号溝の中層からの出土で、胎土に海綿骨針や砂礫を含むことを考えると木葉下窯産、器形と法量からTE4段階（8世紀第2四半期）のものと考えられる。94の須恵器坏は10号ピットからの出土で、器形から8世紀第4四半期から9世紀第1四半期頃のものと考えられる。2区瓦礫道から出土の86のカワラケ、84・85の常滑産甕、3区瓦礫道出土の110の内耳土器は瓦礫道に伴って出土したもので後述する銭貨とともに、瓦礫道の時期決定の決め手となる遺物である。86はロクロカワラケである。器形から15世紀のものであろう。84と85の常滑産甕は2区瓦礫道直下から出土し瓦礫道築造時期に直結する遺物だが、底部及び胴部の一部のみであることから年代は不明である。しかし、この存在から、瓦礫道築造は古代まで遡らないであろう。110の内耳土器耳部は3区瓦礫道から出土した。耳部の貼り付け方や胴部の立ち上がり方より15世紀頃のものと考えられる。9の須恵器高台付壺は形状や黒色物の存在から堀ノ内窯群産、時代は8世紀後半の時期をあてることができる。114の土師器甕底部は4号土坑から出土している。器面を縦方向の細いヘラケズリで整形していることから常総型甕の可能性が高い。83は2区瓦礫道中層から出土した近世瀬戸・美濃系陶器皿とみられる。118は2区瓦礫道上層から出土した肥前系染付草花文皿である。時期は18世紀頃と考えられる。これにより瓦礫道が18世紀まで利用されていた可能性も考えられる。

#### 2. 石器

石器はすべて2・3区の瓦礫道周辺から出土している。縄文時代の石器は磨石（5・6・103・104・105）、石皿・蜂の巣石（7・8・106）、礫器（115）、石核（116）が出土している。87の砥石は砂岩製の荒砥である。中央部2面が窪み、よく使用されていたことをうかがわせる。中世以降の所産と考えられる。

#### 3. 瓦

瓦礫道を中心に多量に出土した。すべて古代瓦である。数量の詳細は第10表を参照されたい。軒丸・軒平瓦の型式分類は茨城県立歴史館の分類（茨城県立歴史館 1994）に基づいている。

##### ①軒丸瓦

出土点数は14点、図示し得たものは8点、すべて表採または2・3区瓦礫道の出土である。8点中瓦当面が大きく残るものは107のみで、残りの7点は瓦当面がごく一部残存するのみである。107は瓦当面残存が約60%で丸瓦部は僅かしか残っていない。型式は3112型式の素文八葉細弁花文軒丸瓦で、

高井悌三郎氏の報告（高井 1964）で軒丸瓦Ⅷ類として図示されているものと色調、形状および細弁の傷が一致するため、同一の范を使用した可能性が高い。同様に『茨城県における古代瓦の研究』P 22に図示されているものも同范とみられる。高井氏報告のものより107のほうが范傷が少ないように見受けられ、107が先行して作られたと想定される。17は3121型式と思われる。16は3117型式と思われるものである。15は周縁部のみが残存し、鋸歯状の突起を有することから3117型式か3118型式と考えられる。13は周縁部と内・外区の一部が残存するもので、3108型式であろう。13と15は胎土に海綿骨針や砂礫を含むことから木葉下窯産であろう。97は外区から内区の一部が残存するもので、3126型式と思われる。12は周縁部と内・外区の一部が残存していて形状から3120型式であろう。14は周縁部のみ残存で、3122型式である。

以上が今回出土し掲載した軒丸瓦であるが、出土個数からみても多くのバリエーションを持って出土していることがわかる。出土遺物どうして同一種の范型を用いたものが出土しなかったため范の傷による先後関係は判明しなかったが、107の軒丸瓦から今後の課題もみつけられよう。すなわち、同一の范を使用した軒丸瓦の范の傷による先後関係とその出土位置関係、また軒丸瓦の范の傷による先後関係でみた窯跡を含めた遺物の相対的な時代設定、出土した同一の種類 of 軒丸瓦をもって同一時期に使われた范型の個数の設定、などである。

## ②軒平瓦

出土点数は57点を数える。平瓦部の厚さにより軒平瓦と分類したものや、瓦当面が残存するものの、ごくわずかしかなかったものが大半である。すべて2・3区瓦礫道及びそれに伴う溝（2・4号溝）からの出土である。瓦当文様は重弧文7点、菱文6点、矢羽文・素文1点で、残りが文様不明である。21の素文式軒平瓦は瓦当面中央部が残存する。凹面は布目と釈読不能のヘラ書きが残る。素文の曲線顎軒平瓦なので3233型式であろう。20は瓦当面に対し左側から中央部にかけて残存するもので、菱文式軒平瓦である。曲線顎で大きな菱文とそれを大きな方形で区画しているものなので3280型式であろう。中央の弧線上に范の傷がみえること、菱文が磨耗しつつあることからそれなりに使用された范で作られたものと考えられる。18は瓦当面、左側が残存し、20より小さな菱文がみられる。区画も整然と作られ、曲線顎を持つ事から3281 b型式であろう。また、下段左端の菱文の一枝が欠損し、三枝に見える。98は瓦当面に対し右側が残存している。曲線顎で中央部付近で大きく范が瓦当面よりはみ出している粗雑なつくりである。菱文も磨耗度が大きくかなり使用された范と思われる。18・20・98は胎土から木葉下窯産であろう。22は瓦当面中央部が残存していて、中央の弧線に范傷が見える。23は瓦当面に対し左側端が残存し、范はやや磨耗が進行している。24は瓦当面中央部の上段が残存している。22・23・24は顎の形態が不明であるが瓦当面の厚さと菱文の大きさ、区画の広さから3282型式の可能性が高い。98は曲線顎で瓦当面の形態から3282型式であろう。108は右向きの矢羽状の凸線を施すものである。瓦当面のごく一部が残存して、葺土が付着している。曲線顎で3294型式である。色調・胎土より原の寺瓦窯産の可能性が考えられる、19は瓦当面が欠損しているが厚さと形状から見て軒平瓦と判断した。また、性格は不明であるが、凹面に7箇所以上の指頭圧痕状の強い窪みが見られる。

## ③丸瓦



丸瓦は357点出土した。数量的にはヘラケズリ・ナデ瓦が約70%、泥条盤築技法の瓦が10%の割合で出土している。25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・89・90・109が丸瓦である。このうち玉縁付丸瓦は29・89・109である。泥条盤築技法で作られたものは30・32・34である。これらを含め、図示しなかったが同技法で造瓦された瓦ほぼ全てに海綿骨針や砂礫を含むという特徴が見出される。よって泥条盤築技法は主に木葉下窯やその周辺で生産されたものであろう。26・27・30・31にはヘラ書きがなされ、特に26には焼成前にヘラで書かれた「徳」字が見られる。27・30・31は判読不能のヘラ書きが施される。玉縁付丸瓦は未掲載の遺物を含め、すべて胴部と玉縁を一体の粘土で作られ、肩部に粘土を継ぎ足す手法を用いている。このように丸瓦はヘラケズリ・ナデ瓦が中心になっており、これが当遺跡の特徴なのか地区ごとの特徴なのかは今後の調査における資料の蓄積を待ちたい。また、泥条盤築技法の瓦がどの窯でどの時期を中心に作られたかについても今後の課題となる。

#### ④平瓦

今回の調査で出土した平瓦は1,652点を数える。格子叩きと縄叩き、ヘラケズリ・ナデ、その他の各瓦数量の比率は2:1:6:1となり、ヘラケズリ・ナデの平瓦が過半を占める。過去の調査や研究において格子叩きの瓦は観音堂山地区や南方地区に多く、ヘラケズリ・ナデ瓦は長者山地区に多いという相違がわかっている。格子叩きの瓦とヘラケズリ瓦の割合や後述する文字瓦から、瓦礫道は観音堂山地区や南方地区からも瓦が一部搬入されてつくられた可能性がある。以下では凸面の調整を中心に説明する。

##### 「正格子叩き」

正格子叩き平瓦は格子の大きさにより、4～6mmの方形の格子を持つもの（格子目小）とそれ以上のもの（格子目大）2種類に分類した。格子目小は格子叩き瓦の多数を占め掲載したものは36・37・38・45・48・52・55・58・73・75・95である。ほぼ1枚作りで造瓦される。45・55の凹面には粘土の継ぎ足し痕が残る。48の凹面には判読不能のヘラ書きが施されている。また他の平瓦より厚手（約3.5cm）であることから軒平瓦の可能性もある。格子目大のものは68・70・71である。68が約30×30mmの方形、70・71が約5×10mmの方形で71の凹面には粘土紐輪積み技法の痕跡がのこる。

##### 「菱形格子叩き」

菱形格子叩きの平瓦は44・59・72・93である。全て3～4mmの菱形で叩かれている。44は枳板の幅は不明だが模骨痕の残る桶巻き作りのものである。

##### 「梯子状格子叩き」

これは47・56・63である。この叩き痕を持つ平瓦は原の寺瓦窯に多く見出される平瓦で、その窯で焼成された可能性が高い。47は叩き痕のあり方より一人の工人が側縁から中央部を叩いた後、外縁へ3単位にわたり叩いていくという造瓦方法がわかる資料である。

##### 「縄叩き」

通常よく見られる縄叩きの平瓦（縄大）と、縄が他の大多数の太さよりあきらかに細かい縄をもつ平瓦（縄細）の2種類がある。縄大は41・51・57・61・69・74・91・92・102・111である。102には「廣」の篋書き文字が施される。縄細は40・46・62で、40は枳板幅が3.1cmを計る桶巻き作りのものである。3点とも胎土に海綿骨針が含まれ木葉下窯産のものと想定される。全体的に縄叩き平瓦に共通す

ることとして、側面の面取りを3回行うものが多く注意される。

#### 「平行叩き」

42・64は平行叩きを施すものである。42は厚手で(2.9～3.5 cm)、軒平瓦の可能性はあるが、細片のため確証が無く、こちらに分類した。

#### 「ヘラケズリ・ナデ整形」

43・50・53・54・65・78・79は凸面をケズリやナデを施すものである。50には釈読不能のヘラ書きが施される。43は枳板幅3.7 cmの桶巻き作り、53は泥条盤築技法で造瓦されている。78には深さ2～3 mmの焼成前につけられた沈線が横走している。沈線の上にも粘土が貼り付けられているので、軒平瓦の瓦当面を貼り付ける際のあたりや、隅切瓦等製作時の分割界線等が考えられるが、その性格は不明である。

以下は特殊な凸面叩きを施すものである。

100は叩き具の形状は不明だが肋骨状となる痕跡を残すものである。多方向から叩かれているがその後ナデ整形をおこなっているため詳細は不明である。この瓦は凹面に枳板痕を残し、幅も6.7 cmを計る桶巻き作りのものである。また胎土に海綿骨針を多量に含むことより木葉下窯群産のものであろう。77は凸面に布目が残るものである。凹面にはナデで調整がなされている。1枚作り。49は横方向の刷毛目が施されたものである。39・99は「米」や「田」状の字が彫られた叩き板で叩かれた変形格子叩きである。これは形状より菱文や矢羽文等の軒平瓦瓦当面を用いて叩かれている可能性があるが、叩き目の規則性が見出せなかったため変形格子目叩きとして報告した。76は大小2種類の格子目を持つもので、76は大格子目約5×11 mm、小格子目約5×5 mm。小格子目を叩いた後大格子目を叩いている。大格子目は叩き板の形状なのか范の修復痕なのかは不明だが、格子の短辺を削り取る形で幅7 mmの溝状になっている。造瓦方法は不明だが、桶巻き作りで複数の工人がそれぞれ異なる叩き板を用いて叩いた可能性を指摘できる資料である。67は細かい目の縄叩き後、菱形格子叩きを施している資料である。また、叩き板は不明だが66は全面に葺土が多量に付着しているもので、使用された場所を想定できる資料である。

#### 「糸切り痕」

叩き板ではないが凸面に糸切り痕の残る平瓦も出土している。35は糸切り痕が残る瓦である。このタイプの平瓦は主に梯子状平瓦と同様に原の寺瓦窯で焼かれたものが多く、これも同窯産であろうか。

以上掲載した平瓦に対して観察してきたが、なかでも特殊な叩き板を用いた平瓦が特筆されるであろう。これは特殊な形状の格子のためそこから後述する叩き目の変遷を追うことが容易に可能になる資料である。今後このような資料の蓄積を待ちその種類や焼かれた窯、叩き板の時間的変遷や工人の移動まで造瓦や遺物の帰属年代の研究を考える上での一助となるであろう。

#### ⑤ 熨斗瓦

熨斗瓦は17点出土し、掲載したものは6点である。3・80・81・82・101・112である。101は18×10 mmと7×9 mmの2種類の叩き板を用いた格子叩きである。101は前述した平瓦と同様の想定が可能である。3・81は平瓦同様、原の寺瓦窯産であろう。112は平瓦60と共に後述する。両側縁部が

残る熨斗瓦は出土しなかったため、分割した側縁部の調整はどれも不明である。

その他、特筆できる瓦に軒平瓦の瓦当范で凸面を叩く瓦が2点出土している。60は平瓦で3280もしくは3281型式の軒平瓦瓦当范を、112は熨斗瓦で3281もしくは3282型式の軒平瓦瓦当范を用いて叩くものである。文様は摩滅して范傷も多く、范の損傷は激しい。不必要となった瓦当范を利用したものであろうか。また、平瓦に軒平瓦瓦当范が使用されていることから、想像以上に造瓦工人の横の繋がりがあることが指摘できる。これら軒平瓦瓦当范が使用された瓦は台渡里廃寺やその周辺遺跡からの出土例はほぼ無いが、これからの調査に期待し資料の蓄積を待ちたい。

#### 4. 釘・鉄滓・銭貨・礎石片

この他の出土遺物として、釘・鉄滓・銭貨・礎石片があげられる。釘は3本出土している。掲載した113は25号ピットから出土したもので、多量に錆が付着して断面形や頭部形状等は不明である。116の鉄滓は5区の表土から出土したもので、113gを計る。88の銭貨は天聖元寶の篆書で初鑄は中国北宋時代の1023年である。天聖元寶は水戸市内でも水戸城跡からも数例出土している。

#### 5. 文字資料

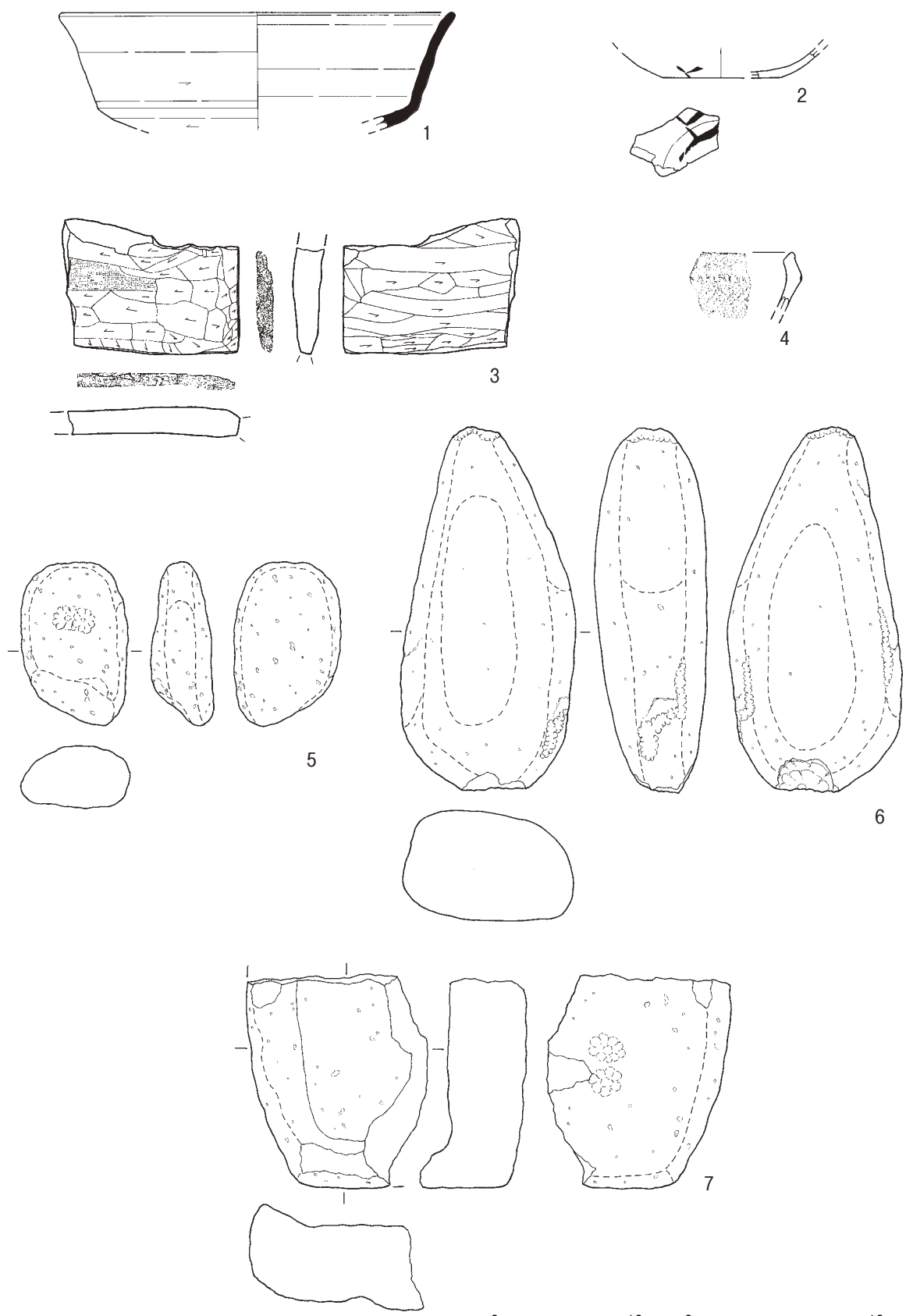
##### ①墨書

今回出土した墨書文字資料は2の「上」のみとなる。これは土師器坏の体部下位から底部にかけて正位で書かれている。「上」以外の文字の存在は不明である。

##### ②篋書き

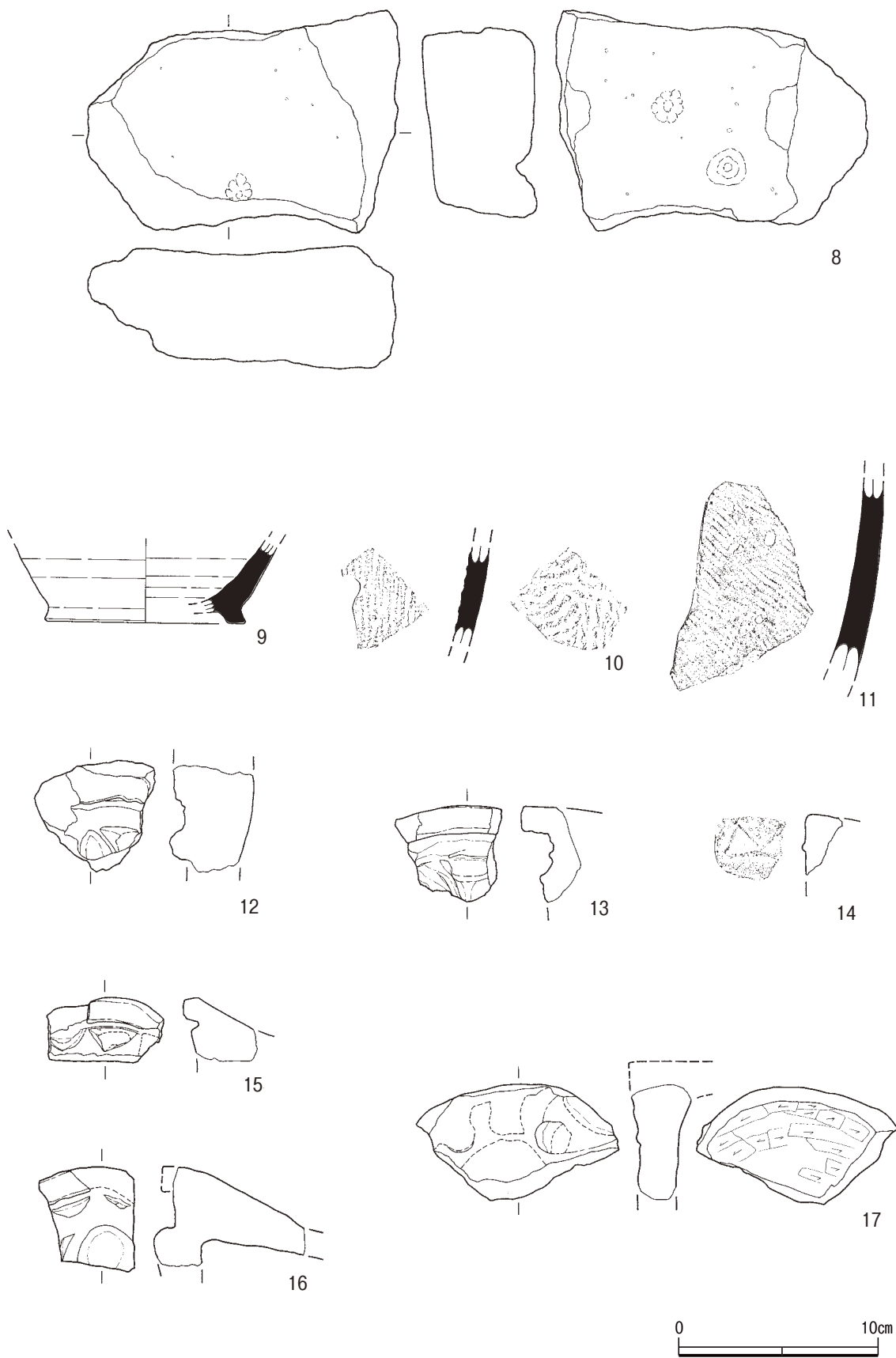
今回出土した篋書きが施される瓦は26・27・30・31・48・50・79・102である。うち27・30・31・48・50・79は積読不能の瓦である。ここでは積読可能な瓦をみていきたい。26は「徳」が書かれている。これは過去の出土例から寺名である「徳輪寺」の「徳」部として考えるのが妥当であろう。文字の大きさや筆記工具は水戸市教育委員会がおこなった台渡里廃寺跡の範囲確認調査で出土した「輪寺」銘瓦や「輪」銘瓦に近く、「輪寺」銘瓦の「寺」第2画のような短い縦線を斜方向に書く等など、共通する特徴を備えている。また、過去に確認された「徳輪寺」銘を持つ瓦は筆者が確認できた範囲では5例あり、そのうち「徳」字が書かれたものは3例を数える。現在財団法人辰馬考古資料館に収蔵されている「徳輪寺」の「徳」部とは1画目と2画目のバランスや、4画目縦線の下げ方、心画の書き方がはっきりと違い、書く部位の違い（凸面と凹面）と同様書いた工人の相違がわかるものである。102の「廣」は那賀郡に廣島郷が存在することから、その郷名を示したとも考えられる。以上、文字瓦を見てきたが、「徳」字を記した文字瓦が存在したことから、瓦礫道の瓦は観音堂山地区や南方地区から搬入された可能性が指摘できる。

(林)

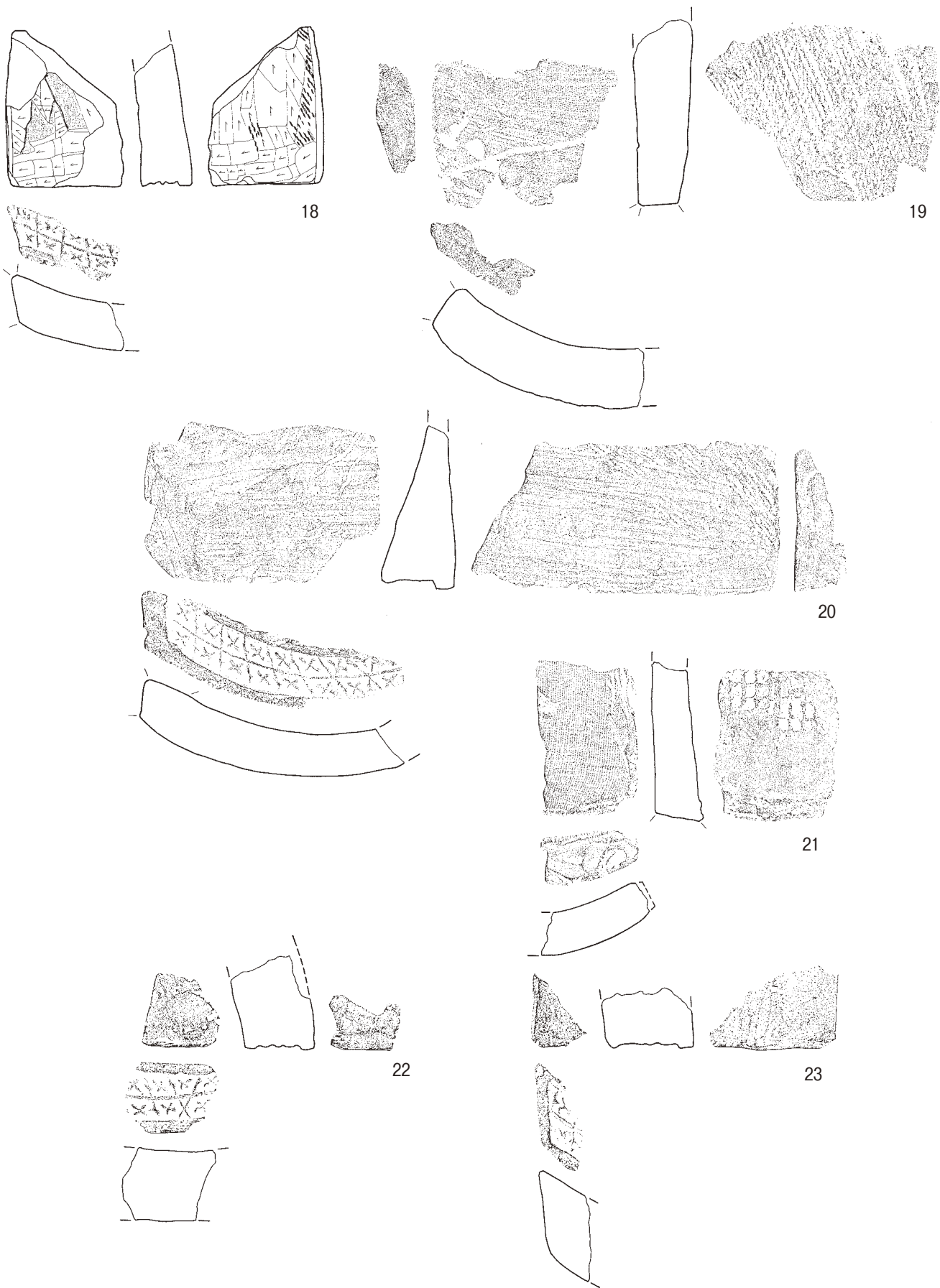


0 10cm (3) 0 10cm (1·2·4~7)

第 13 图 出土遺物 (1)

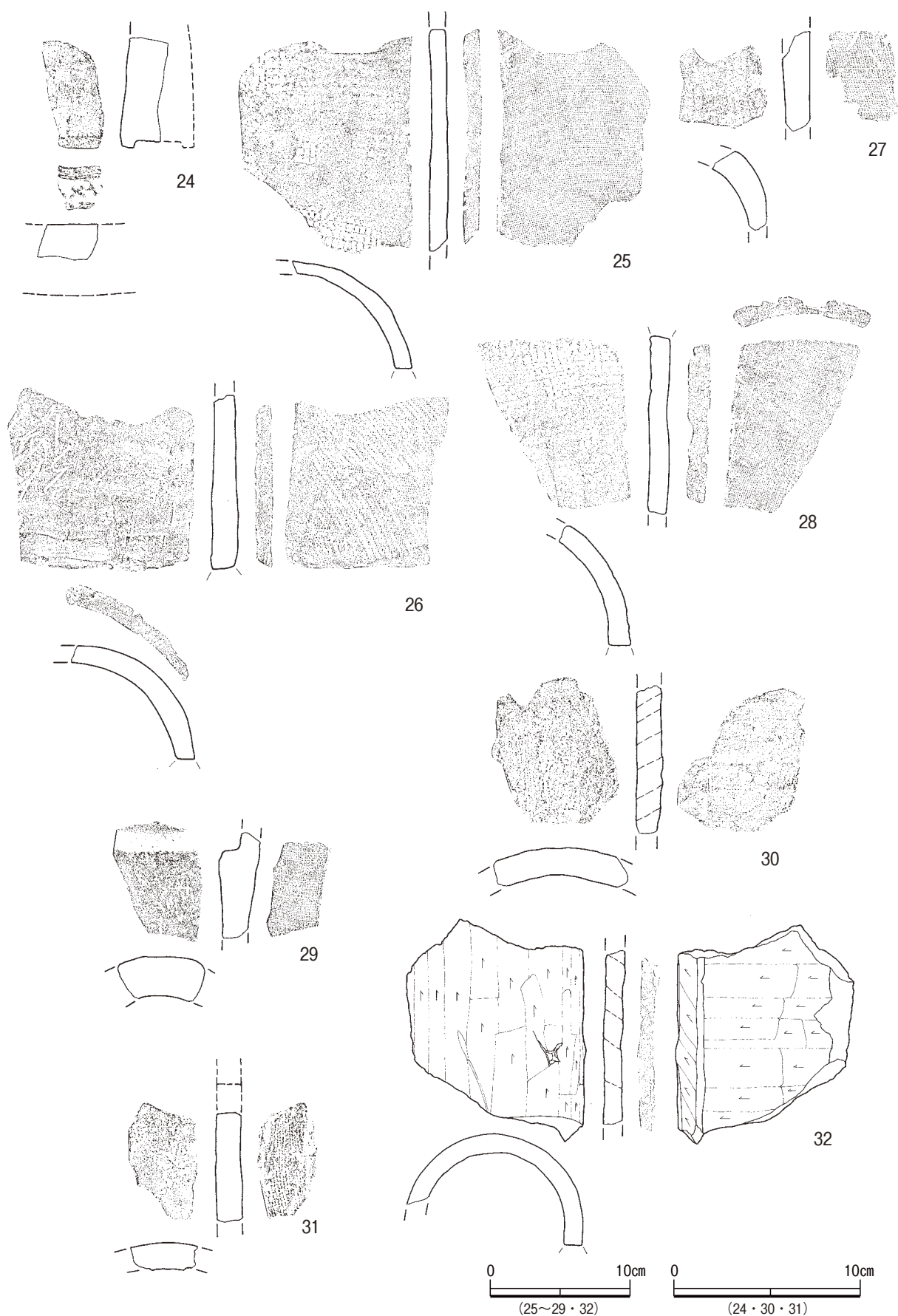


第 14 図 出土遺物 (2)

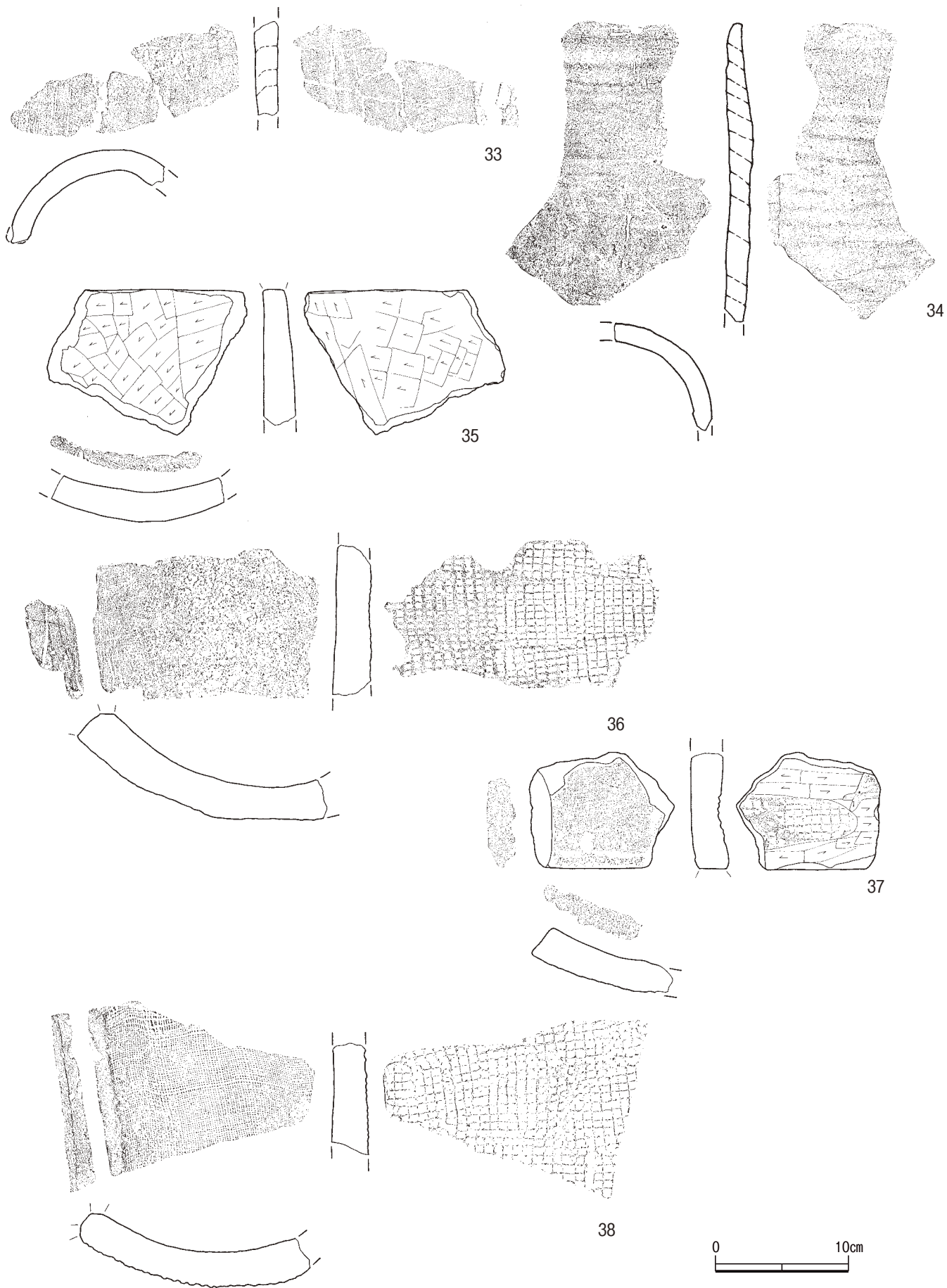


0 10cm 0 10cm  
 (18~21) (22・23)

第15図 出土遺物(3)



第16図 出土遺物(4)

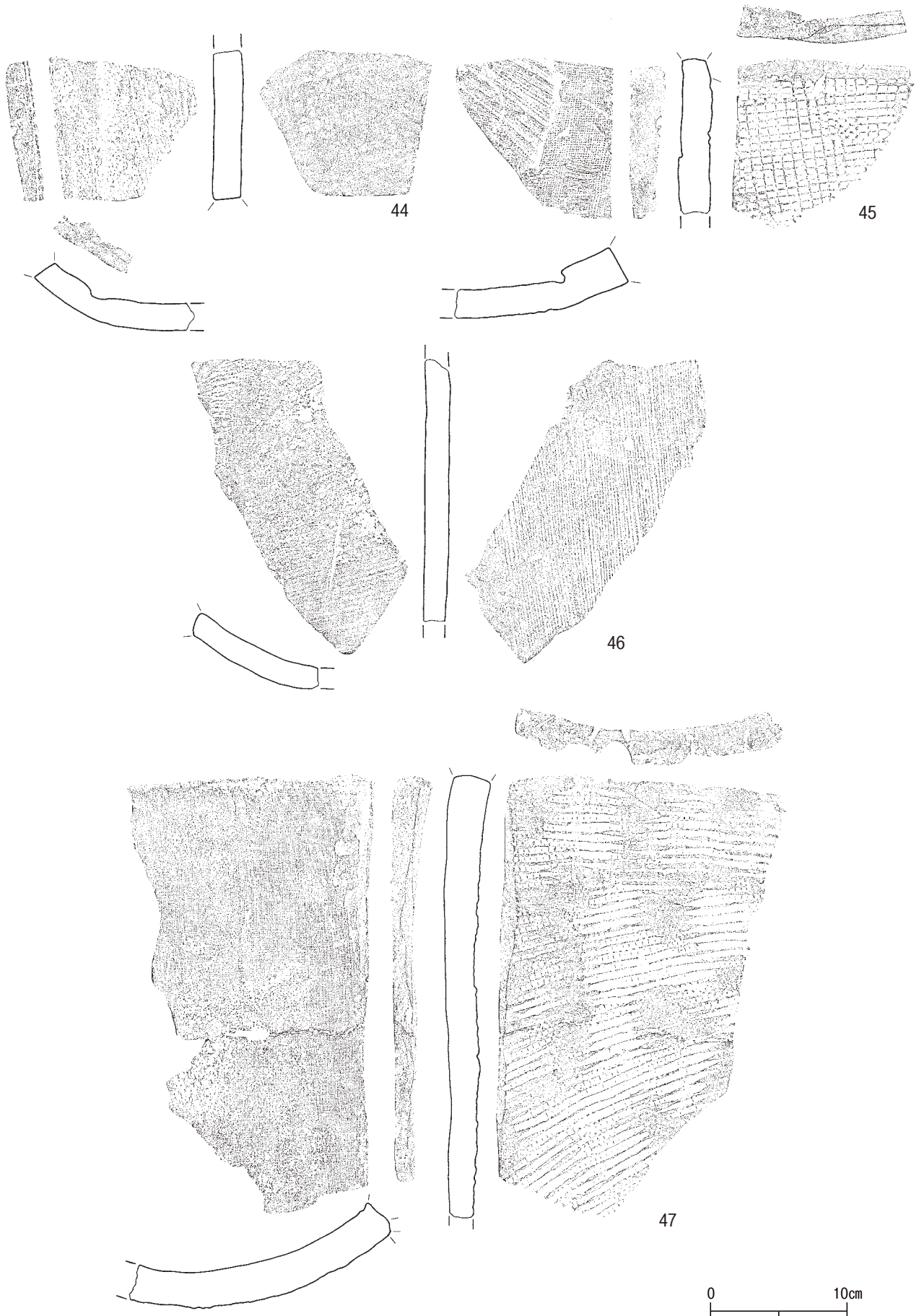


第 17 図 出土遺物 (5)

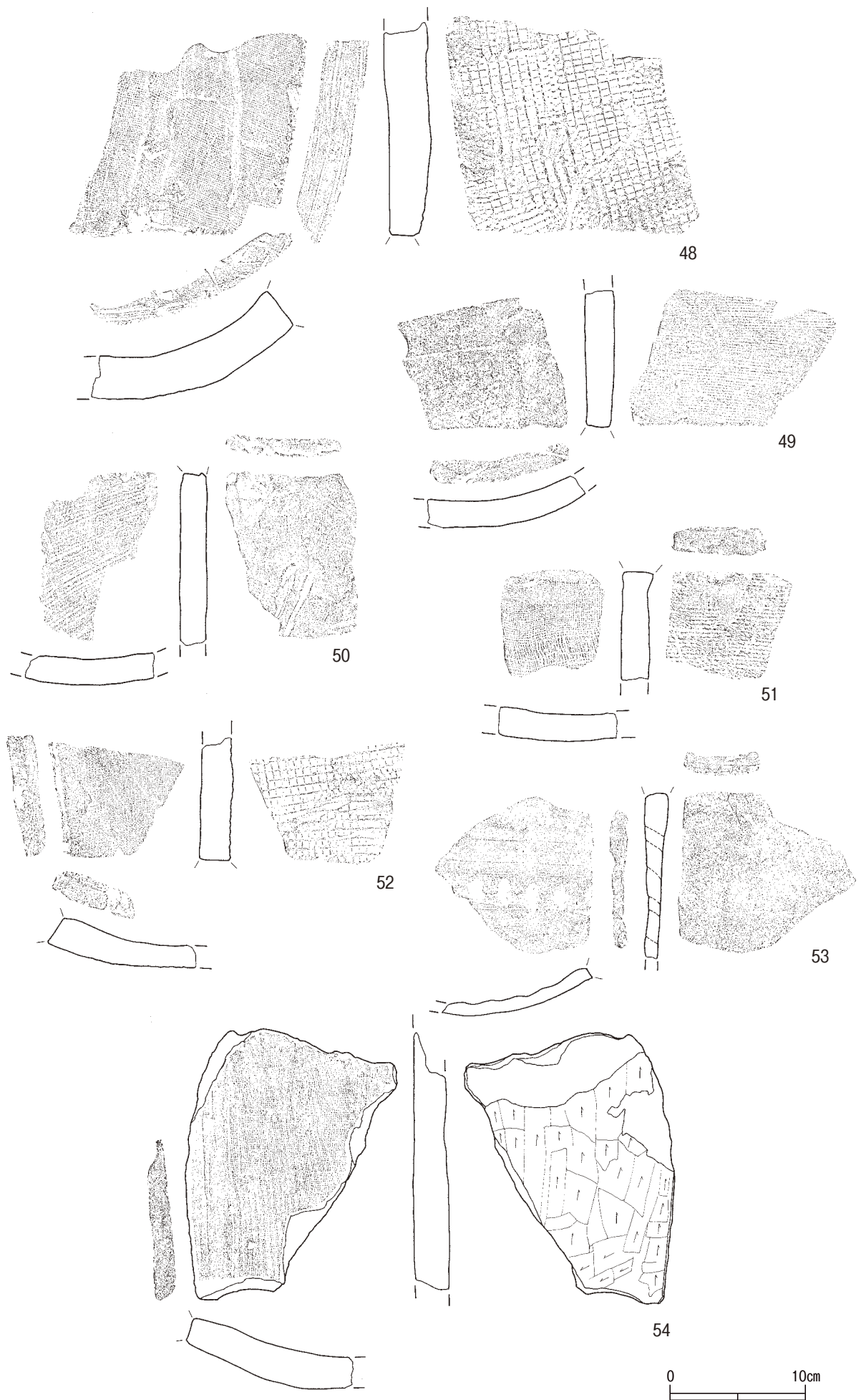




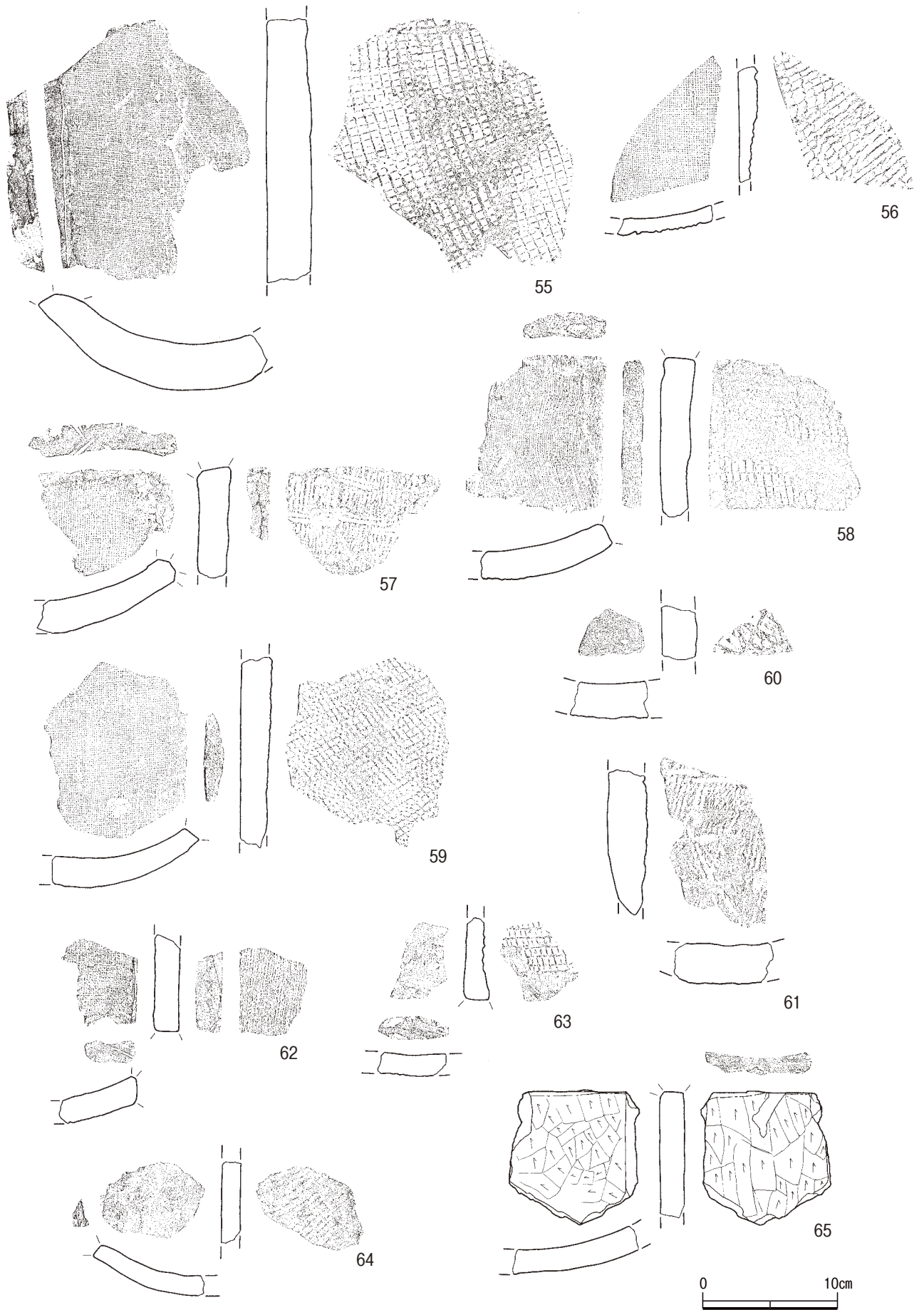
第18図 出土遺物(6)



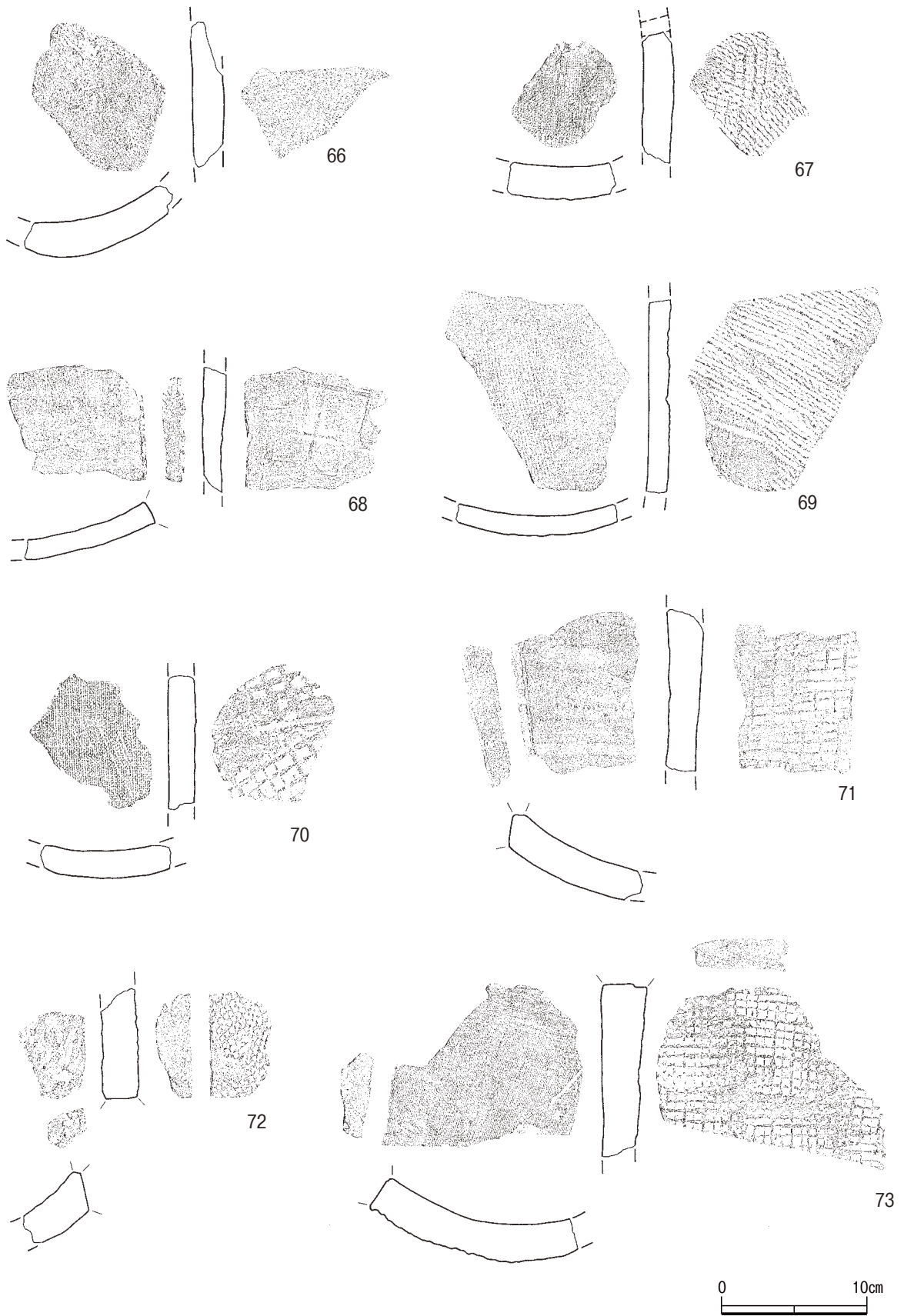
第 19 図 出土遺物 (7)



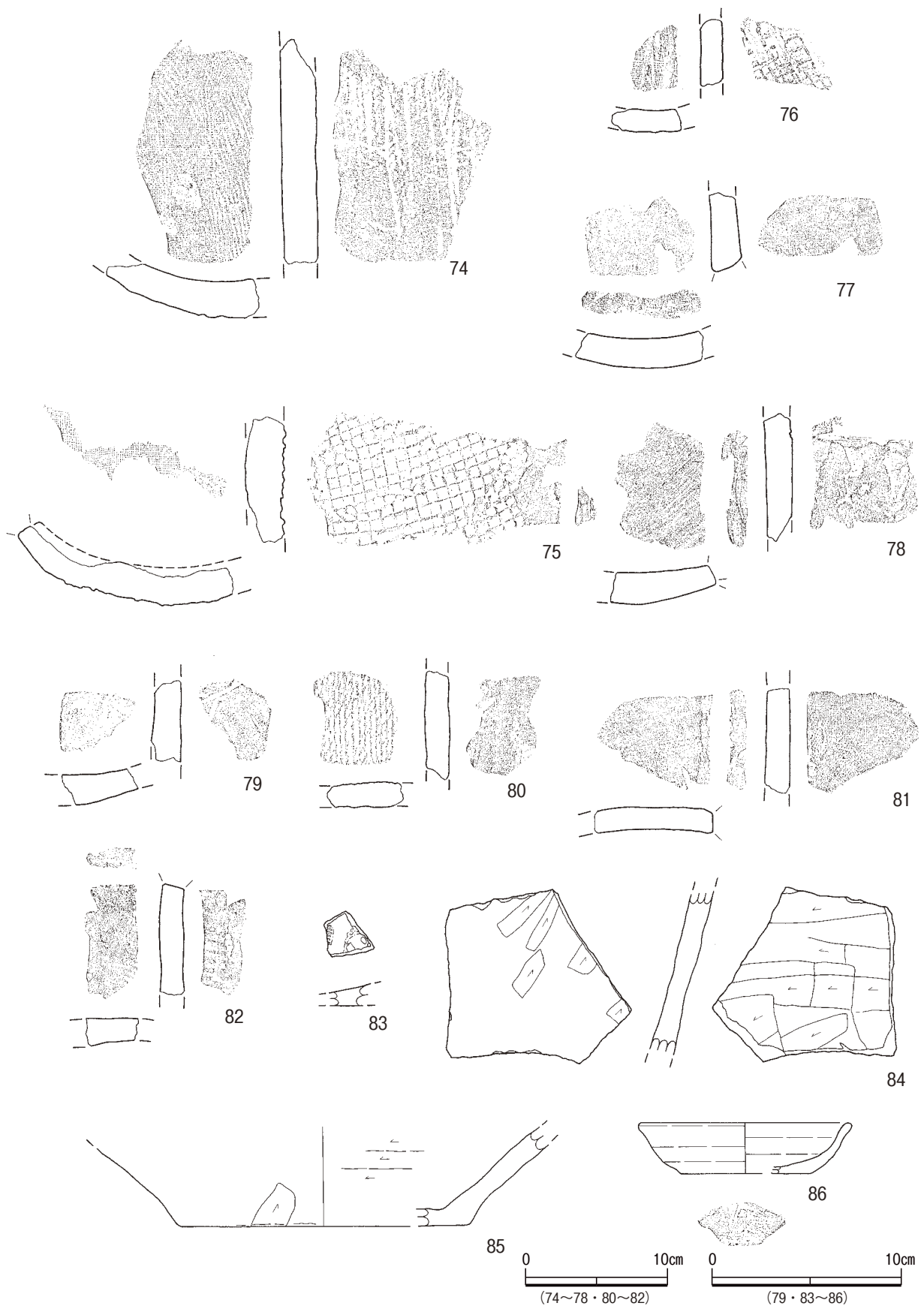
第 20 図 出土遺物 (8)



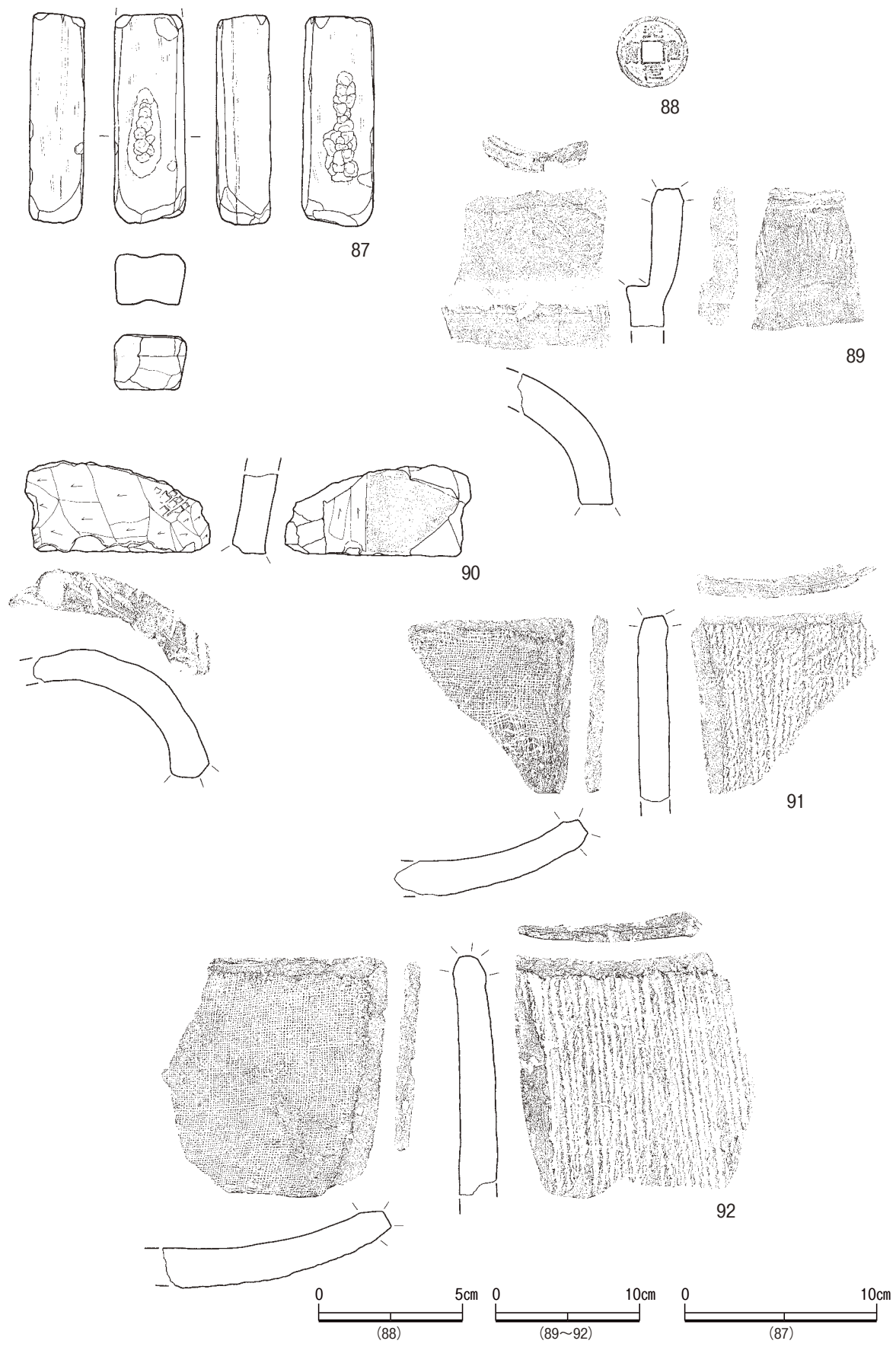
第 21 図 出土遺物 (9)



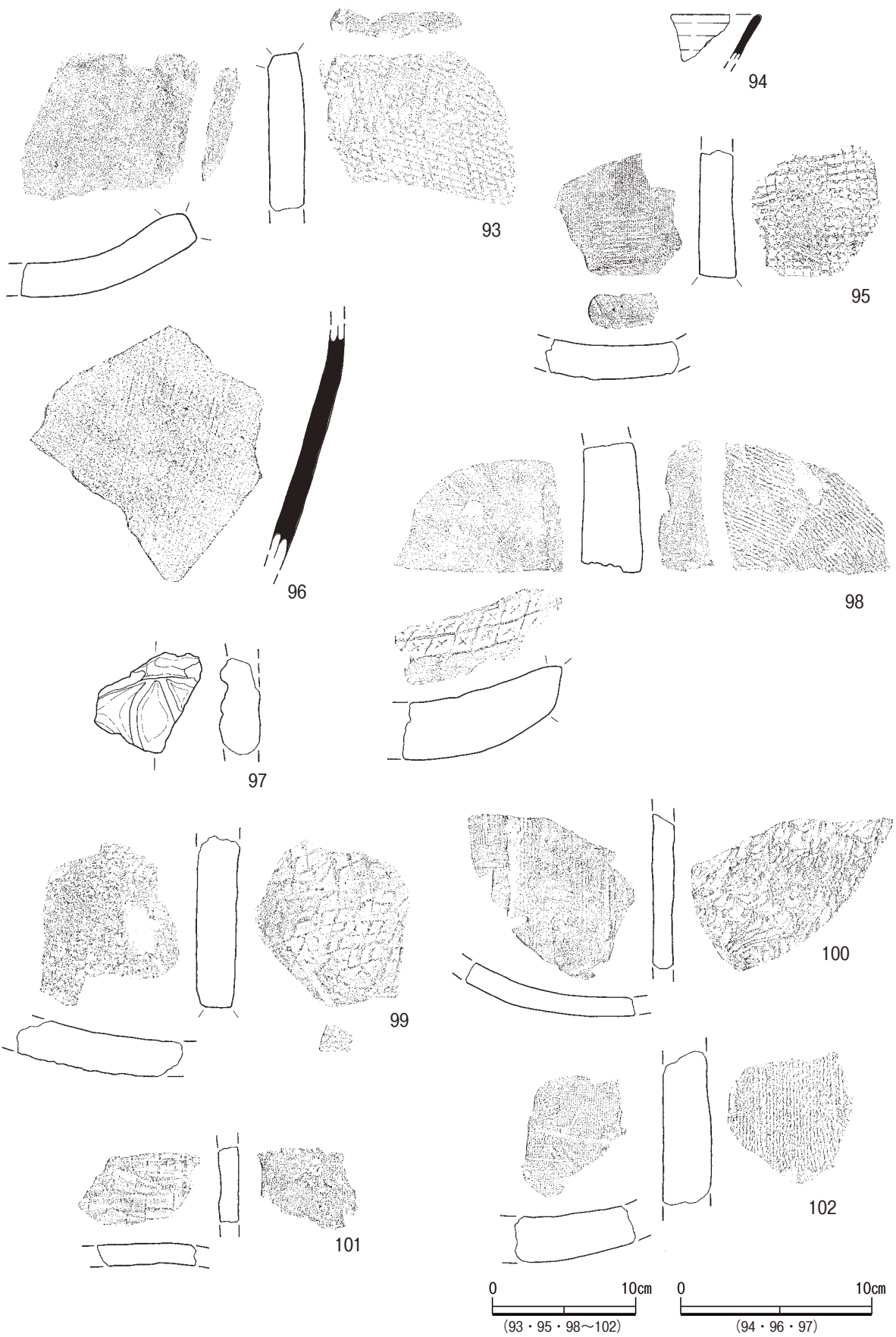
第 22 図 出土遺物 (10)



第 23 図 出土遺物 (11)

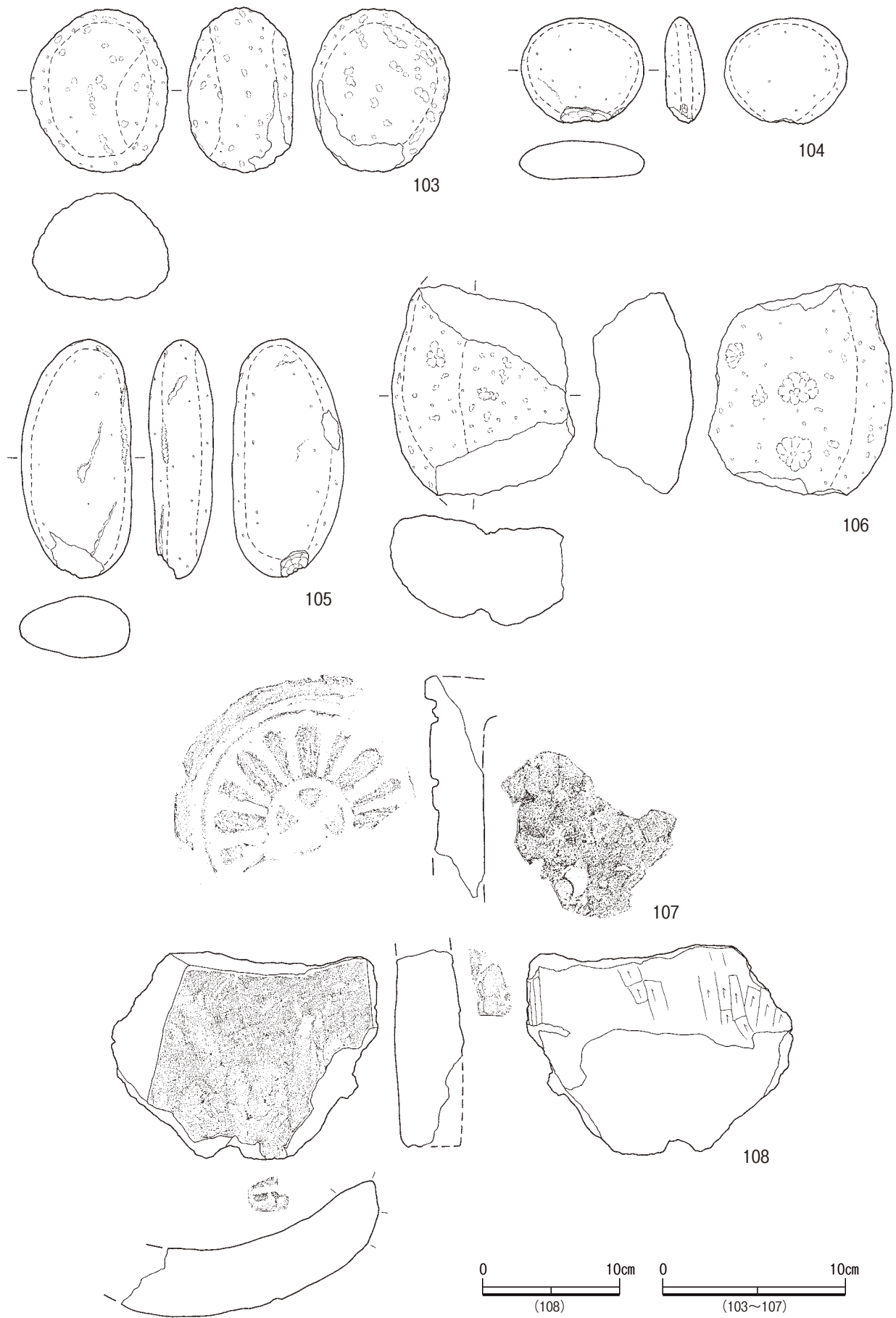


第 24 図 出土遺物 (12)

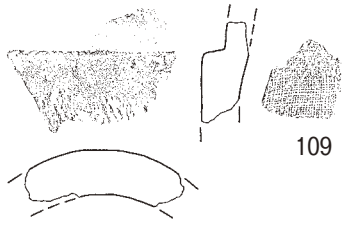


第 25 図 出土遺物 (13)

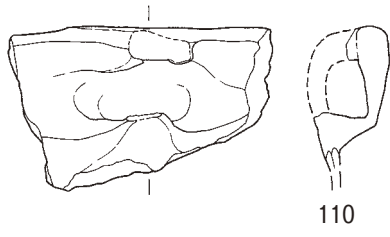




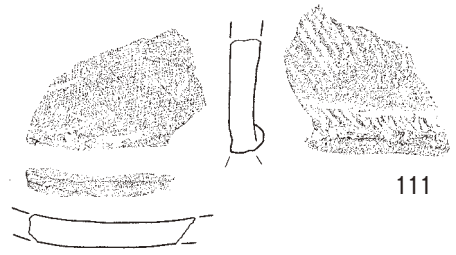
第26図 出土遺物(14)



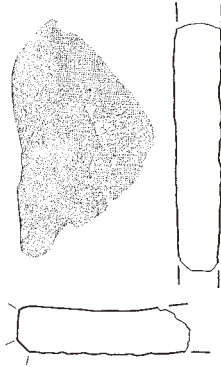
109



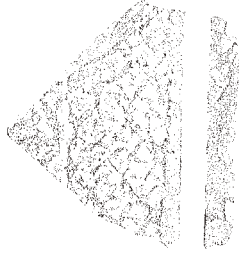
110



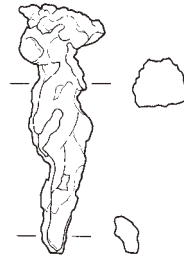
111



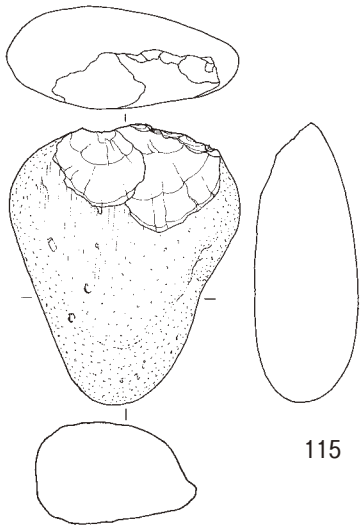
112



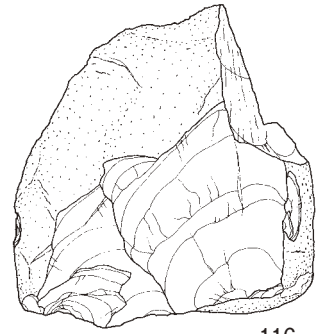
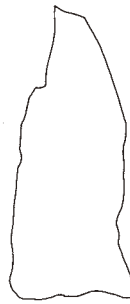
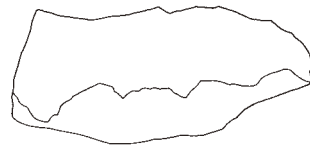
113



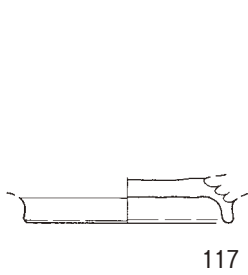
114



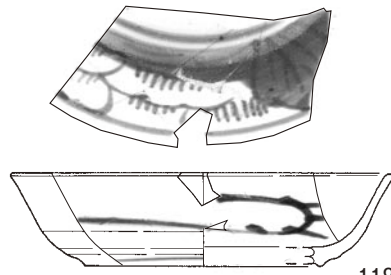
115



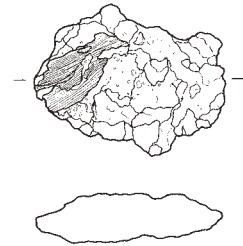
116



117



118



119



(113)



(109 · 111 · 112)



(110 · 114 ~ 119)

第 27 图 出土遺物 (15)

第3表 出土軒丸瓦属性一覧

図版番号	出土地点 遺構	型式	瓦当 直径 (cm)	瓦当 厚 (cm)	全長 (cm)	内区				外区			胎土 鉱物	海綿 骨針	焼成	色調	調整・痕跡	備考
						中房径 (cm)	連子数	内区径 (cm)	花卉弁 (cm)	花卉幅 (cm)	外区幅 (cm)	外区外 縁幅 (cm)						
12	2区瓦礫道	3120 型式	(5.2)	3.8 ~ 4.2	(4.6)	-	-	-	(1.6)	(1.8)	(3.0)	(2.2)	(1.1)	-	不良	10 Y R 8/4 浅黄褐色		
13	2区瓦礫道	3108 型式	(4.9)	1.1 ~ 2.3	-	-	-	-	-	-	2.8	1.4	1.3	○	良好	10 Y R 6/1 褐灰色	外区外周ナデ 瓦当表面縦方向 ヘラケズリ	
14	2区瓦礫道	3122 型 式もしくは 5101・ 5102・5103 型式	(3.1)	(2.1)	-	-	-	-	-	-	(3.1)	(1.9)	-	-	良好	2.5 Y R 5/6 赤褐色	筒部凸面ナデ	
15	2区瓦礫道	3117 もしく は 3118 型式	-	(3.3) ~ (3.7)	-	-	-	-	-	-	1.8	1.2	1.2	○	普通	10 Y R 7/1 灰白色	筒部凸面強いヘラ ナデ	
16	2区瓦礫道	3117 型式	-	1.7 ~ 2.5	(8.2)	-	-	-	(2.0)	(3.0)	2.0	1.9	0.5	-	普通	10 Y R 7/1 灰白色	筒部凸面ヘラナデ	
17	2区瓦礫道	3121 型式か	-	2.1 ~ 3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	普通	7.5 Y R 5/4 にぶい褐色	筒部凸面布目	
97	2区表土一括	3126 型式	(4.8)	1.2 ~ 2.3	-	-	-	-	(3.7)	(2.0)	1.3	-	-	-	普通	2.5 Y 7/2 灰黄色		
107	3区瓦礫道	3112 型式	(14.8) ~ (15.5)	2.8	(3.6)	4.5	(1) + (4)	12.1	3.0	太花卉 1.5 細花卉 0.9	2.0	1.0 ~ 1.5	0.6	-	普通	10 Y R 8/1 灰白色	筒部凸部縦方向ヘ ラケズリ	素縁八葉細花 弁式軒丸瓦

第4表 出土軒平瓦属性一覧

図版番号	出土地点 遺構	型式	瓦当 面文様	類形態	全長 (cm)	瓦当部長 (cm)	瓦当部厚 (cm)	平瓦部厚 (cm)	瓦当裏 面段差 (cm)	凹面 痕跡	凹面調整	凸面 痕跡	凸面調整	胎土 鉱物	海綿 骨針	焼成	色調	備考
18	2区瓦礫道	3281 b 型式	菱文	曲線類	(11.6)	(8.9)	3.7	3.5	-	布目	横方向ヘ ラナデ	斜方向 向縄 叩き	縦方向ヘラケズ リ、周縁ヘラケズ リ	白色粒子中量、灰色粒 子微量、石英中量、砂礫 微量	○	良好	7.5 Y 5/1 灰色	
19	2区瓦礫道	-	-	曲線類	(14.0)	(16.5)	-	3.2	-	布目・ 糸切 り痕	-	斜方向 向縄 叩き	-	白色粒子中量、灰色粒 子微量、長石微量、砂礫 微量	-	良好	5 Y 5/1 灰色	凹面に7単位 以上の指頭圧 痕
20	2区瓦礫道	3280 型式	菱文	曲線類	(12.7)	(21.4)	5.1	1.9	-	-	横方向ヘ ラケズリ	斜方向 向縄 叩き	横方向ヘラケズ リ	白色粒子中量、透明粒 子少量、砂礫多量	○	良好	10 Y R 6/2 灰黄褐色	
21	2区瓦礫道	3233 型式	素文	曲線類	(12.4)	(8.0)	3.5 ~ 3.7	2.9	-	布目	-	正格 子目 叩き	横方向ヘラケズ リ	灰色粒子少量、雲母粒 少量、砂礫中量	-	普通	2.5 Y 7/1 灰白色	瓦当面鋭削 り、凹面判読不 能ヘラ書き
22	2区瓦礫道	3282 型式	菱文	-	(5.6)	(5.2)	3.9	-	-	-	ナデ	-	斜方向ヘラナデ	白・灰色粒子少量、砂 礫中量	-	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	
23	2区瓦礫道	3282 型式	菱文	-	(5.0)	(2.8)	4.4	-	-	-	縦方向ヘ ラケズリ	-	縦方向ヘラナデ	白・黒色粒子	○	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	
24	2区瓦礫道	3282 型式か	菱文	-	(5.9)	(3.2)	(2.3)	-	-	-	横方向ヘ ラナデ	-	-	白・灰色粒子微量	○	良好	2.5 Y 6/1 黄灰色	
98	2区表土一括	3282 型式	菱文	曲線類	(9.9)	(12.5)	4.5	-	-	布目・ 糸切 り痕	-	斜方向 向縄 叩き	周縁ヘラケズリ	白色粒子中量、石英微量	○	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	棒乾燥痕1箇所、 范の大きなズレ
108	3区瓦礫道	3294 型式	矢羽文	曲線類	(15.2)	(3.1)	(2.2)	4.2	-	布目	-	-	縦方向ヘラケズ リ	白・灰・黒色粒子微量	-	普通	5 Y 5/2 灰褐色	側面取り2 回、凹面土付 着

第5表 出土丸瓦属性一覧

図版番号	出土地点 遺構	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土 鉱物	海綿 骨針	焼成	色調	備考
25	2区瓦礫道	(16.7)	1.3	布目・糸 切り痕	-	正格子叩き	横方向ナデ	石英微量、砂粒微量	-	不良	10 Y R 8/2 灰白色	
26	2区瓦礫道	(12.8)	1.7	布目	-	-	縦方向ヘラケズリ・ 横方向ヘラナデ	白・灰色粒子中量、石英微量、砂礫 微量	○	不良	10 Y R 8/4 浅黄褐色	凸面ヘラ書き「徳」
27	2区瓦礫道	(7.3)	1.4 ~ 2.3	布目	-	-	横方向ナデ	白色粒子多量、石英中量	-	普通	10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	凹面判読不能ヘラ書き
28	2区瓦礫道	(13.0)	1.3 ~ 1.8	布目	-	正格子叩き	多方向ヘラナデ	白色粒子中量、灰色粒子微量	○	良好	5 Y 6/1 灰色	横骨痕、広端部・側縁部残存
29	2区瓦礫道	(8.0)	平瓦部 2.0 玉縁部 1.6 段差1.5	布目	-	縦方向縄叩 き	横方向ナデ	白・灰・黒色粒子中量、長石・砂 礫微量	-	不良	2.5 Y 6/1 黄灰色	玉縁付丸瓦
30	2区瓦礫道	(8.2)	1.5	-	ロクロナデ	-	縦方向ヘラケズリ	白色粒子多量、石英微量	○	良好	10 Y R 6/1 褐灰色	泥状盤築技法、凹面判読不能ヘラ 書き
31	2区瓦礫道	(6.6)	1.5	布目	-	-	横方向ヘラナデ	白色粒子中量、黒色粒子微量、石英 微量	-	不良	7.5 Y R 6/8 褐色	横骨痕、凸面判読不能ヘラ書き
32	2区瓦礫道	(15.5)	1.4 ~ 1.7	-	横方向ヘラケズリ 周縁ヘラケズリ	-	縦方向ヘラケズリ	白色粒子多量、黒色粒子少量、石英 中、砂礫微量	○	良好	2.5 Y 6/1 黄灰色	泥状盤築技法、凸面指紋
33	2区瓦礫道	(6.9)	1.9 ~ 2.2	布目	-	-	縦方向ヘラケズリ	白色粒子多量、石英少量、砂礫中量	-	良好	2.5 Y R 6/8 褐色	凹面輪積み痕
34	2区瓦礫道	(22.6)	1.1 ~ 1.7	-	ロクロナデ	-	横方向ナデ	白色粒子少量、灰色粒子微量、砂粒 微量	○	良好	5 Y 6/1 灰色	泥状盤築技法
89	2区4号溝	(10.6)	平瓦部 2.5 玉縁部 2.4 段差1.2	布目	-	-	横方向ヘラナデ	白色粒子中量、石英・砂礫少量	○	良好	5 Y 6/1 灰色	横骨痕、玉縁付丸瓦
90	2区4号溝一括	(5.9)	2.0 ~ 2.5	布目・糸 切り痕	-	菱形格子目 叩き	横方向ヘラケズリ	白色粒子中量、石英中量、長石微量、 砂礫少量	○	良好	2.5 Y 6/1 黄灰色	棒乾燥痕1箇所
109	3区瓦礫道	(6.5)	平瓦部 1.9 玉縁部 1.4 段差1.3	布目	-	縦方向縄叩 き	-	白色粒子少量、灰・黒色粒子微量、 石英・砂粒微量	-	不良	7.5 Y R 7/4 にぶい褐色	玉縁付丸瓦

第6表 出土平瓦属性一覧

図版 番号	出土地点 遺構	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土 鉱物	海綿 骨針	焼成	色調	備考
35	2区瓦礫道	(108)	1.6～2.3	-	ナデ	糸切り痕	斜方向残存ケズリ	白・灰色粒子少量, 石英微量	-	普通	5 Y R 6/8 橙色	凹面指紋, 端部残存
36	2区瓦礫道	(12.3)	2.8～3.5	布目	-	正格子叩き	-	白色粒子微量, 石英・砂礫微量	-	不良	10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	一枚作り
37	2区瓦礫道	(8.7)	2.4～2.6	布目	-	正格子叩き	横方向ヘラナデ	白色粒子多量, 雲母微量, 砂礫中量	-	普通	7.5 Y R 6/8 橙色	一枚作り, 側縁部残存
38	2区瓦礫道	(13.8)	2.2～2.9	布目	-	正格子叩き	-	赤色粒子微量	-	普通	10 Y R 8/4 浅黄橙色	一枚作り, 側面取り2回
39	2区瓦礫道	(18.5)	1.9～2.5	布目・糸切り痕	-	変形菱形格子目叩き	-	白・灰色粒子微量, 石英微量	-	普通	7.5 Y R 7/8 黄橙色	一枚作り, 側面取り2回, 「米」「田」様不定形の叩き目, 狭端部・側縁部残存
40	2区瓦礫道	(11.4)	1.6～2.0	布目	-	縦方向縄叩き	-	白・黒色粒子少量, 灰色粒子微量, 石英・砂礫微量	○	良好	N-5 灰色	縄目細かい, 桶巻き作り, 模骨痕, 枳板幅 3.1 cm, 側縁部残存
41	2区瓦礫道	(23.0)	2.4	布目・糸切り痕	-	縦方向縄叩き・糸切り痕	-	白色粒子中量, 石英少量, 黒雲母・砂礫微量	-	普通	10 Y R 8/3 浅黄褐色	一枚作り, 側面取り3回, 狭端部・側縁部残存
42	2区瓦礫道	(13.8)	2.9～3.5	布目	縦方向ヘラケズリ	横方向平行叩き	-	白色粒子中量, 透明粒子微量, 砂礫中量	○	良好	7.5 Y R 5/1 褐灰色	一枚作り, 側面取り2回, 側縁部残存
43	2区瓦礫道	(15.9)	1.8～2.0	布目	-	-	ヘラケズリ・横方向ヘラナデ	白色粒子中量, 透明粒子微量, 石英微量, 砂礫中量	○	良好	5 Y 6/1 灰色	桶巻き作り, 模骨痕, 枳板幅 3.7 cm, 凸面に指頭圧痕, 広端部・側縁部残存
44	2区瓦礫道	(10.9)	1.6～2.3	布目・糸切り痕	-	菱形格子目叩き	横方向ナデ	灰色粒子少量, 黒色粒子微量, 砂礫中量	-	不良	5 Y R 7/6 橙色	桶巻き作り, 模骨痕, 枳板幅不明
45	2区瓦礫道	(12.6)	1.9～3.0	布目・糸切り痕	-	正格子叩き	周縁ヘラケズリ	白色粒子微量, 砂礫少量	-	良好	10 Y R 6/1 褐灰色	粘土板継ぎ足し痕, 狭端部・側縁部残存
46	2区瓦礫道	(22.4)	1.7	布目・糸切り痕	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子多量, 石英微量	○	普通	10 Y R 8/4 浅黄褐色	縄目細かい
47	2区瓦礫道	(32.6)	2.7	布目	-	梯子状格子目叩き	-	白・灰・黒色粒子少量, 石英中量, 雲母・砂粒微量	-	普通	5 Y R 4/8 赤褐色	一枚作り, 側面取り2回, 広端部・側縁部残存
48	2区瓦礫道	(15.3)	3.5	布目	-	正格子叩き	-	白・灰色粒子中量, 石英・砂礫微量	-	良好	5 Y 4/1 灰色	一枚作り, 凹面判読不能残存書き, 狭端部・側縁部残存
49	2区瓦礫道	(10.8)	2.4	布目	-	横方向刷毛目	-	白色粒子多量, 黒・赤色粒子微量, 石英多量, 雲母微量, 砂礫中量	-	不良	5 Y R 6/6 橙色	一枚作り
50	2区瓦礫道	(12.9)	2.0	糸切り痕	-	-	縦方向ヘラケズリ	白色粒子中量, 石英・砂礫中量	○	良好	2.5 Y R 5/1 黄灰色	一枚作り, 凸面指紋, 凸面判読不能ヘラ書き
51	2区瓦礫道	(9.5)	2.1～2.6	布目	-	横方向縄叩き	-	白・灰色粒子中量・石英少量・砂礫微量	-	良好	10 Y R 5/6 黄褐色	一枚作り
52	2区瓦礫道	(9.3)	1.8～2.3	布目・糸切り痕	-	正格子叩き	-	白色粒子中量, 灰色粒子微量, 石英少量	-	良好	10 Y R 6/1 褐灰色	一枚作り, 狭端部・側縁部残存
53	2区瓦礫道	(12.3)	0.6～1.9	ロクロナデ	-	-	縦方向ヘラナデ	白色粒子中量, 透明粒子微量, 石英中量	○	良好	5 Y 6/2 灰黄褐色	泥状盤築技法, 凹面中央部横一列に指頭圧痕, 広端部・側縁部残存
54	2区瓦礫道	(19.3)	2.0～2.8	布目・糸切り痕	-	-	縦方向ヘラケズリ	白・灰色粒子微量, 石英少量, 砂礫中量	-	普通	10 Y R 7/2 にぶい黄褐色	一枚作り, 側縁部残存
55	2区瓦礫道	(20.2)	2.3～3.3	布目・糸切り痕	-	正格子叩き	-	白色粒子中量, 石英微量	-	普通	2.5 Y 8/3 淡黄色	一枚作り, 粘土板継ぎ足し痕, 側面取り2回
56	2区瓦礫道	(10.8)	1.0～1.6	布目	-	梯子状格子目叩き	-	白・黒色粒子微量, 長石微量	-	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	一枚作り
57	2区瓦礫道	(8.1)	2.5～3.0	布目	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子少量, 砂礫少量	○	普通	10 Y R 6/1 褐灰色	一枚作り, 側面取り3回, 端部残存
58	2区瓦礫道	(11.9)	2.0～2.4	布目	-	正格子叩き	横方向ヘラナデ 周縁ヘラケズリ	白色粒子微量, 雲母・砂粒微量	-	普通	10 Y R 6/6 明黄褐色	一枚作り, 側縁部残存
59	2区瓦礫道	(14.9)	1.6～2.4	布目	-	菱形格子目叩き	-	白色粒子中量, 石英・砂粒少量	-	普通	10 Y R 8/4 浅黄褐色	一枚作り, 側縁部残存
60	2区瓦礫道	(5.2)	2.6	布目	-	軒平瓦当面向き(菱文)	-	白色粒子中量	-	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	凸面 3280 または 3281 型式軒平瓦当面向きで叩く
61	2区瓦礫道	(13.5)	2.0～2.4	-	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子微量, 石英微量, 雲母中量	-	不良	7.5 Y R 7/4 にぶい橙色	凹面剥離のため観察不能, X字状に1～2条の太い縄を巻きつける
62	2区瓦礫道	(6.8)	2.0～2.3	布目	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子微量, 長石微量	○	良好	2.5 Y 5/1 黄灰色	一枚作り, 縄目細かい, 凹面指紋, 狭端部・側縁部残存
63	2区瓦礫道	(6.3)	1.5～2.2	-	-	梯子状格子目叩き	-	白色粒子微量, 雲母微量	-	普通	7.5 Y R 7/4 にぶい橙色	凹面葺土多量に付着, 端部残存
64	2区瓦礫道	(6.3)	1.6	-	ナデ	斜方向平行叩き	-	-	-	不良	7.5 Y R 6/6 橙色	桶巻き作り, 模骨痕・模骨幅 2.4 cm, 凸面指紋
65	2区瓦礫道	(9.8)	2.0	-	斜方向ヘラナデ	-	縦方向ヘラケズリ	白・灰色粒子微量, 石英微量	-	良好	2.5 Y 6/1 黄灰色	一枚作り・凹面指紋, 側面取り2回, 端部残存

66	2区瓦礫道	(126)	2.3	-	-	-	-	白色粒子微量, 石英・長石微量	-	普通	2.5 Y R 4/4 にぶい赤褐色	全面葺土付着
67	2区瓦礫道一括	(92)	2.2	布目	-	菱形格子目叩き・斜方向縄叩き	-	白色粒子微量, 石英・砂礫中量	-	良好	2.5 Y 5/1 黄灰色	一枚作り, 穿孔, 菱形格子目叩きと縄叩きの組み合わせ
68	2区瓦礫道	(89)	1.2~1.8	布目	縦方向ヘラナデ	正格子叩き	-	白色粒子微量, 赤色粒子中量, 石英少量	-	良好	10 Y R 7/6 明黄褐色	格子目 31 × 2 mm, 側縁部残存
69	2区瓦礫道	(174)	1.4~1.6	布目	-	横方向縄叩き	-	白・黒色粒子・透明粒子中量, 石英微量	-	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	一枚作り, 須恵質
70	2区瓦礫道	(103)	1.9	布目・糸切り痕	-	正格子叩き	ナデ	白色粒子微量, 石英微量	-	不良	10 Y R 8/1 灰白色	一枚作り, 凸面葺土付着, 格子目 6 × 11 mm
71	2区瓦礫道	(114)	2.2~2.5	-	横方向強いナデ	正格子叩き	-	白色粒子多量, 灰色粒子微量, 石英少量	○	良好	10 Y R 6/1 褐灰色	側面面取り 2 回格子目長方形 4 × 10 mm, 側縁部残存
72	2区瓦礫道	(74)	2.7~3.0	糸切り	-	菱形格子目叩き	-	白色粒子多量, 石英少量	-	良好	N - 3 暗灰色	凹面指紋, 少量葺土付着, 側面面取り 2 回, 側縁部残存
73	2区瓦礫道	(130)	2.5~3.2	布目	-	正格子叩き	-	白・灰色粒子少量	○	良好	10 Y R 5/1 褐灰色	一枚作り, 端部残存
74	2区瓦礫道	(164)	2.1~2.7	布目・糸切り痕	-	縦方向縄叩き	縦方向ヘラケズリ	白・灰色粒子中量, 透明粒子中量, 長石微量	-	不良	10 Y R 8/4 浅黄褐色	一枚作り
75	2区瓦礫道	(94)	2.4~2.7	布目	-	正格子叩き	-	白色粒子微量, 石英・雲母微量	-	普通	10 Y R 8/2 灰白色	
76	2区瓦礫道	(69)	1.6	布目	-	2種類の正格子叩き	-	白色粒子微量, 赤色粒子少量, 石英微量	-	普通	7.5 Y R 6/6 橙色	小格子目 5 × 5 mm, 大格子目 7 × 11 mm, 縦方向圧痕 3箇所, 幅 7 mm
77	2区瓦礫道	(59)	2.3	-	ナデ	布目	-	白色粒子微量, 石英微量	-	不良	10 Y R 8/6 黄褐色	一枚作り, 側縁部残存
78	2区瓦礫道	(96)	1.6~2.7	糸切り痕	-	-	縦方向ヘラナデ	白・黒色粒子中量, 長石微量, 砂礫微量	○	良好	2.5 Y 5/1 黄灰色	凸面横方向沈線 1 条横走
79	2区瓦礫道	(47)	1.4~1.9	-	ナデ	-	ナデ	白色粒子中量, 石英中量	○	普通	5 Y R 5/6 明赤褐色	凹面判読不明ヘラ書き
91	2区4号溝	(130)	2.2~2.5	布目	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子少量, 石英少量, 砂礫微量	-	普通	2.5 Y 8/3 淡黄色	一枚作り, 凹面指紋, 端縁面取り 2 回, 側面面取り 3 回, 広端部・側縁部残存
92	2区4号溝	(172)	2.3~2.7	布目	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子少量, 石英少量, 砂礫微量	-	普通	7.5 Y R 6/3 にぶい褐色	側面面取り 3 回, 広端部・側縁部残存
93	2区4号溝	(113)	2.5	布目	-	菱形格子目叩き	-	白色粒子微量, 砂礫中量	-	不良	5 Y 8/1 灰白色	一枚作り
95	2区2号ピット	(91)	2.4~2.7	布目	-	正格子叩き	-	白色粒子中量, 黒色粒子微量, 石英微量	-	良好	2.5 Y R 6/2 灰黄色	一枚作り, 端部残存
99	2区表土一括	(118)	2.7	-	ナデ	変形菱形格子目叩き	-	白色粒子中量	-	不良	10 Y R 8/3 浅黄褐色	一枚作り, 「米」「田」様不定四角形の叩き目
100	2区表土一括	(132)	1.8	-	ナデ	特殊叩き	ナデ	白色粒子中量, 石英少量, 砂粒中量	○	良好	7.5 Y R 5/4 にぶい褐色	叩き痕肋骨状, 桶巻き作り, 模骨痕, 枠板痕 6.7 cm
102	2区試掘	(106)	3.0~3.4	布目	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子少量, 灰・黒色粒子微量, 石英中量	○	良好	5 Y 5/1 灰色	一枚作り, 凹面ヘラ書き「廣」
111	3区表土一括	(103)	1.5~1.8	布目・糸切り痕	-	斜方向縄叩き	-	白色粒子中量, 石英微量	○	不良	7.5 Y R 6/6 橙色	一枚作り, 側面面取り 3 回, 側縁部残存
112	3区試掘	(138)	3.5	布目	-	軒平瓦瓦当面叩き(菱文)	-	白色粒子多量, 石英少量	○	良好	7.5 Y 5/1 灰色	凸面 3281 または 3282 型式軒平瓦瓦当面で叩く, 側縁部残存

第7表 出土熨斗瓦属性一覧

図版番号	出土地点遺構	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土鉱物	海綿骨針	焼成	色調	備考
3	1区1号溝	(11.7)	1.3~2.0	布目	縦方向ヘラケズリ 周縁ヘラケズリ	糸切り痕	縦方向ヘラケズリ	白色粒子中量, 石英微量, 砂礫中量	○	良好	7.5 Y R 6/4 にぶい橙色	広端部・側縁部残存
80	2区瓦礫道	(7.7)	1.6~1.8	布目	-	縦方向縄叩き	-	白色粒子微量, 石英・砂粒微量	-	普通	7.5 Y R 7/4 にぶい橙色	桶巻き作り, 模骨痕, 凹面葺土付着
81	2区瓦礫道	(7.7)	1.7	布目	-	糸切り痕	ナデ	白色粒子中量, 灰色粒子微量	-	不良	10 Y R 7/1 灰白色	一枚作り, 側面面取り 2 回, 側縁部残存
82	2区瓦礫道	(8.7)	1.7~2.1	横方向平行叩き	-	斜方向平行叩き	ナデ	白色粒子少量, 砂粒微量	-	良好	N - 6 灰色	須恵質, 端部残存
101	2区表土一括	(5.8)	1.6	布目	-	変形菱形格子目叩き	-	白色粒子多量, 砂礫中量	○	良好	7.5 Y R 5/4 にぶい褐色	格子目 18 × 10 mm と 7 × 9 mm の組み合わせ

第8表 出土土器属性一覧

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率	残存口径 (推定口径) (cm)	残存底径 (推定底径) (cm)	残存器高 (推定器高) (cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	色調	備考
1	1区1号溝	須恵器	高台付碗	口縁部～体部下端	40%	(19.6)	-	5.9	2次底面部より直線的に立ち上がる、口縁部大きく開く、体部横方向ナデ	白色粒子微量、砂礫多量	○	良好	外面：2.5 Y 5/2 暗灰黄色 内面：5 Y R 4/3 にぶい赤褐色	木葉下窯TE4期、8世紀第2四半期頃
2	1区1号溝	土師器	坏	体部～底部	10%	-	(6.0)	1.5	体部横方向ナデ、底部ナデ	灰色粒子微量、長石微量	-	不良	10 Y R 8/4 浅黄褐色	体部から底部にかけて「上」墨書
4	2区瓦礫道一括	縄文土器	浅鉢	口縁部～胴部	細片	-	-	3.0	胴部より直線的に立ち上がり「く」字状に折れる、頭部キザミ、胴部LR縄文	白色粒子中量、灰色粒子少量	-	良好	7.5 Y R 4/4 褐色	後期掘之内1式?
9	2区瓦礫道	須恵器	壺	胴部～底部	10%	-	(9.8)	3.8	胴部：緩やかに内湾 高台：外側に大きく開く、接地面幅広	白色粒子微量	-	良好	2.5 Y 4/1 黄灰色	黒色物多量に噴出、堀ノ内窯群花見堂窯産、8世紀後半
10	2区瓦礫道一括	須恵器	甕	胴部	細片	-	-	-	外面：格子目叩き 内面：同心円文叩き目	白・灰色粒子微量、長石微量	-	良好	2.5 Y 7/1 灰白色	9世紀後半から10世紀前半
11	2区瓦礫道	須恵器	甕	胴部	細片	-	10.1	-	外面：横方向平行叩き 内面：横方向ナデ	黒色粒子微量、砂礫微量	-	良好	外面：5 Y 6/2 灰オリーブ色 内面：10 Y R 7/1 灰白色	内外面黒斑、内面鉄分付着、8世紀
83	2区瓦礫道	陶器	皿	細片	細片	-	-	1.1	内面に緑釉	砂粒微量	-	良好	2.5 Y 8/2 灰白色	瀬戸・美濃系、近世
84	2区瓦礫道	炆器	甕	胴部	細片	-	-	-	外面：多方向ナデ 内面：横方向ナデ	白・黒色粒子少量、砂礫中量	-	良好	外面：10 R 4/6 赤色 内面：7.5 Y R 5/6 明褐色	常滑系
85	2区瓦礫道	炆器	甕	胴部～底部	細片	-	(15.2)	5.2	内面：横方向ナデ	白色粒子微量	-	良好	5 Y R 6/8 橙色	黒斑、常滑系
86	2区瓦礫道	土師質土器	かわらけ	口縁部～底部	40%	(10.8)	2.6	(6.8)	ロクロ成形、体部膨らみをもち口縁直下で弱く窪み口縁部肥厚、底部右回転糸切り未調整	黒・赤色粒子微量、雲母・砂粒微量	-	良好	7.5 Y R 7/6 橙色	15世紀
94	2区10号ピット	須恵器	坏	口縁部	細片	-	-	2.8	僅かに外反しながら立ち上がる、口唇部僅かに肥厚	白色粒子微量、砂粒少量	○	良好	10 Y R 6/3 にぶい黄褐色	8世紀第4四半期から9世紀第1四半期
96	2区表土一括	須恵器	甕	胴部	10%	-	-	-	外面：斜方向平行叩き 内面：横方向ナデ	白・灰色粒子少量、砂礫多量	-	良好	外面：5 Y 5/1 灰色 内面：10 Y R 6/1 褐灰色	外面黒斑多量に噴出、内面鉄分付着、9世紀前半
110	3区瓦礫道	土師質土器	内耳鍋	口縁部～胴部	10%	-	-	5.6	口縁部外湾しながら立ち上がる、口唇部ヨコナデ、耳部口唇部より貼り付けられる	白色粒子微量、灰色粒子少量、雲母微量	-	良好	外面：7.5 Y R 4/2 灰褐色 内面：5 Y 5/1 灰色	15世紀
114	5区4号土坑	土師器	甕	胴部～底部	細片	-	1.5	(4.8)	胴部外面：縦方向ヘラケズリ	白色粒子微量、砂礫微量	-	不良	7.5 Y R 4/2 灰褐色	常総甕カ
117	5区表土一括	土師器	碗?	高台付底部	30%	-	8.0	1.8	高台やや外側に開く 底部：回転ヘラ切り未調整	白色粒子微量、長石微量	-	普通	外面：N 3/ 暗灰色 内面：10 Y R 6/3 にぶい黄褐色	在地系、全面黒化、高台高1.0cm
118	5区表土一括	磁器	皿	口縁部～底部	30%	(14.8)	(9.2)	3.6	ロクロ成形 / 染付 / 曇付無軸、内面草花文、見込み一重圏線、裏文様「如意頭唐草文」、高台脇一重圏線	-	-	良好	2.5 G Y 7/1 明オリーブ灰色	肥前、18世紀

第9表 出土石器・鉄製品・その他属性一覧

図版番号	出土地点遺構	時代	器種	材質	残存率	長軸 (cm)	短軸 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	特徴・手法	備考
5	2区瓦礫道	縄文	磨石	安山岩	100%	8.2	5.5	3.3	172.4	周縁よく使用されている	中央部に弱い帯状の窪み
6	2区瓦礫道	縄文	磨石	砂岩	100%	18.4	8.8	5.9	1,220.0	上下端使用	
7	2区瓦礫道	縄文	蜂の巣石	安山岩	20%	(10.9)	(9.5)	5.9	471.2	脚付の硯状、裏面円錐状の凹部2箇所	石皿転用 脚高1.2cm 石皿縁高1.3～2.0cm
8	2区瓦礫道	縄文	蜂の巣石	砂岩	20%	(15.7)	(10.4)	6.2	1,330.0	裏面に円錐状の凹部1箇所	石皿転用
87	2区瓦礫道	中世以後	砥石	砂岩	不明	(10.9)	3.6	2.7	206.0	表裏面よく使用されている	
88	2区瓦礫道	中世	天聖元寶	-	100%	2.6	-	0.2	2.5	-	篆書 初鑄1023年 北宋銭
103	3区瓦礫道	縄文	磨石	かんらん石玄武岩	100%	8.8	7.3	5.7	533.3	弱い磨痕	
104	3区瓦礫道	縄文	磨石	砂岩	100%	7.9	6.8	2.0	102.1	全面に磨痕、周縁の一部に敲打痕	
105	3区瓦礫道	縄文	磨石	砂岩	100%	12.8	6.2	3.7	373.0	端部に使用痕	
106	3区瓦礫道	縄文	蜂の巣石	輝石安山岩	30%	11.7	10.1	5.5	696.3	裏面円錐状に2箇所の凹部	
113	4区25号ピット一括		釘	-	-	(7.0)	-	-	18.0	-	錆が全面に付着
115	5区表土一括	縄文	礫器	安山岩	100%	11.0	9.1	4.1	444.3	円礫素材、一端に刃部作出、一部に磨痕	
116	5区表土一括	縄文	石核	ホルンフェルス	-	12.8	11.9	4.9	787.3	角礫素材、片面に刃部状の連続剥離痕	
119	5区表土一括		鉄滓	-	-	12.5	5.4	2.6	113.0	-	木炭痕

第10表 瓦計量表

出土地点		1号溝			2号溝			3号溝			4号溝		
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)
平瓦	格子目叩き	1	1	294	8	8	1,380				6	6	380
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ				1	1	255				5	5	2,076
	梯子状格子目叩き				1	1	154				1	1	210
	菱形格子目叩き										1	1	493
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ				1	1	97						
	変形菱形格子目叩き												
	縄叩き	2	2	158	9	9	1,526	1	1	19	9	9	2,272
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	ヘラ削り・ナデ	2	2	271	5	5	810	5	5	661	23	23	3,496
	刷毛目												
	平行叩き	1	1	78									
	布目												
	糸切り										1	1	153
	正格子目叩き+菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+縄叩き												
	軒平瓦当面叩き												
	製作痕跡による分類が不可能なもの				3	3	251	4	4	149	3	3	517
平瓦小計	6	6	801	28	28	4,473	10	10	829	49	49	9,597	
丸瓦	ヘラ削り・ナデ				3	3	440				6	5	1,449
	格子目叩き												
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ	1	1	656	1	1	122				5	5	1,542
	菱形格子目叩き										1	1	292
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	縄叩き												
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	刷毛目												
	平行叩き												
	糸切り												
	泥状盤築				1	1	31				1	1	63
	丸瓦小計	1	1	656	5	5	593				13	12	3,346
道具瓦	1	1	263							1	1	51	
軒平瓦	重弧文												
	菱文												
	矢羽文												
	素文												
	形式不明										4	4	1,084
	軒平瓦小計										4	4	1,084
軒丸瓦	素縁八葉細弁花文軒丸瓦 (3112 型式)												
	多賀城系												
	那賀郡												
	山田寺系												
	その他系										1	1	156
	軒丸瓦小計										1	1	156
種別の分類不能										1	1	28	
瓦総計	8	8	1,720	33	33	5,066	10	10	829	69	68	14,262	

出土地点		5号溝			6号溝			4号土坑			5号土坑		
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)
平瓦	格子目叩き							2	2	455			
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	梯子状格子目叩き												
	菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
変形菱形格子目叩き													

平瓦	縄叩き										1	1	56
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	ヘラ削り・ナデ	2	2	236	3	3	434	4	1	453			
	刷毛目												
	平行叩き												
	布目												
	糸切り												
	正格子目叩き+菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+縄叩き												
	軒平瓦当面叩き												
	製作痕跡による分類が不可能なもの												
平瓦小計	2	2	236	3	3	434	6	3	908	1	1	56	
丸瓦	ヘラ削り・ナデ												
	格子目叩き												
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	縄叩き												
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	刷毛目												
	平行叩き												
	糸切り												
泥状盤築													
丸瓦小計													
道具瓦	鬘斗瓦												
軒平瓦	重弧文												
	菱文												
	矢羽文												
	素文												
	形式不明												
	軒平瓦小計												
軒丸瓦	素縁八葉細弁花文軒丸瓦 (3112 型式)												
	多賀城系												
	那賀郡												
	山田寺系												
	その他系												
	分類不能												
軒丸瓦小計													
種別の分類不能										1	1	28	
瓦総計	8	8	1,720	33	33	5,066	10	10	829	69	68	14,262	

出土地点		6号土坑			2号ピット			2区瓦礫道			2区瓦礫道硬化面直上		
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)
平瓦	格子目叩き							2	2	455			
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	梯子状格子目叩き												
	菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	変形菱形格子目叩き												
	縄叩き										1	1	56
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	ヘラ削り・ナデ	2	2	236	3	3	434	4	1	453			
	刷毛目												
	平行叩き												
	布目												
	糸切り												
正格子目叩き+菱形格子目叩き													



平瓦	菱形格子目叩き+縄叩き														
	軒平瓦当面叩き														
	製作痕跡による分類が不可能なもの														
	平瓦小計	2	2	236	3	3	434	6	3	908	1	1	56		
丸瓦	へら削り・ナデ														
	格子目叩き														
	格子目叩き+へら削り・ナデ														
	菱形格子目叩き														
	菱形格子目叩き+へら削り・ナデ														
	縄叩き														
	縄叩き+へら削り・ナデ														
	刷毛目														
	平行叩き														
	糸切り														
	泥状盤築														
丸瓦小計															
道具瓦	熨斗瓦														
軒平瓦	重弧文							7	7	733					
	菱文							5	5	1,978					
	矢羽文														
	素文							1	1	486					
	形式不明							39	39	8,670	2	2	198		
	軒平瓦小計							52	52	11,867	2	2	198		
軒丸瓦	素縁八葉細弁花文軒丸瓦 (3112 型式)														
	多賀城系							4	4	460					
	那賀郡							1	1	47					
	山田寺系														
	その他系							1	1	22					
	分類不能							2	2	150					
軒丸瓦小計							8	8	679						
種別の分類不能	1	1	84	1	1	14	123	123	4,290	5	5	201			
瓦総計	1	1	84	2	2	295	1,668	1,635	264,431	113	112	19,428			

出土地点		3区瓦礫道			1区表土一括			1区試掘			2区表土一括		
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)
平瓦	格子目叩き	9	9	1,236							22	22	2,167
	格子目叩き+へら削り・ナデ	8	8	1,292							14	14	2,072
	梯子状格子目叩き	2	2	471							1	1	92
	菱形格子目叩き										1	1	145
	菱形格子目叩き+へら削り・ナデ												
	変形菱形格子目叩き										1	1	473
	縄叩き	12	12	2,282							34	34	3,318
	縄叩き+へら削り・ナデ										1	1	219
	へら削り・ナデ	42	42	5,592	3	3	124				3	3	654
	刷毛目										1	1	50
	平行叩き										1	1	45
	布目												
	糸切り	2	2	518							1	1	164
	正格子目叩き+菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+縄叩き												
	軒平瓦当面叩き												
	製作痕跡による分類が不可能なもの	5	5	240							18	18	981
平瓦小計	80	80	11,631	3	3	124				98	98	10,380	
丸瓦	へら削り・ナデ	13	13	1,776							20	20	2,846
	格子目叩き										1	1	109
	格子目叩き+へら削り・ナデ										1	1	179
	菱形格子目叩き												

丸瓦	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	縄叩き												
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	刷毛目												
	平行叩き												
	糸切り												
	泥状盤築	7	7	522				1	1	21	9	9	591
	丸瓦小計	20	20	2,298				1	1	21	31	31	3,725
道具瓦	鬘斗瓦									4	4	281	
軒平瓦	重弧文												
	菱文									1	1	577	
	矢羽文	1	1	1,671									
	素文												
	形式不明	3	3	555	1	1	155				3	2	511
軒平瓦小計	4	4	2,226	1	1	155				4	3	1,088	
軒丸瓦	素縁八葉細弁花文軒丸瓦 (3112 型式)	1	1	417									
	多賀城系												
	那賀郡												
	山田寺系										1	1	39
	その他系												
	分類不能										3	3	221
軒丸瓦小計	1	1	417							4	4	260	
種別の分類不能	6	6	139							10	10	318	
瓦総計	111	111	16,711	4	4	279	1	1	21	141	140	16,052	

出土地点		2区試掘			3区表土一括			3区試掘			4区表土一括		
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)
平瓦	格子目叩き				1	1	145						
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ	3	2	737	1	1	121						
	梯子状格子目叩き												
	菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	変形菱形格子目叩き												
	縄叩き	1	1	212	2	2	192						
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	ヘラ削り・ナデ	5	5	691	8	8	923	2	2	131	1	1	172
	刷毛目												
	平行叩き												
	布目												
	糸切り												
	正格子目叩き+菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+縄叩き												
	軒平瓦当面叩き												
	製作痕跡による分類が不可能なもの												
平瓦小計	9	8	1,640	12	12	1,381	2	2	131	1	1	172	
丸瓦	ヘラ削り・ナデ	2	2	156									
	格子目叩き												
	格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	菱形格子目叩き												
	菱形格子目叩き+ヘラ削り・ナデ												
	縄叩き												
	縄叩き+ヘラ削り・ナデ												
	刷毛目												
	平行叩き												
	糸切り												
泥状盤築													
丸瓦小計	2	2	156										
道具瓦	鬘斗瓦				1	1	322						
軒平瓦	重弧文												
	菱文												
	矢羽文												



第 11 表 土器計量表

出土地点		1号溝			2号溝			5号溝			6号溝			4号土坑			
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	
縄文時代	縄文	土器															
		石皿・蜂の巣石															
		磨石															
		礫器															
奈良・平安時代	土師器	坏	5	3	11									2	2	13	
		碗															
		甕	10	10	130							1	1	15	3	3	33
		不明															
	須恵器	坏															
		高台付坏															
		高台坏碗	4	1	87												
		甕				1	1	17	2	2	58						
		蓋															
		高台付壺															
中・近世	土師質土器	在地・焙烙系															
		内耳土器															
		かわらけ															
	陶器	碗															
		壺															
		搦鉢															
		常滑産甕															
	磁器	碗															
		皿															
		蓋															
	石器	砥石															
		鉄滓															
時期不明	礎石	釘															
		銭貨 (天聖元寶)															
		砂岩													2	2	7,175
		安山岩															
	根石	砂岩													2	2	1,630
		凝灰岩													1	1	489
		礫															
		不明															
総計		19	14	228	1	1	17	2	2	58	1	1	15	10	10	9,340	

出土地点		6号土坑			7号土坑			25号ピット			2区瓦礫道			3区瓦礫道			
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	
縄文時代	縄文	土器				1	1	16				5	4	44			
		石皿・蜂の巣石										2	2	1,720	1	1	695
		磨石										1	1	172	3	3	828
		礫器										1	1	1,340	2	2	475
奈良・平安時代	土師器	坏										3	3	47			
		碗										1	1	24			
		甕										1	1	9			
		不明							2	2	15	3	3	15			
	須恵器	坏							1	1	3	2	2	13			
		高台付坏										1	1	18			
		高台坏碗															
		甕										7	7	280	2	2	98
		蓋													1	1	30
		高台付壺										1	1	62			
不明										1	1	22	1	1	20		

中・近世	土師器	在地・焙烙系									1	1	23				
		内耳土器													1	1	80
		かわらけ										1	1	19			
	陶器	碗										3	3	10			
		壺	1	1	5							1	1	20			
		播鉢										2	2	36			
		常滑産甕							1	1	85	6	5	354	1	1	63
	磁器	碗							1	1	1	3	3	21			
		皿															
		蓋															
石器	砥石									1	1	206					
時期不明		鉄滓															
		釘						1	1	19							
		銭貨（天聖元寶）									1	1	2				
	礎石	砂岩										4	4	1,736	1	1	525
		安山岩										5	5	3,410			
	根石	砂岩															
		凝灰岩															
	礫							1	1	11	15	15	2,178	3	3	439	
総計			1	1	5	1	1	16	7	7	134	72	70	11,781	16	16	3,253

出土地点		4区一括			5区一括			2区表土一括			2区試掘			
出土遺物		点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	
縄文時代	縄文	土器				1	1	8	1	1	6			
		石皿・蜂の巣石												
		磨石												
		礫器												
奈良・平安時代	土師器	坏	1	1	4				2	2	4			
		碗												
		甕												
		不明												
	須恵器	坏							2	2	43			
		高台付坏												
		高台坏碗												
	須恵器	甕						6	6	290				
		蓋						1	1	3				
		高台付壺												
		不明												
中・近世	土師器	在地・焙烙系				1	1	14	6	1	100			
		内耳土器												
		かわらけ												
	陶器	碗							1	1	9			
		壺												
		播鉢												
		常滑産甕												
	磁器	碗							4	4	10	1	1	1
皿														
蓋														
石器	砥石													
時期不明		鉄滓												
		釘							2	2	20			
		銭貨（天聖元寶）												
	礎石	砂岩												
		安山岩							1	1	2,531			
	根石	砂岩												
		凝灰岩												
	礫													
総計			1	1	4	2	2	22	26	21	3,016	1	1	1

出土地点		4区表土一括			5区表土一括			5区試掘			各遺物小計		
出土遺物		点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)
縄文時代	縄文	土器									10	9	86
		石皿・蜂の巣石									3	3	2,415
		磨石									4	4	1,000
		礫器									3	3	1,815
奈良・平安時代	土師器	坏			1	1	48				19	17	149
		碗									2	2	40
		甕			1	1	13	1	1	14	20	20	254
		不明			2	2	22				10	10	60
	須恵器	坏			2	2	39				7	7	98
		高台付坏									1	1	18
		高台坏碗									4	1	87
		甕			8	8	359	1	1	1	27	27	1,103
		蓋									2	2	33
		高台付壺									1	1	62
		不明									3	3	44
中・近世	土師質土器	在地・焙烙系	1	1	10	1	1	9			11	6	167
		内耳土器									1	1	80
		かわらけ									3	3	28
	陶器	碗	2	2	8	6	6	26			17	16	79
		壺									3	3	35
		搦鉢									2	2	36
		常滑産甕				1	1	64			9	8	566
	磁器	碗	2	2	6	1	1	36			15	14	115
		皿									1	1	10
		蓋									1	1	31
	石器	砥石									1	1	206
時期不明		鉄滓			1	1	113				1	1	113
		釘									3	3	39
		錢貨(天聖元寶)									1	1	2
	礎石	砂岩									7	7	9,436
		安山岩									6	6	5,941
	根石	砂岩									2	2	1,630
		凝灰岩									1	1	489
		礫				3	3	605			22	22	3,233
総計		5	5	24	27	27	1,334	2	2	15	223	209	29,500

## 第4章 総括

### 4-1 古代のアラヤ遺跡

今回の調査地点は長者山地区と観音堂山地区との中間地点にあたり、この付近は那賀郡衙の正倉院の域内と考えられている（蓼沼・川口・小松崎編 2004）。過去に報告されている調査は郡衙跡と推定されている長者山地区周辺が中心で、1973（昭和48）年3月に水戸市教育委員会の伊東重敏氏が中心となって調査された第3・7次調査が過去の調査例としてあげられるのみである。しかし、正式調査報告が刊行されておらず、瓦吹堅氏がまとめられているものが資料として出されているのみである（瓦吹 1991）。今回の調査はその南側にあたる。

伊東氏の調査時には、今回の調査区の北隣りより東西に走る幅2.5 m程の瓦と礫から構成される道路状遺構（以下瓦礫道）が検出されている。これは長者山地区において検出された2棟の建物跡との軸線が異なることにより、建物跡と時間差がある区画的な道路と報告された。また、事前調査において古代に埋没したと想定される、東西と南北に走る2条の溝が検出されている（補遺参照）。したがって調査前からある程度の遺構の存在は想定されていた。

今回の調査で確認された古代の遺構としては溝3条（1・6・7号溝）、土坑2基（3・4号土坑）などがある。それぞれの遺構の詳細は本文に譲るが、これらは那賀郡衙の正倉院関連の遺構であった可能性が高い。

1区のやや北側から検出された1号溝は東西方向に主軸をもち、覆土は黒色で上層と中層から炭化米、8世紀中葉の高台付坏が出土している。炭化米が含まれていること、確認されている正倉と軸をほぼ同一にしていること、断面が薬研状で底幅約1 mと大きいことなどから、正倉院の区画溝であった可能性が考えられる。これは正倉院の区画溝として現在判明しているものでは最南端にあり、約50 m南に観音堂山地区の初期寺院の講堂跡と考えられている遺構が存在していることを考えると、その位置関係が注目される溝である。

また、3区で検出された6・7号溝は瓦礫道に切られる形で検出された。6号溝は7号溝を切っており、覆土もロームブロックが全体的に多く混入している。主軸は、正倉の建物軸として想定されている南北方向に一致しており、正倉院に関連する可能性もある。事前調査時にも溝が検出されているが、これも6号溝と同様の主軸方向を示しており、覆土及び断面形も類似していることから、両者は同一の性格を有するものと思われる。なお、6号溝は底面の中央に沿って幅約25 cm深さ10 cmの小さな溝状構造物を有することも注意される。このような付帯構造を持つ溝は近辺の遺跡では検出されてはならず、その意味が注目される。7号溝は主軸が東西方向である。水道工事によって大半が破壊されているが1号溝と同様の立ち上がりをもつ。

5区で検出された3・4号土坑は覆土や形状、底面の標高などから同一の性格を有する遺構と考えられる。3号土坑には見られなかったが、4号土坑では根石と考えられる礫も検出されている。また両方とも掘り方をもつ特徴的な構造を示していることから、この2基の大型土坑は柱穴の可能性が考えられる。調査範囲の制約もあり、この2基以外の分布は不明であるが、根石に伴う形で瓦が出土していることなどから那賀郡衙に関する建物跡が存在していた可能性も指摘できよう。

なお、今回の調査では正倉や官衙・寺院に関わる8世紀から9世紀後半頃の遺物が集中的に出土しているが、このうち、梯子状格子叩きの平瓦に使用された叩き板について触れておきたい。過去に叩き板の研究では栃木県の例が著名である。栃木県では大川清氏の研究から始まり、現在下野国分寺やその造瓦窯の叩き板を約400種に分類し、それぞれ番号をふり先後関係を確認していった結果、現在出土した瓦がどこの窯でどの時期に造瓦されたか、工人の移動等まで判明している（大橋 2005）。今回栃木県例にならない叩き板の同定作業を行ったが、出土遺構の関係上同一時期の瓦は皆無に近く、特徴的な梯子状格子目瓦を観察することによって同一の叩き板を持つ瓦の抽出とその窯の同定を行った。この種の瓦を選んだ理由として、この叩き目を持つ瓦はひたちなか市の原の寺瓦窯に多く出土していることにより、胎土や色調に依らなくても造瓦窯がほぼ特定でき、なおかつ叩き目が特徴的なことが挙げられる。

今回出土した点数は22点であるが、叩き目の観察という作業のため、5cm以上の瓦を使用した。今回出土した瓦には最初からの范の裂け目をもつものがあり、この叩き板を使用した瓦をA類、整然と並んでいる格子目を持つ瓦をB類として分類した。なお、叩き板の破損状況でA類はA-1類からA-4類、A'-1類、A''-1類、B類はB-1から3と番号を便宜的にふった。もちろん今回分類した叩き板の間に位置する瓦も過去や今後出土する可能性がある。あくまで今回は流れを掴むことを主眼とする。

まず1-A類は、叩き板の傷の進行がはっきりしていて、叩き板自体の磨耗も少ないものである（図版26-①・②）。1-B類は范の裂け目の中央付近が欠損し、磨耗度合いにより1-BとB'類に分けた（B類図版26-③、B'類図版26-④・⑤）そして叩き板を彫りなおした段階の1-C類（図版26-⑥）、1-D類は全面的に叩き板を彫りなおした状態（図版26-⑦）である。また出土瓦の色調を見ると1-A類は明黄褐色、B類は赤褐色、B'類は赤褐色及び灰白色、C類は明黄褐色、D類は灰色である。次に2類は、2-A類はやや格子目の欠損があるがはっきりしている段階（図版26-⑧）、2-A'類は格子目がはっきりしているがかなり浅くなっている段階（図版26-⑨）である。色調は2-A類が灰色、2-A'類は黄灰色である。3類は、3-A類（図版26-⑩）、3-B類はA類を一部彫り直しが行われた段階（図版26-⑪）である。色調は3類は明黄褐色となっている。今回の調査での出土遺物以外でも、2004年に観音堂山地区でおこなわれた水戸市教育委員会の発掘調査（蓼沼・川口・小松崎編 2004）で3号土坑から出土した平瓦59は色調や斜走する叩き目の傷中央部が欠けている点からみて今回の分類1類と同時期（1-B類か）のものである。この報告によると3号土坑の帰属時期は8世紀代とされている。したがって今回の出土した瓦1類もその時期には製作・使用されていたことがわかる。

以上の分類より栃木県例のように造瓦工人の移動も考えられるため、同一の窯とはいえませんが、A類の叩き具を使用した瓦は今のところ都合5回以上焼かれている可能性がある。またB類のものは2回以上焼かれている可能性があることがわかる。また、2004年に観音堂山地区でおこなわれた水戸市教育委員会の発掘調査（蓼沼・川口・小松崎編 2004）で2号溝から出土した平瓦177は今回の分類3-A類と色調も叩き板も同様のものである。この報告によると2号溝の廃絶時期は9世紀のさほど早くない時期とされている。したがって今回の出土した瓦3-A類もそれ以前に生産されたものであろう。

今後は原の寺瓦窯の資料だけでなく、さらにこの分類を木葉下窯群の出土資料まで広げれば瓦類の



帰属年代もはっきりし、そこから焼成や胎土等の遺物の特徴を確認することができれば、将来の調査に有益な情報が見出されるであろう。

(林)

## 4-2 中世のアラヤ遺跡

### 1. 瓦礫道について

各遺構の詳細は遺構編に譲るが、まず2区の瓦礫道は、東西に走る現在の道路直下に、同じく東西約36.7mにわたり検出された。道の南端に沿って幅40～60cm、深さ20cm程の箱堀状の側溝が構築されている。同じく北端にも側溝が構築されていたのかについては、北側の水道管所在による調査上の制約から、瓦礫道そのものの幅と共に今回は明らかにできなかった。3区の瓦礫道は、南北両端が調査区外であるため、道幅や側溝の有無については不明である。しかし、2区の道路の延長に位置している点から、やはり東西に構築されていたと思われる。

この2つの瓦礫道は、東西に走る一本の同じ道路下にありながら、2区のものとは東から来て途中で北へ曲がるため、3区のものとは直接的には繋がっていないものと推測される。3区からさらに西へ行った地点の同じ道路下である4区・5区では、水道管敷設により破壊されている可能性もあるものの瓦礫道の痕跡がないため、3区の瓦礫道がどういったルートを描くのか、また2区のものとは繋がるのかどうかは不明である。なお、瓦礫道が北に曲がり調査区外へ出て行く先に、現在の地所境と思われる畑の畝道が繋がり、真っ直ぐ北に向かっているのは示唆的であり、このことは、この周辺の地割が長者山城と同時期のものを遺している可能性を示しているとも考えられる。

このような瓦を二次利用した瓦礫道は、17世紀～18世紀初頭の江戸において、大名屋敷内の遺構として確認されている（宇田川・飯塚・中西 2003）が、中世城郭内における検出事例については現在まで不明である。

今回の調査で検出された15世紀ごろと推定される内耳土器や中世の所産と思われる常滑産甕、北宋銭貨は、昭和48年の調査で確認されて以来（瓦吹 1991）、那賀郡衛正倉院に伴うと推定されていた瓦礫道の構築年代を、中世後半ごろに修正し得る大きな成果であるといえる。そして、瓦礫道の年代が中世に置かれたことで、未解明な部分の多い長者山城の景観を復元する上での重要な資料になると考えられる。

### 2. 長者山城主について

#### (1) 古代～中世初期

長者山・長者屋敷の名称の由来ともなった「一盛（一守）長者」が、後冷泉天皇の頃（1045～1068）にここに館を構えていたと伝えられる。永保3年（1083）、後三年の役に出征した源義家は10万の大軍を率いてこの地に至り、「一盛（一守）長者」の盛大なもてなしを受ける。奥羽の平定後、再びこの地を踏んだ義家を長者は同じく盛大に饗応したが、そのあまりの富裕ぶりを危険視した義家は、長者を急襲して滅ぼしたという。また義家の祖父源頼信の5男常葉五郎義政が居館を構えていたともいわれ、そうであるならば、義家は叔父を討ったとも考えられる。いずれにせよ、これらの話は伝承の域を出ないが、律令制崩壊後もこの地がなお繁栄し、有力な人物が館を構えていたことを示すものであろう。

『水府志料』や『新編常陸国誌』などの江戸後期の地誌は、こうした俗伝とは別に長者屋敷は東山道河内駅家の駅長の宅であろうと推定する一方、「或云古那珂国造ノ治所ニテ後郡領ノ居リシ処ナリ」と、国造から郡領へと連なる古代那賀郡の支配者の居宅との説も紹介している。さらに考えれば、「仲国造」の流れを組むとされる那賀郡大領の宇治部直と河内駅家との関係から「駅守長者」「市守長者」ではないかとも指摘される「一盛（一守）長者」とは同一の系譜上に位置づけられる可能性もあるが、詳細は不明である。

## (2) 室町～戦国期の城主春秋氏とその一族について

15世紀末に入ると、この地には春秋駿河守なる城主がいた。春秋氏は、常陸大掾氏の支流で鹿島氏の祖である鹿島成幹5男立原五郎久幹の2男繁幹の子久幹が、鹿島郡春秋村を領して春秋三郎と称した事に始まる。また、鹿島六郎宗幹の2男立原次郎有幹の3男繁幹が、春秋三郎を称したともされる。早くから水戸方面に進出し、一時佐竹氏の家老になっていたという。

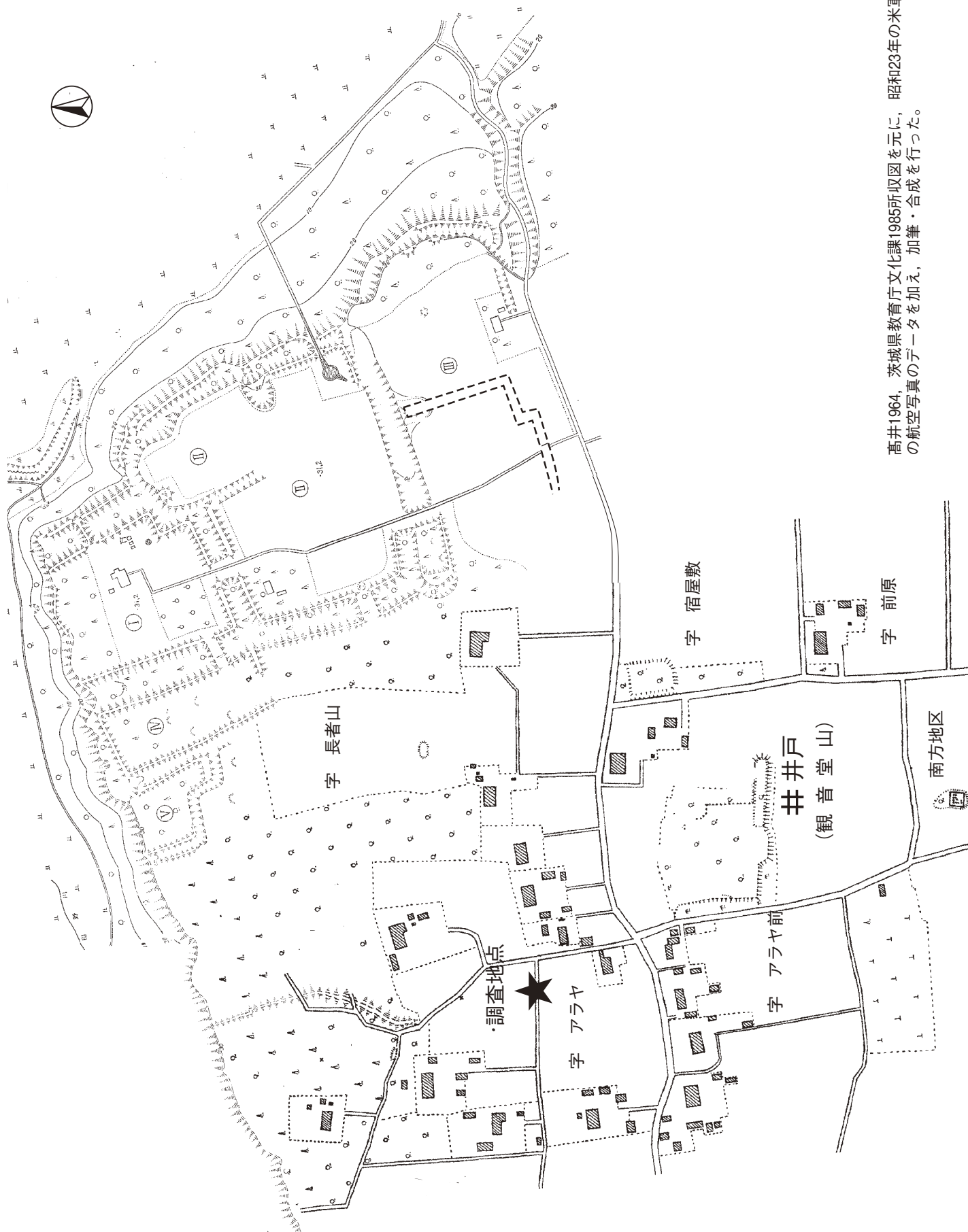
その後、江戸氏の勢力が伸張してくるとその配下となり、応永33年（1426）6月23日に、馬場大掾満幹の拠る水戸城を江戸通房が奪取した際、随従した18騎中に春秋尾張守がいる。この尾張守は、水戸城に移った通房より、その元の居城河和田城（水戸市河和田町）を与えられた。河和田報佛寺阿弥陀像台座にみられる、文明13年（1481）正月13日の造仏銘に、「檀那」として現れる春秋尾張守幹勝はその子孫であろう。この幹勝は、江戸通長の子とされる上野介通式を養子としたため、両家はさらに密接な関係となる。

春秋一族は尾張守或いは上野介（守）を称するこの河和田系を本家とし台渡の長者山に春秋駿河守、同じく水戸北方の田野に春秋兵庫、千波湖畔の見川城に春秋石見守がいたという。

長者山の春秋氏は、渡里の勝幢寺棟札に「大旦那春秋駿河守」とあるのが根本資料であるが、摩滅の為年次が不明である。これと同一人物かは不明であるが、15世紀末の文明末年ごろ、江戸通長が石神城（東海村）の小野崎越前守に送った盟約の起請文中に、春秋駿河守を使節として遣わし詳細を述べさせる旨の記述が見られる。また、文明13年（1486）には江戸通雅の徳宿城攻略と畑田城攻撃（共に鉾田市）に春秋駿河守が従軍しており、これと同一人物と思われる。いずれにせよ、江戸通長・通雅の代には、春秋駿河守は重臣としてかなりの勢力を持っていたことが分かる。

見川の春秋氏は、延徳年間（1489～91）に、河和田城主春秋尾張守幹安の第二子石見守幹光がいたと伝わるのみである。他方、田野の春秋氏は、天正12年（1584）に、田野の鹿島大明神再興の棟札に大旦那として見える春秋兵庫助重元が知られる。この重元は、江戸重通の水戸城落去と下総結城氏への亡命に随行し、さらに重通の子宣通が結城秀康の越前移封に従って同地に赴くと、共に仕官している。このことから、江戸氏末期に側近的な立場にあった事がうかがえる。また、「重」の字は、江戸重通が佐竹義重から受けたものを、さらにこの重元に許したものと考えられる。

これら春秋4氏については、史料的な制約により分流の年代や歴代の系譜が不明な点が多い。しかし、その居城を見ると、河和田城は江戸氏の元の居城であり、戦国時代の平城では大規模なものとされる。ここから桜川を通じて見川城・水戸城へと続く。見川城は、水戸城とは千波湖を隔てており、同城西部を固める位置に所在する。長者山と田野は那珂川に沿って連なり、佐竹領と対峙する水戸城北方の拠点群であり、規模からいっても長者山はその要の城郭といえよう。このように水戸城を取り囲む



高井1964, 茨城県教育庁文化課1985所収図を元に, 昭和23年の米軍撮影の航空写真のデータを加え, 加筆・合成を行った。

第28図 長者山城縄張図

ように要地に配置されている点、先述の如く江戸氏から養子を迎え、また偏諱を受けている点、重臣として諸所の合戦に活躍している点などから、春秋一族の江戸氏家臣団中での地位とその勢力のほどをうかがうことができる。

天正 18 年（1590）12 月 19 日、佐竹義重・義宣父子は水戸城を攻略し、江戸重通は妻の実家である下総結城氏に亡命する。この日に勝倉台に防戦に出て討死した 29 将の中に春秋上野八郎の名があり、これは河和田の春秋氏と思われる。翌日河和田城も佐竹勢により落城したという。那珂、茨城、鹿島の 3 郡に 99 郷に及んだ江戸領は蹂躪され、十城十八砦と言われる支城群も悉く落城或いは自落し、江戸氏は滅亡した。長者山や見川などの諸城も殆どは「風を聞きて潰ゆ」と自落し春秋一族も或いは討死、或いはいずともなく落去したものと思われる。その後、当地には佐竹の家臣である小曾沼権之助なる者がいたとされるが、その身分からいってもこの城主であったとは考えにくい（『水戸市史』）、長者山城は落城後程なくして廃されたものと思われる。

### 3. 長者山城の立地と構造について

長者山城は、上市台地の北東端、那珂川と田野川の合流点を見下ろす台地の突端部に位置する。城は、この合流点上の 100m ～ 70m 程の主郭を中心に、台地続きの西と南方向に連郭式の曲輪配置をしている。川に面した北と東は、眼下の水田面との比高約 20m の崖となり、要害の地である。

古代から中世初頭の長者山城は、主郭を中心とした単純なものであったであろうが、現在みられる連郭式の城郭として整備されたのは、15 世紀後半から 16 世紀末ごろの城主春秋氏の影響下においてと思われる。

城は、現状で空堀と二重土塁に囲まれた大きく 5 つの曲輪より構成されるが（第 28 図）、比較的保存状態の良い主郭部以外は、宅地化や耕地開発、ゴルフ場建設により堀や土塁が一部湮滅し断片化しており、全容はなお不明な点が多い。城域は、南北 350m ・東西 250m 程と把握されているが、城外西方にあたる今回の調査地点北方の山林内にも、その性格は慎重な検討を要するが、南北に構築された土塁状や折れを持つ空堀などが認められるため、西端はさらに拡大される可能性がある。

また、南端については、長者山地区と観音堂山地区を分けて東西に走る道路付近の北側が境と推定されている。そのすぐ南側に位置する古屋敷或いは宿屋敷と呼ばれる地区でも、かつて古井戸や上幅 2m と 10m の空堀があったとされ（『水戸市史』）、西に隣接する観音堂山地区南部の土塁状遺構やその内側に沿って確認された溝を経て（川口・小松崎・新垣編 2005）、北の長者山地区の山林内にある土塁や空堀に至るラインと、さらにその外側のアラヤ地区を経て、さらに西方の堀町と呼ばれる地区に至る広義の長者屋敷とされる地区全体が、春秋氏の長者山城と家臣団屋敷や城下集落を包摂する外郭や惣構を形成していた可能性がある。観音堂山地区で確認された戦国期の井戸（井上・千葉 1995）や土塁の東側に南北に検出された最大幅 2.0m 深さ 0.75m の中世と推定される溝（蓼沼・川口・小松崎編 2004）、南方地区の塔跡基壇を利用した中近世の火葬墓群（川口・小松崎・新垣編 2005）、そして今回確認された中世と推定される瓦礫道なども、城郭研究で従来想定されていた以上の長者山城の広がりを示すものであろう。

このように考えるならば、城域は少なくとも 450m 四方はあったと思われ、春秋本家の河和田城に匹敵するのみならず、江戸氏の十城十八砦の中でも、近年巨大な惣構が確認された南部「境目の城」であ

茨城町小幡城や、佐竹領と接する東部最前線に位置し、台地先端部を切落とした大規模な城域を持つひたちなか市勝倉城と共に有数の規模となる。

台渡の北方 5km、那珂川の対岸に位置する那珂市戸村城は佐竹氏の対江戸氏最前線基地で、広大な惣構を持つ城として知られる。城主戸村氏は佐竹一門であり、江戸氏との合戦は主にこの家が当たっていた。長者山城はこの城と対峙する江戸氏領北の拠点として整備され、重臣の春秋氏が配置されたのであろう。また、この地が古代以来交通の要衝であり、那珂川の水運や渡河点の掌握を目的としていたことも十分に考えられるところである。

なお、長者山城の縄張りは戸村城や小幡城と共通する点が指摘できる。特に戸村城は、江戸氏の遠祖那珂氏が築いた古い城館を佐竹氏が戦国期に大改修したもので、小規模な曲輪を取り込み複雑に配置する郭構成など長者山との類似性が注目される。 (小野)

## 補遺 工事立会い調査出土遺物

今般の土木工事の隣接地点において、公共下水道那珂川第1排水区(3-4-1 I区)水道管立坑埋設工事の立会い調査を平成18年1月27日～1月28日に実施した。その結果、表土直下40cmの深さから南北方向に横走する溝状遺構1条、東西方向に横走する溝状遺構1条、近現代のイモ穴と見られる長方形の土坑2基が確認された(写真1)。2条の溝については、東西方向の溝が南北方向の溝(SD1)を切って構築されている状況が確認され、SD1の覆土上層からは埋蔵文化財収納箱2箱分の遺物が出土した(第12表)。

SD1を切る東西方向の溝は半分以上が調査区外に延びているため、上面や基底部の幅については不明であるが、深さは遺構確認面から基底部まで1.9mもあり、断面形状は逆台形状を呈する(写真2)。このような規模や形状を持つ溝は、郡衙正倉院を区画する溝に類似しており、北側において、那賀郡衙の正倉院を構成していた正倉とみられる礎石建物が13棟以上確認されている状況を考慮すれば(高井 1964, 瓦吹 1991, 水戸市教育委員会 2007)、東西方向の溝是那賀郡衙の正倉院の南側を区画する溝になる可能性がある。SD1の出土遺物には、縄文時代の打製石斧や時期不明の軽石や礫・礫片などもあるが、奈良・平安時代の瓦が主体を占めている

(第12表)。礎石の残片が出土していることから、礫・礫片の一部については礎石下に敷かれていた根石の可能性もある。出土遺物で図化の可能なものは、実測図と属性表を掲載し(第21図, 第13表～17表)、図化できないものについては点数・個体数・重量を記載した一覧表を提示し、補遺とする(第12表)。瓦の中でも比較的多いのは長者山地区の瓦倉にみられる凸面へら削り平瓦, 凸面縄叩き平瓦, 凸面へら削り・へらナゲ丸瓦と観音堂山地区の初期寺院の主要伽藍にみられる凸面正格子叩き平瓦, 凸面菱形格子叩き丸瓦であり(第12表), 観音堂山地区にみられるものと長者山地区にみられるものとが混在している状況が読み取れる。また、礎石残片についても、観音堂山地区の主要伽藍に利用されている花崗岩と、長者山地区の瓦倉に利用されている砂岩の両方がみられる。礎石については、平成18年度に水戸市教育委員会が実施した長者山地区の範囲確認調査で確認されたSB003の礎石に花崗岩が利用されていることが確認されており、全ての正倉の礎石に砂岩が用いられていた訳ではなかったことが判明している。このような遺物・遺構の在り方は、観音堂山地区の初期寺院の造営に際して準備された瓦や礎石等の資材が長者山地区の正倉の造営に際して転用されたか、観音堂山地区の初期寺院と長者山地区の正倉の造営が並行して行われていた可能性を示している可能性がある。その当否を解明するためには、長者山地区の瓦倉に葺かれていた瓦の詳細な分類と量的な検討が必要である。

(木本・川口)

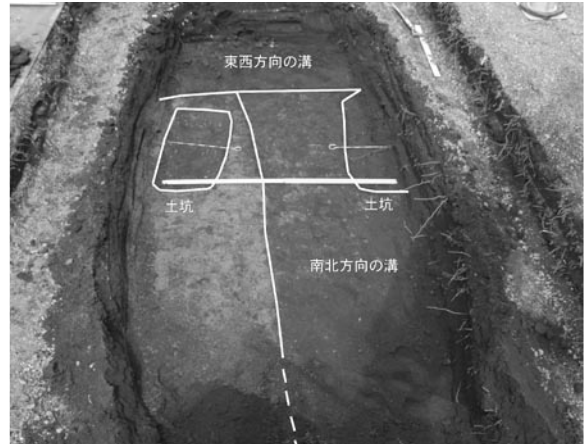


写真1 遺構検出状況(南から)



写真2 東西方向溝断面(西から)

第 12 表 工事立会い調査出土遺物一覧

出土遺構	出土遺物		縄文時代				奈良・平安時代				時期不明				総点数	総重量	
			点数	個体	重量	小計	点数	個体	重量	小計	点数	個体	重量	小計			
SD 1	石器	撥形打製石斧	1	1	309	1									1	309	
	瓦	三重弧文式軒平瓦					1	1	201	1						1	201
		菱文式軒平瓦					1	1	255	1						1	255
		型式不明軒平瓦					4	4	849	4						4	849
		凸面正格子叩き平瓦					13	13	1,724	13						13	1,724
		凸面正格子叩き + 刷毛目平瓦					1	1	255	1						1	255
		凸面梯子状格子叩き平瓦					4	4	716	4						4	716
		凸面菱形格子叩き平瓦					5	5	1,454	5						5	1,454
		凸面縄叩き平瓦					23	23	3,344	23						23	3,344
		凸面ヘラ削り平瓦					52	52	7,903	52						52	7,903
		凸面糸切り平瓦					1	1	280	1						1	280
		凸面の製作痕跡による分類が不可能な平瓦					15	15	1,187	15						15	1,187
		凸面ヘラ削り・ヘラナデ丸瓦					31	31	4,900	31						31	4,900
		凸面正格子叩き丸瓦					1	1	75	1						1	75
		凸面菱形格子叩き丸瓦					5	5	1,027	5						5	1,027
	凸面縄叩き丸瓦					3	3	300	3						3	300	
	泥条盤築技法による丸瓦					1	1	35	1						1	35	
	種別の判定が不可能なもの					16	16	556	16						16	556	
	須恵器	有台坏 (木葉下窯跡群産)					1	1	61	1						1	61
石	礎石残片 (砂岩)					6	6	4,790	6						6	4,790	
	礎石残片 (花崗岩)					2	2	1,208	2						2	1,208	
	軽石片									1	1	38	1	1	38		
	礫・礫片									33	33	10,655	33	33	10,655		
総 計			1	1	309	1	186	186	31,120	186	34	34	10,693	34	221	42,122	

※重量の単位は g

第 13 表 工事立会い調査 SD1 出土石器属性

図版番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備 考
1	撥形打製石斧	(10.60)	(7.20)	(3.40)	(309.0)	ホルンフェルス	

※ ( ) 内の数値は現存値

第 14 表 工事立会い調査 SD1 出土軒平瓦属性一覧

図版番号	型式	全長 (cm)	瓦当厚 (cm)	内区厚 (cm)	上外区縁幅 (cm)	下外区縁幅 (cm)	胎土・鉱物	胎土色調	調整・痕跡	備考
2	三重弧文式	(8.20)	(2.50)	—	—	—	長石, 石英 ×	2.5Y5/4 (にぶい赤褐)	瓦当は棒状工具によるヘラ描き重弧文。凹面側の平瓦接合部には幅 1.3 ~ 2.0cm の縦刻みの転写痕。側面はヘラケズリ。	段頸。頸面文様部剥落
3	菱文式 (3282 型式)	(6.70)	(3.70)	(2.00)	0.70	(1.00)	長石, 石英 ×	7.5Y1/6 (灰)	凹面は中央に布目圧痕。周縁はヘラケズリ。側面はヘラナデ。凸面は縦方向のヘラケズリの後に斜め方向のヘラケズリ。	曲線頸

※ ( ) 内の数値は現存値

第 15 表 工事立会い調査 SD1 出土平瓦属性一覧

図版番号	全長 (cm)	厚さ (cm)	凹面痕跡	凹面調整	凸面痕跡	凸面調整	胎土・鉱物	海面骨針	色調	備考
4	(11.50)	2.20	布目 枠板圧痕	ヘラケズリ	正格子叩き	ヘラケズリ	長石, 石英	×	5Y7/2 (灰白)	桶巻作り。観音堂山地区創建瓦。
5	(10.00)	2.60	布目 糸切り	ヘラケズリ	梯子状 格子叩き	—	長石, 石英	×	5Y5/1 (灰)	

6	(8.30)	2.60	布目 糸切り	ヘラ ケズリ	正格子 叩き+刷 毛	—	長石, 石英	×	2.5Y7/2 (灰黄)	
7	(12.80)	2.60	布目 糸切り 杵板圧痕	ヘラ ケズリ	菱形格子 叩き	—	長石, 石英	×	10Y5/1 (灰)	桶巻作り。広端縁と側縁が残存。
8	(6.70)	1.45	布目	ナデ	長縄 叩き	ナデ	長石, 石英	○	2.5Y5/1 (灰)	一枚作り。広端縁と側縁が残存。 広端縁には布目。
9	(11.00)	2.00	布目 杵板圧痕	ヘラ ケズリ	長縄 叩き	ナデ	長石, 石英, チャ ート礫	×	5YR5/3 (にぶい赤褐)	桶巻き作り。狭端縁と側縁が残 存。
10	(8.70)	1.70	布目	—	—	ヘラナデ	長石, 石英	×	10YR7/3 (にぶい黄橙)	一枚作り。
11	(9.50)	2.10	糸切り	—	糸切り	—	長石, 石英	×	2.5Y7/3 (浅黄)	

※( )内の数値は現存値

第 16 表 工事立ち会い調査 SD1 出土丸瓦属性一覧

図版 番号	形態	全長 (cm)	厚さ (cm)	凸面 痕跡	凸面 調整	凹面 布目	凹面 調整	胎土 鉱物	海面 骨針	色調	備考
12	—	(10.80)	(2.00)	正格子叩き	—	○	—	長石, 石英, チャ ート礫	×	5Y5/2 (灰オリーブ)	広端縁が残存。

※( )内の数値は現存値

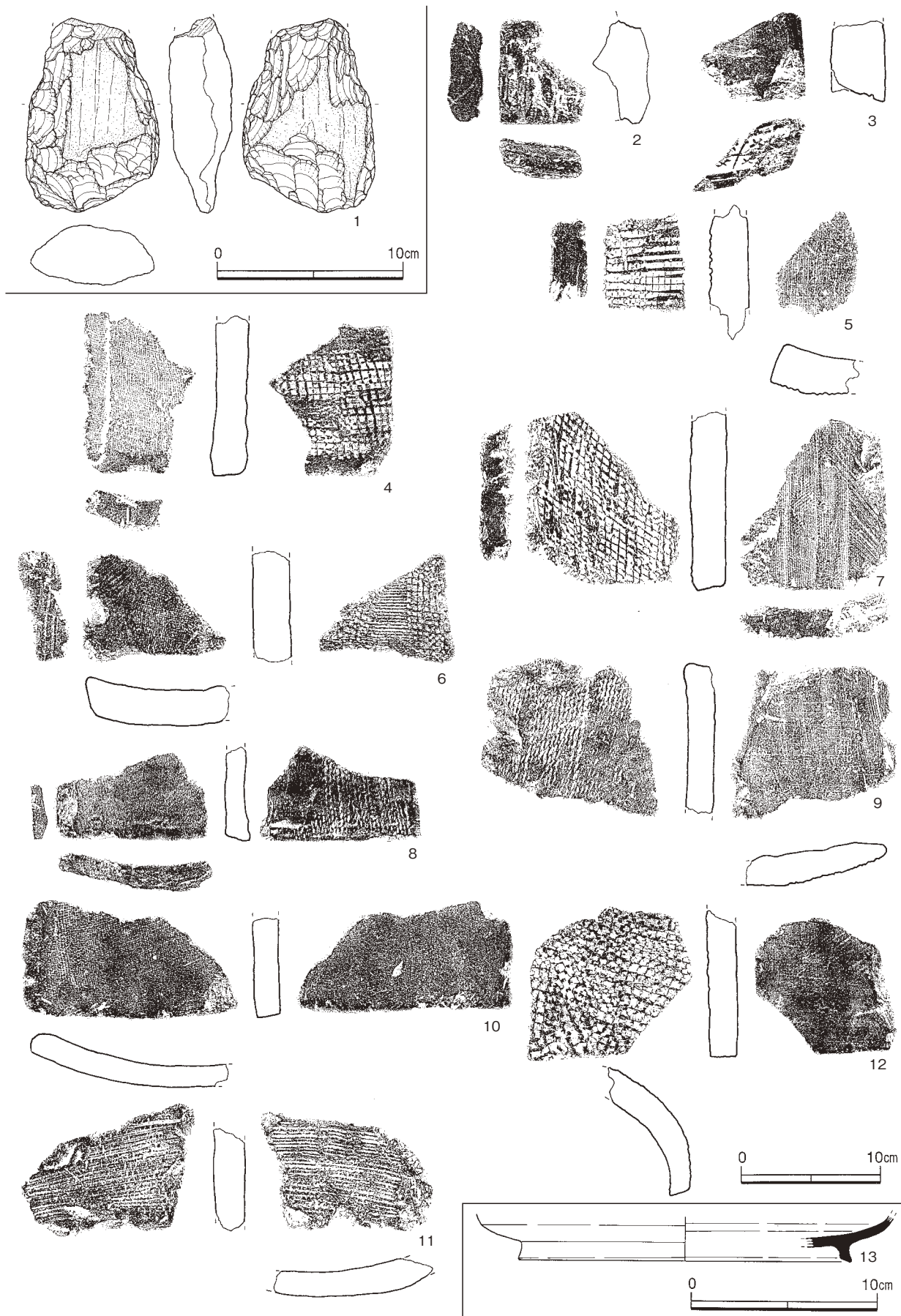
第 17 表 工事立ち会い調査 SD1 出土土器属性一覧

図版 番号	器種	法量 (cm)	遺存 率 (%)	焼成	胎土 鉱物	海面 骨針	色調	器形・技法の特徴	備考
13	須恵器盤	高台径 [16.0] 屈曲部径 [18.4] 器高 (2.90) 器厚 [0.60]	20	良好・堅緻	長石, 石英	×	内面: 5Y5/1 (灰) 外面: 5Y7/2 (灰白)	内外面ともにロク 口水挽き成形痕。	外面の底面・高台部～屈曲部に かけて自然釉の降灰が見られる のに対し、内面側には見られない ことから、重ね焼きの際には天地 を逆にしていただけと見られる。

※( )内の数値は現存値

※[ ]内の数値は回転復原値





第29図 工事立会い調査出土遺物

## 引用・参考文献

- 東清次郎 1909 『常総戦蹟』水陽館
- 井 博幸・小宮山達雄 1999 「第7章 内原町周辺の主要古墳と出土遺物」『牛伏4号墳の調査』国士館大学・牛伏4号墳調査団
- 石井 豊 1992 『中世常総諸家譜』下巻 暁印書館
- 伊東重敏 1975 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷廃寺出土古瓦雑考』常陸考古学研究所
- 伊藤廉倫 1995 『茨城県水戸市 堀遺跡 -住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』水戸市教育委員会
- 井上義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 井上義安・栗原芳子 1996 『水戸市台渡里廃寺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 根本陸子 1995 『水戸市台渡里遺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市堀遺跡発掘調査会
- 茨城県 1995 『茨城県史 考古資料編 奈良・平安時代』
- 茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』
- 茨城県教育庁文化課 1985 『重要遺跡調査報告書Ⅱ(城館跡)』茨城県教育委員会
- 1989 『地方別日本の名族-三』関東編1新人物往来社
- 茨城県立歴史館 1994 『学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城城郭研究会 2006 『図説茨城の城』国書刊行会
- 茨城大学考古学研究会 1976 『茨城大学周辺遺跡分布調査報告書Ⅱ』
- 宇多川肇・飯塚みつ江・中西崇 2004 『東京都新宿区 市谷薬王寺町遺跡Ⅳ』三井住友建設株式会社東京土木支店
- 大川 清 1996 『古代のかわら』日本窯業史研究所
- 小川和博・大瀧淳志・川口武彦 2006 『台渡里遺跡 -集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』水戸市教育委員会
- 大橋泰夫 2005 「造瓦の叩き板に関する基礎的研究」『国士館考古学』創刊号 国士館大学考古学会
- 大森信英 1952a 『渡里村大字堀字西原四号地下式墳』『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 1952b 『渡里村大字堀字西原の地下式墳』『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 1952c 『渡里村大字渡里字アラヤ遺蹟予備調査に於ける報告』『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 大脇 潔 1974 「69 権現山下横穴群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県
- 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『奈良国立文化財研究所学報 第49冊研究論集Ⅹ』奈良国立文化財研究所
- 榎村宣行 1993a 「(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡」財団法人 茨城県教育財団
- 1993b 「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』第2号 財団法人 茨城県教育財団
- 2005 「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相 -常陸国河内郡を中心として-』茨城県考古学協会
- 霞ヶ浦町郷土資料館 2000 『図録第22回特別展 古代の瓦 常陸国府の瓦づくり』霞ヶ浦町郷土資料館
- 川口武彦 2006 『範囲確認調査の成果』『国指定記念シンポジウム 台渡里廃寺跡を考える 資料集』水戸市教育委員会・茨城県教育委員会
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2007 『発掘された常陸国最古の初期寺院 -国指定史跡台渡里廃寺跡-』『常総の歴史』35号 崙書房
- 川崎純徳 1982 『台渡里廃寺跡 -範囲確認調査報告書-』水戸市教育委員会
- 瓦吹 堅 1988 『茨城の装飾古墳』新風土記社
- 1991 『常陸の古印』『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会
- 黒澤彰哉 1998 『水戸市台渡里廃寺覚書Ⅲ -観音堂山・南方・長者山地区の性格について-』『婆良岐考古』13 婆良岐考古同人会
- 2000 『常陸国那賀郡における寺と官衙について』『茨城県立歴史館報』25 茨城県立歴史館
- 2007 『台渡里寺と那賀郡衙』『文字瓦と考古学』国士館大学実行委員会
- 佐々木藤雄・小久顕治・大橋 生 2007 『茨城県石岡市 片野城跡』株式会社東京航業研究所
- 佐々木藤雄・川口武彦・大橋 生 2006 『台渡里廃寺跡 -市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)-』水戸市教育委員会
- ・林 邦雄・瀧美賢吾
- 佐々木義則 1995 『木葉下窯跡群産坯AIの変化について -消費地における形態と調整技法の様相-』『婆良岐考古』17 婆良岐考古同人会
- 1999 『茨城県北半部における土師器碗の形式変遷』『婆良岐考古』21 婆良岐考古同人会
- 2001 『茨城県における8・9世紀の須恵器甕概観』『婆良岐考古』23 婆良岐考古同人会
- 高井佛三郎 1964 『常陸台渡里寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 蓼沼香未由・川口武彦・小松崎博一編 2004 『台渡里廃寺跡 -集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』水戸市教育委員会
- 外山泰久 1993 『アラヤ前遺構(水戸市渡里町)をめぐって』『常総の歴史』13 崙書房
- 1967 『新編常陸国誌』宮崎報恩会復刊本
- 中山信名 2002 『茨城県』『第51回 埋蔵文化財研究会集 装飾古墳の展開 -彩色系装飾古墳を中心に- 資料集』埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会
- 生田目和利・稲田健一 1977 『江戸氏の研究(関東武士研究叢書1)』名著出版
- 萩原龍夫 1995 『茨城の旧石器時代』『茨城県考古学協会誌』7 茨城県考古学協会
- 橋本勝雄 2002 『茨城県における旧石器時代の編年』『茨城県における旧石器時代研究の到達点 -その現状と課題-』茨城県考古学協会、茨城旧石器シンポジウム実行委員会、ひたちなか市教育委員会
- 土生朗治・川口武彦・新垣清貴 2005 『台渡里廃寺跡 -市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』水戸市教育委員会
- 吹野富美夫・江幡良夫 1998 『水戸市軍民坂遺跡出土の搔器』『常総台地』14 常総台地研究会
- 藤木久志 2006 『土一揆と城の戦国を行く』朝日新聞社
- 藤村達巳・塩谷 修 1982 『第2章 調査報告(1)古墳群の立地と環境』『常陸安戸屋古墳』水戸市教育委員会
- 古川 巧 1990 『佐竹氏水戸城攻略の跡を行く』茨城図書
- 水戸市教育委員会 2006 『吉田古墳1』
- 2007 『平成18年度茨城県指定史跡台渡里廃寺跡長者山地区 -範囲確認調査現地説明会資料-』
- 水戸市史編纂委員会 1963 『水戸市史』上巻 水戸市
- 柳澤清一 1995 『茨城県における加曾利E 4式編年の検討』『茨城県考古学協会誌』7号 茨城県考古学協会
- 両角まり 1996 『内耳鍋から焙烙へ -近世江戸在地系焙烙の成立-』『考古学研究』42-4 考古学研究会
- 渡辺俊夫 1981 『第5章 砂川遺跡』『(茨城県教育財団文化財調査報告第XVI) 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 宮部遺跡・鹿の子A遺跡 砂川遺跡』財団法人 茨城県教育財団

# 写 真 图 版

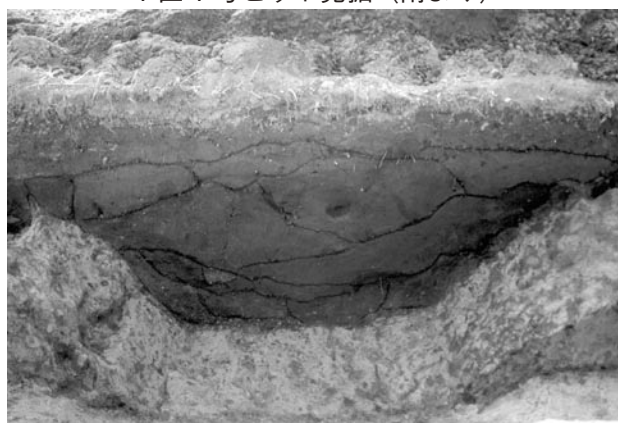




1区1号ピット完掘 (南より)



1区1号溝遺物出土状況 (東より)



1区1号溝セクション (東より)



1区北側全景 (北より)



2区瓦礫道① (東より)



2区瓦礫道② (東より)



2区瓦礫道③ (西より)



2区瓦礫道④ (東より)

図版 2



2区瓦礫道⑤ (西より)



2区瓦礫道常滑片出土状況 (東より)



2区2号溝遺物出土状況 (東より)



2区2号溝完掘 (東より)



2区3号溝完掘 (南より)



2区4号溝遺物出土状況 (西より)



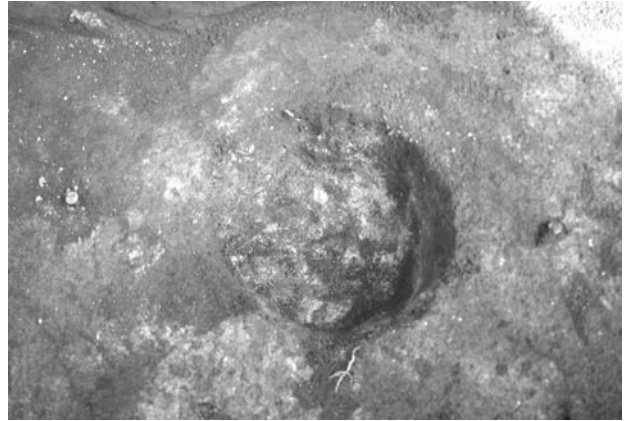
2区4号溝完掘 (西より)



2区1号土坑完掘 (南東より)



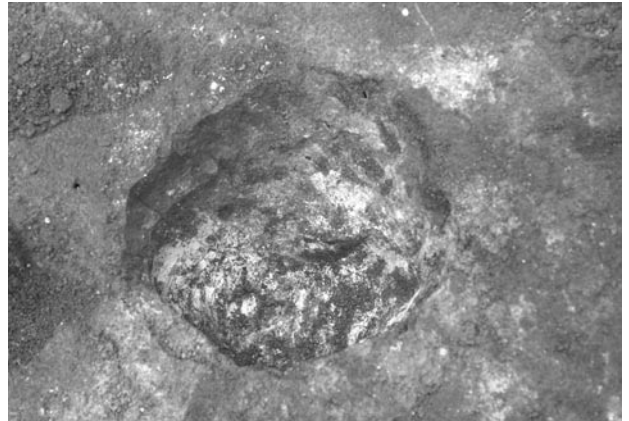
2区2号ピット完掘 (南より)



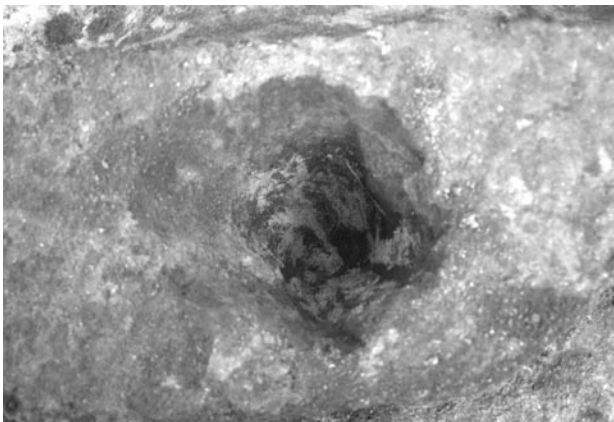
2区3号ピット完掘 (南より)



2区4号ピット完掘 (南より)



2区5号ピット完掘 (南より)



2区6号ピット完掘 (南より)



2区7号ピット完掘 (南より)

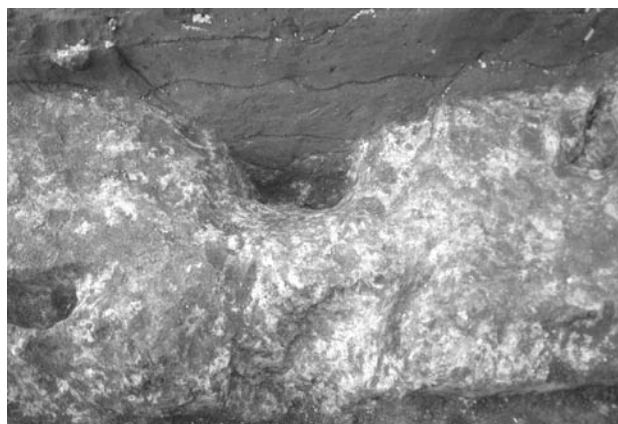


2区8号ピット完掘 (南より)



2区9号ピット完掘 (南より)

図版 4



2区 10・11号ピット完掘 (南より)



2区 12号ピット完掘 (南より)



2区 13号ピット完掘 (南より)



2区西側全景 (東より)



2区全景 (西より)



2区全景 (東より)



3区瓦礫道 (西より)



3区 6号溝完掘 (南より)





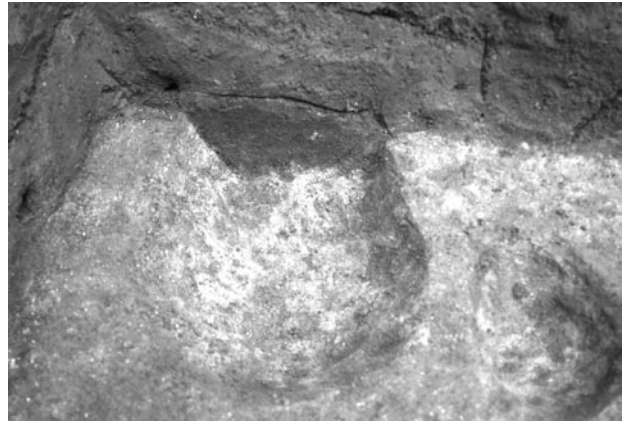
3区7号溝完掘（東より）



3区6・7号溝完掘（南東より）



3区26号ピット完掘（南より）



3区27・28号ピット完掘（南より）



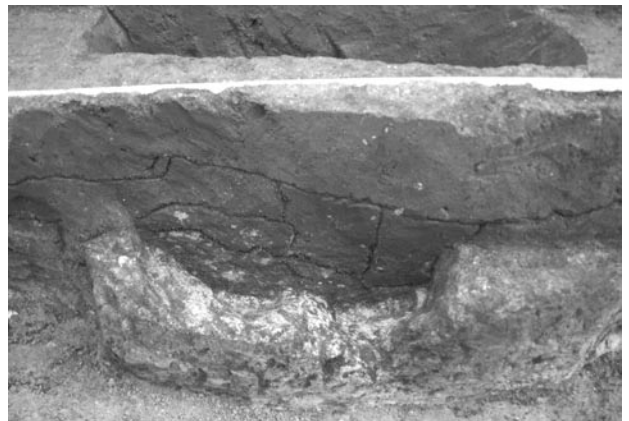
3区全景（西より）



4区5号土坑セクション（南より）



4区6号土坑セクション（南より）



4区7号土坑セクション（南より）

図版 6



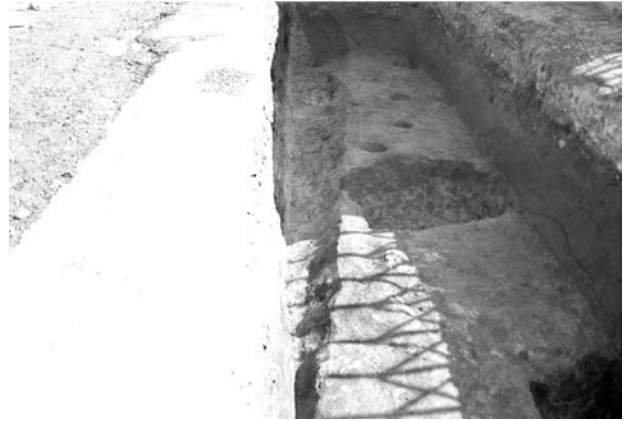
4区25号ピットセクション (南より)



4区全景 (西より)



4区全景 (東より)



5区5号溝完掘 (西より)



5区3号土坑完掘 (南西より)



5区3号土坑セクション (北より)



5区3号土坑掘り方完掘 (南より)



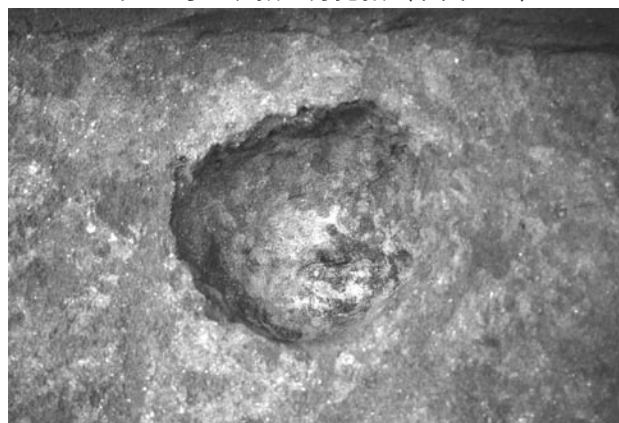
5区4号土坑根石出土状況 (北東より)



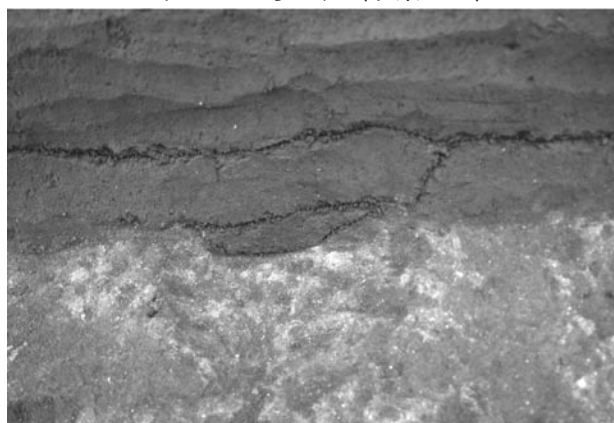
5区4号土坑掘り方完掘 (北西より)



5区3・4号土坑 (北東より)



5区14号ピット完掘 (東より)



5区15号ピットセクション (北より)



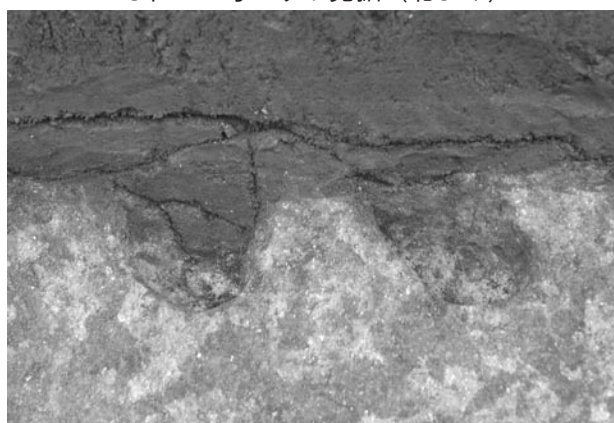
5区16号ピット完掘 (北より)



5区17号ピット完掘 (北より)

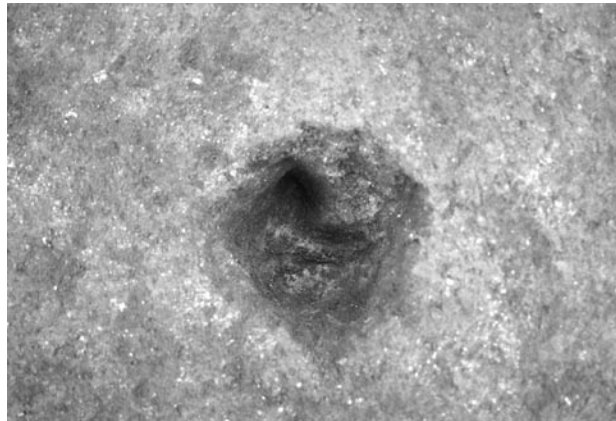


5区18号ピットセクション (南より)

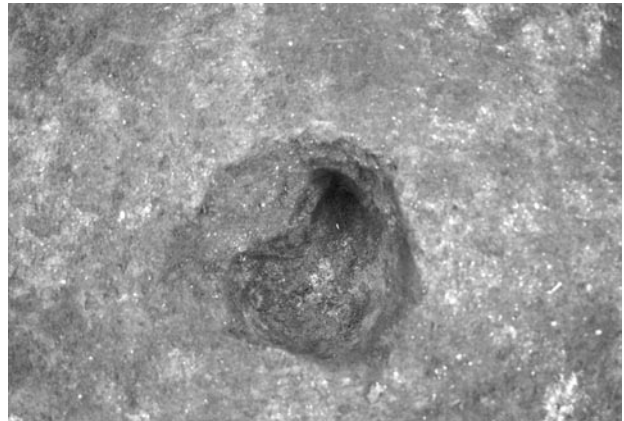


5区18・19号ピットセクション (北より)

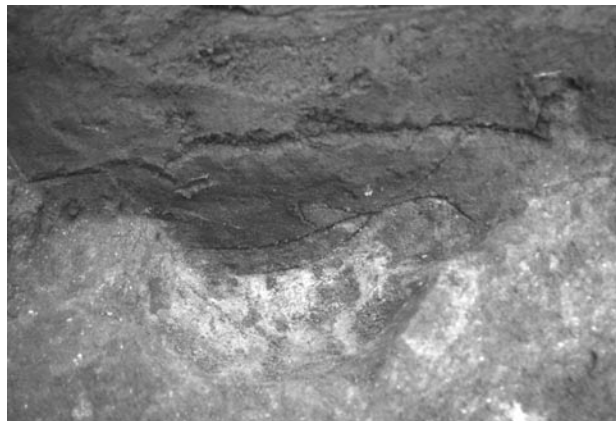
図版 8



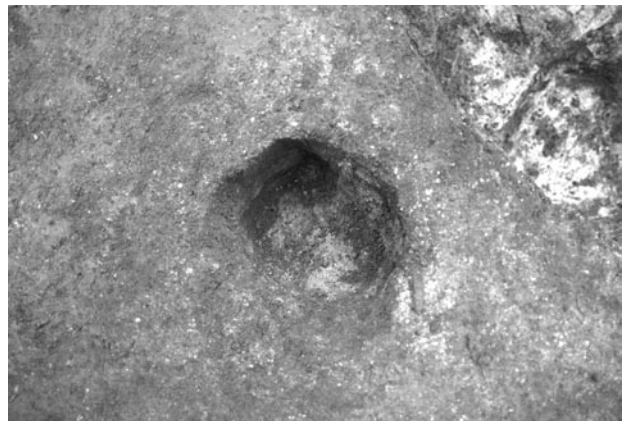
5区21号ピット完掘 (北より)



5区22号ピット完掘 (北より)



5区23号ピットセクション (北より)



5区24号ピット完掘 (北より)



5区21・22・24号ピット (北より)



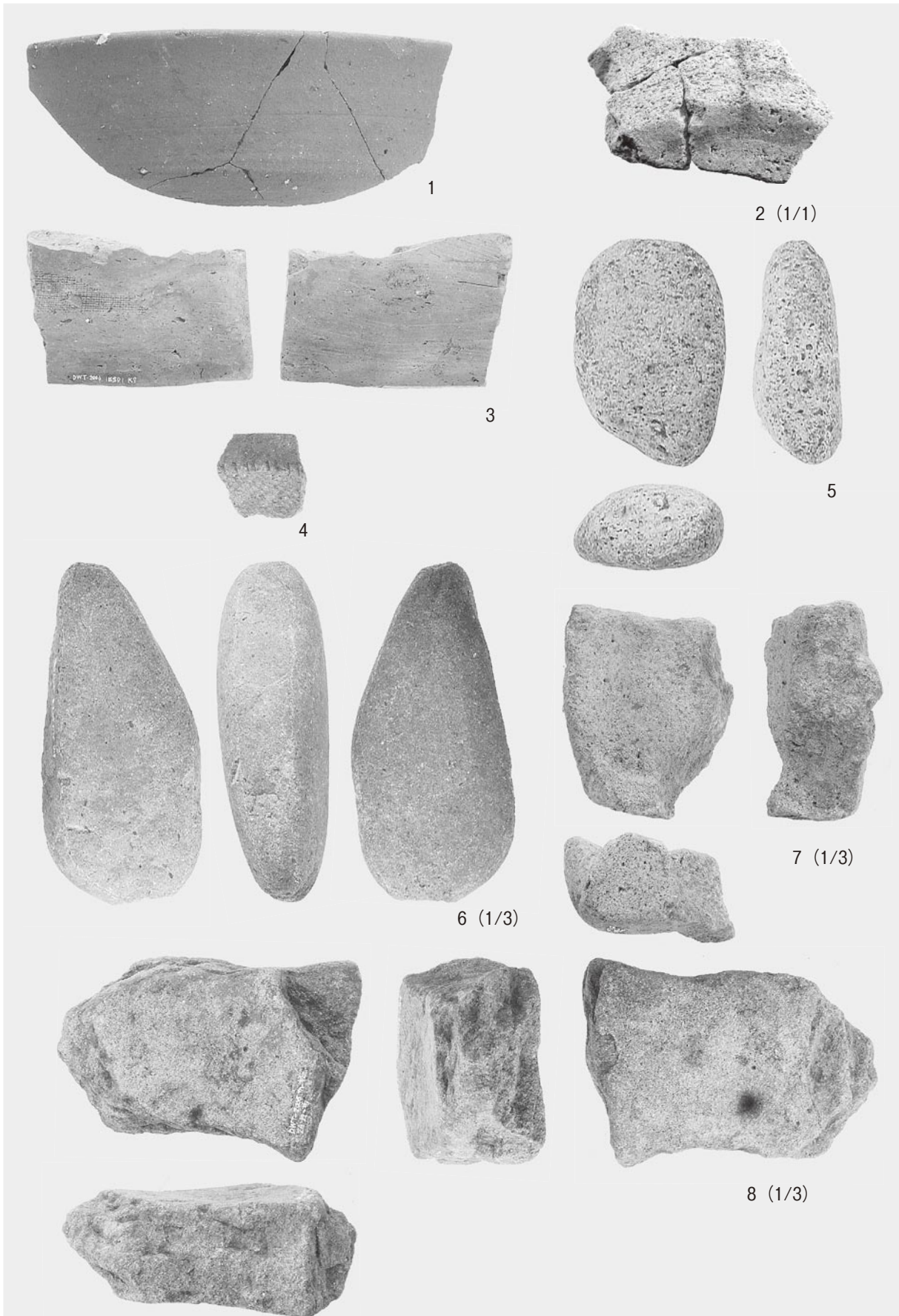
5区全景 (東より)



5区全景 (西より)

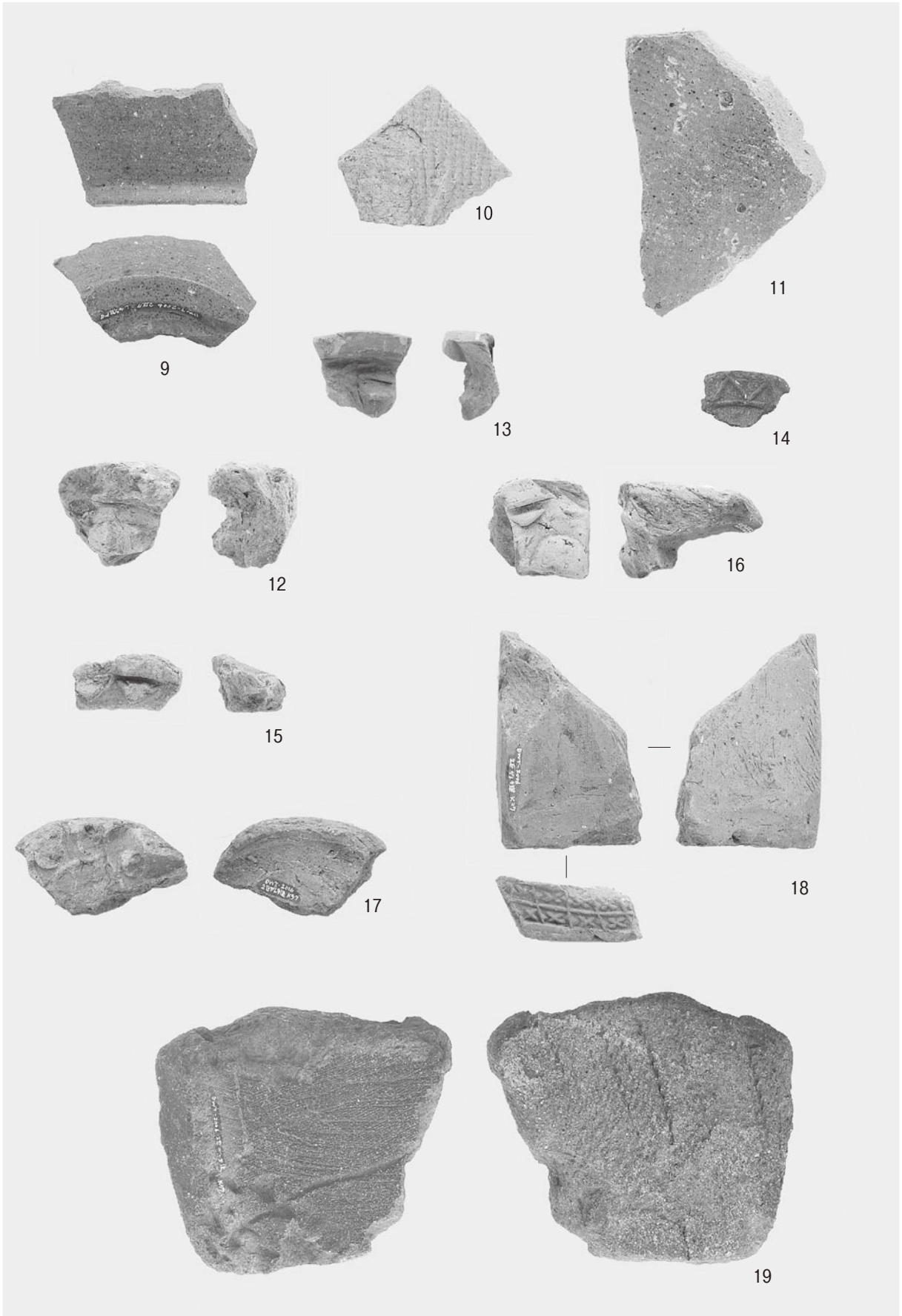


作業風景

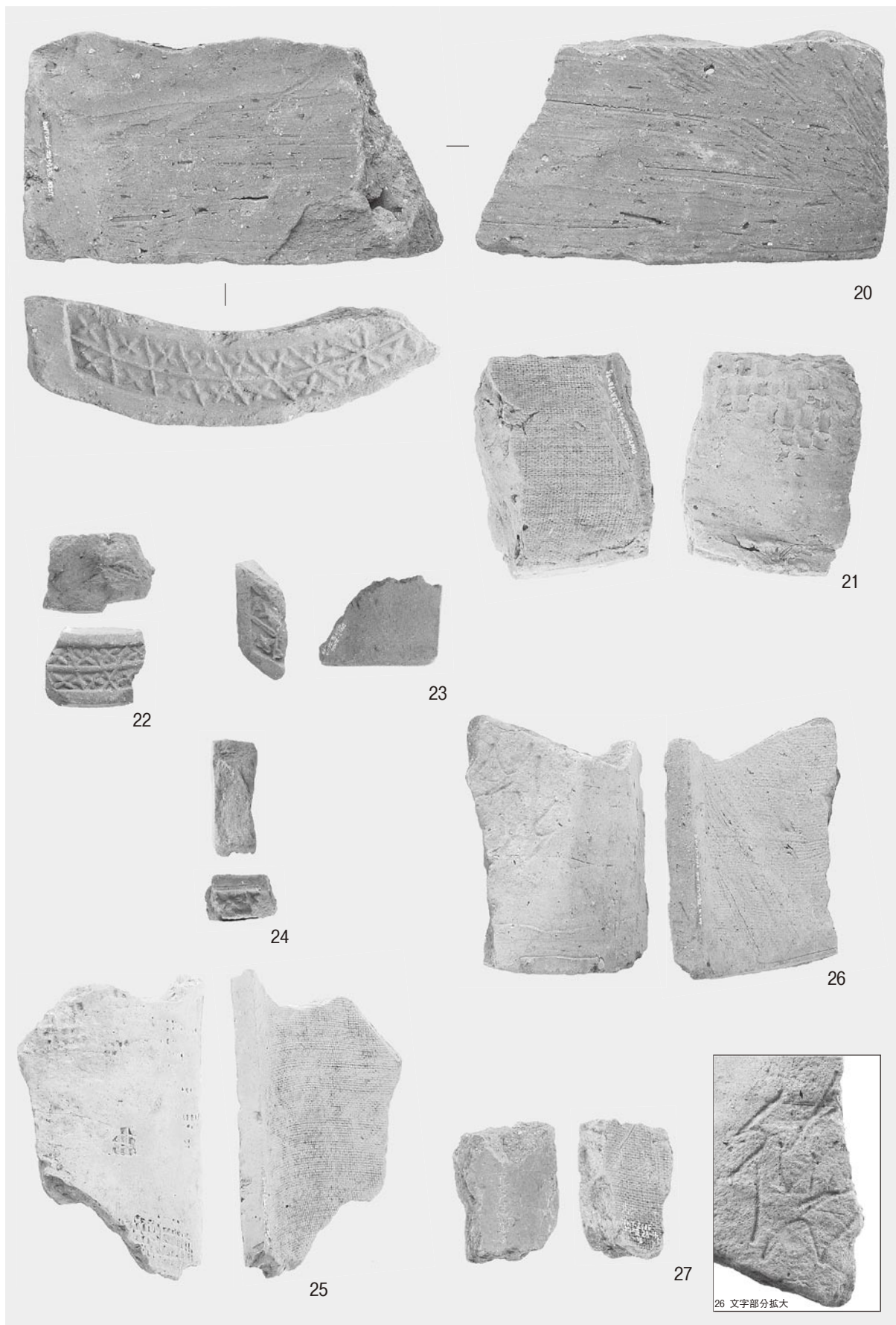


出土遺物 (1)

図版 10

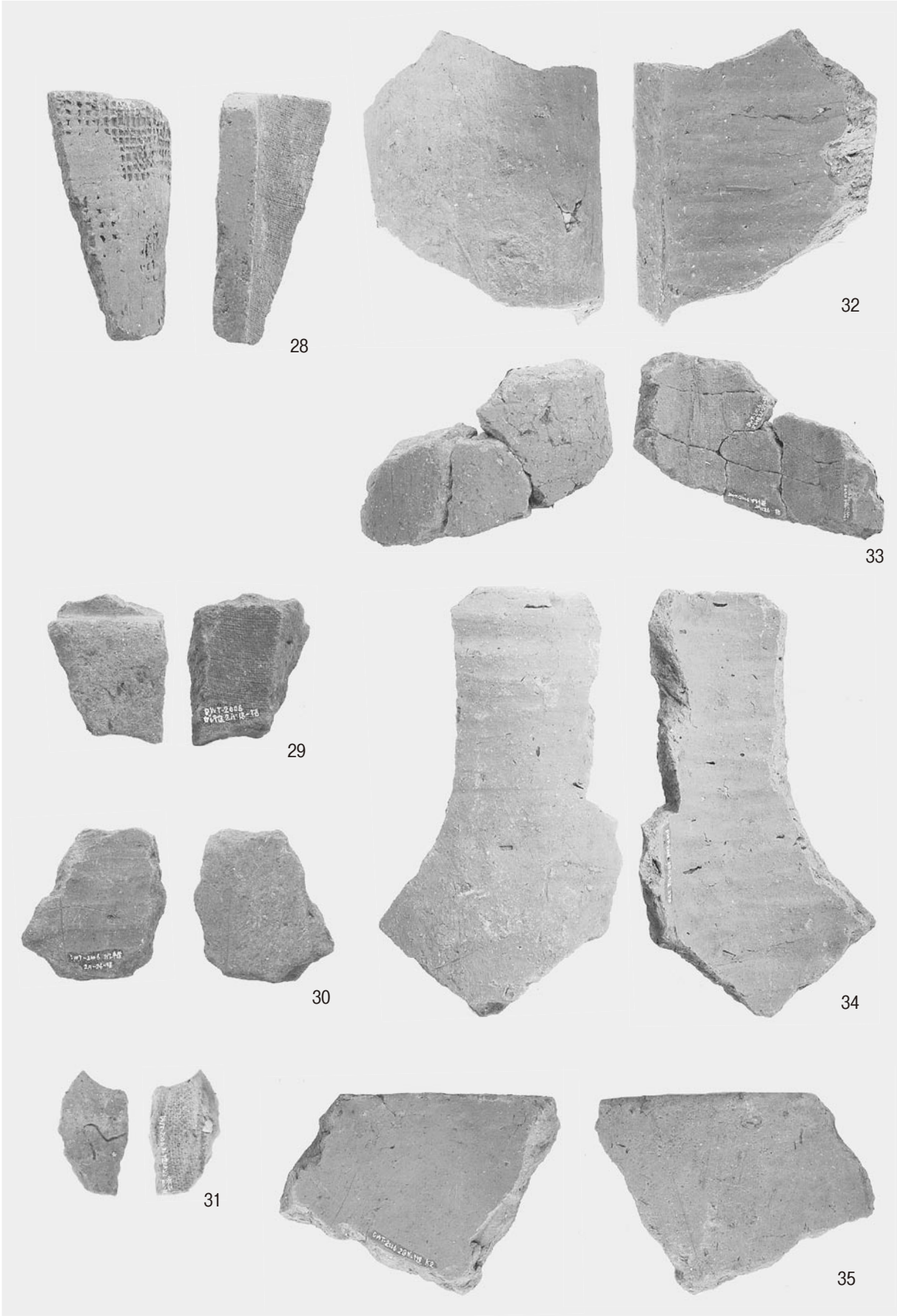


出土遺物 (2)



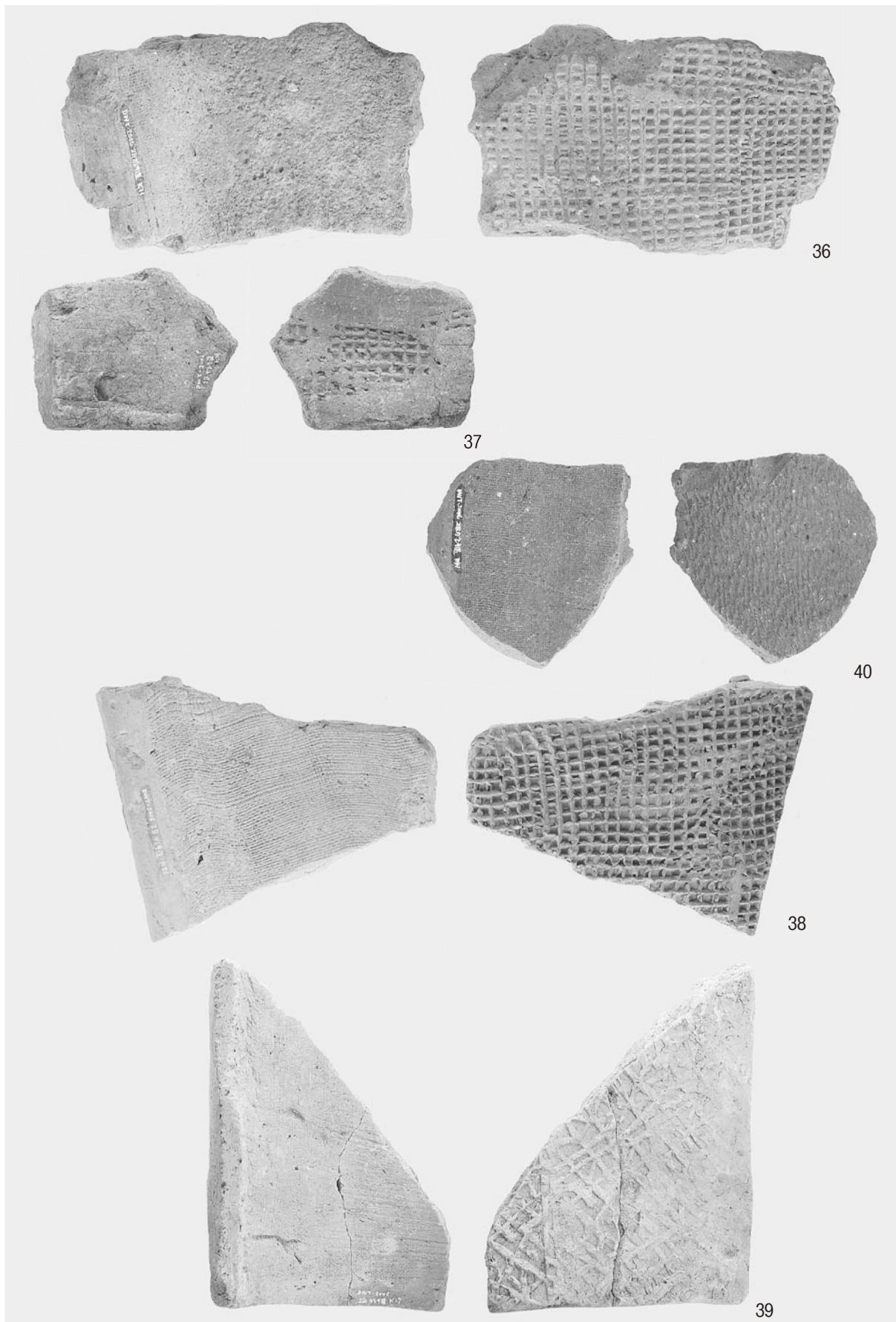
出土遺物 (3)

図版 12



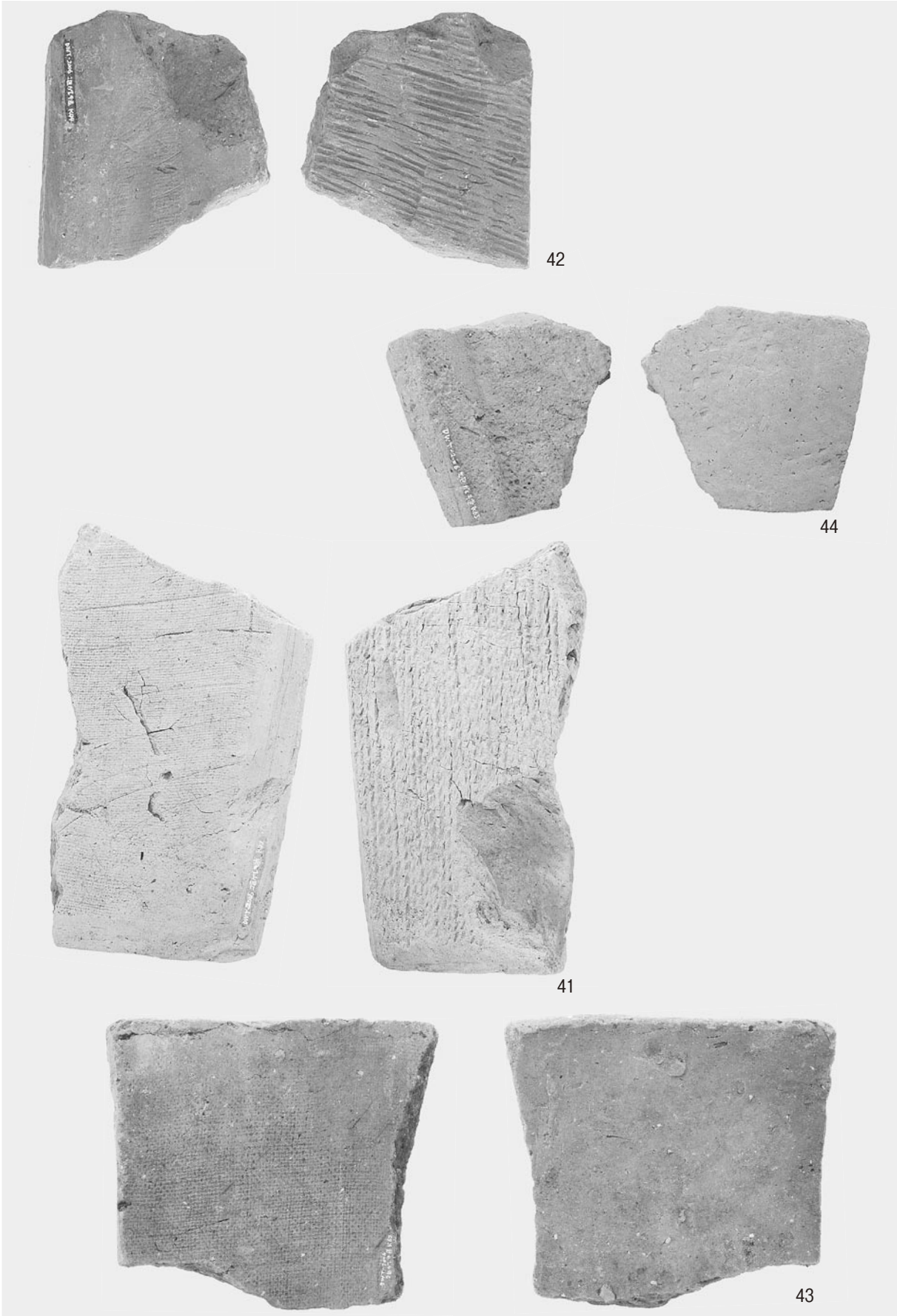
出土遺物 (4)



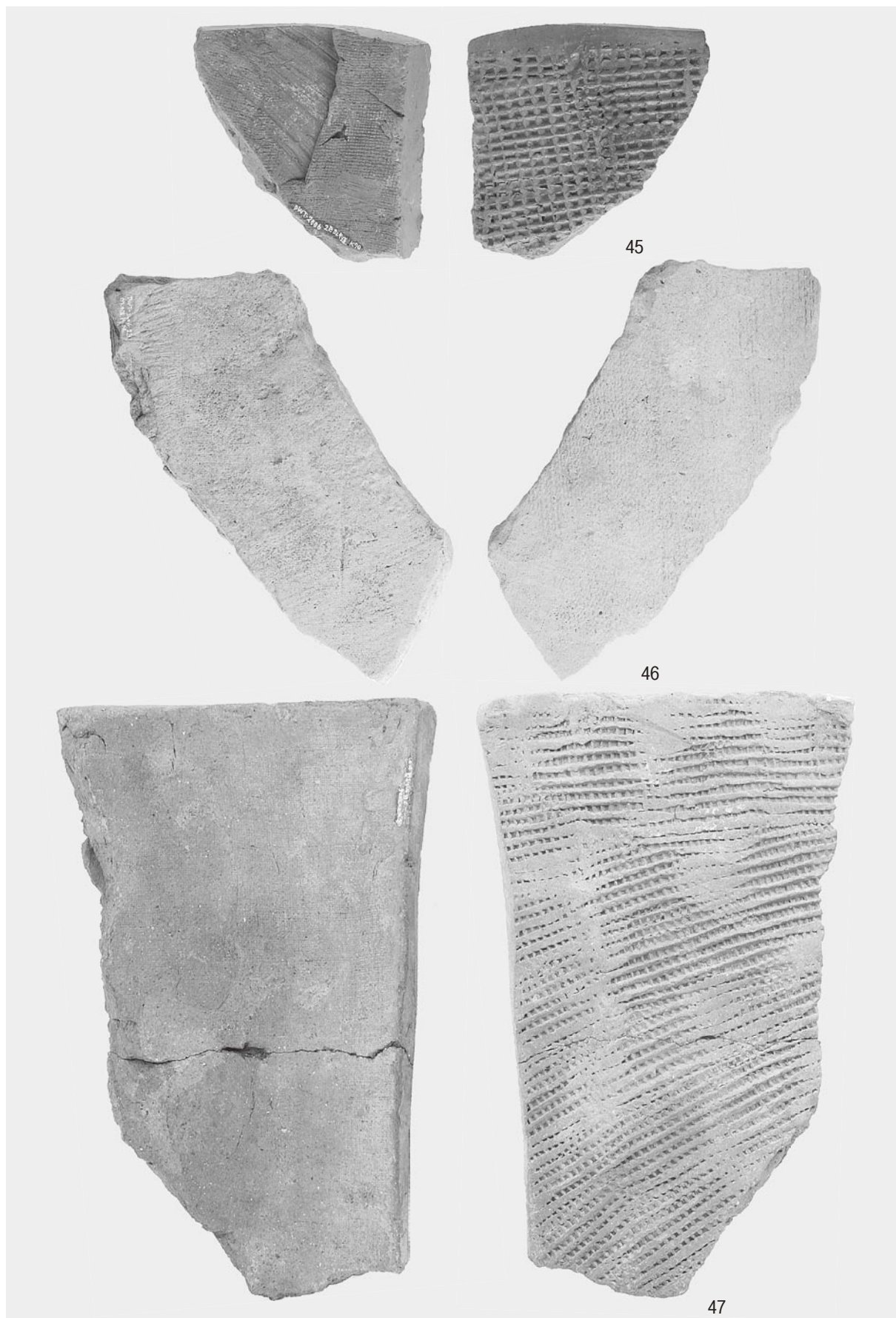


出土遺物 (5)

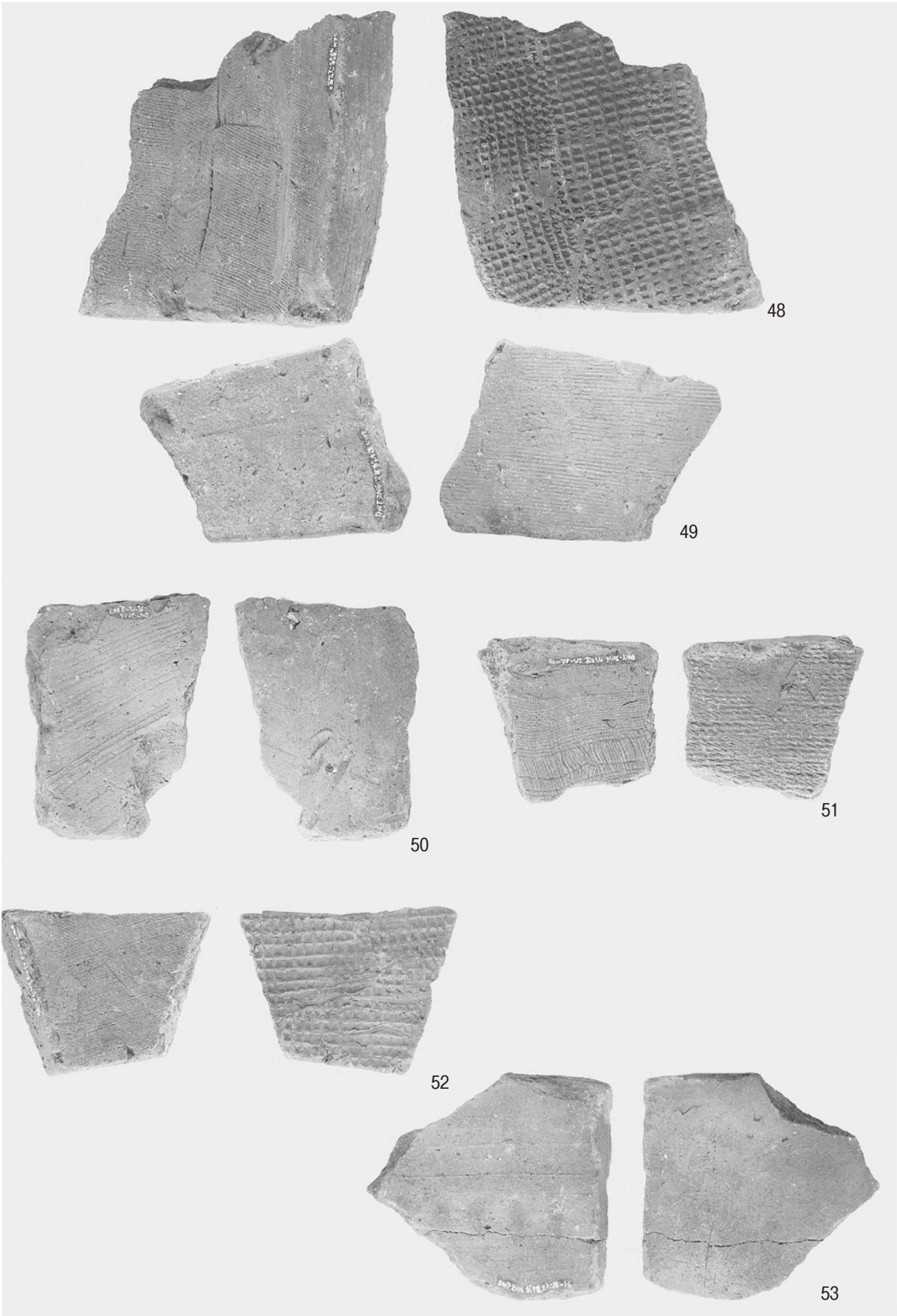
图版 14



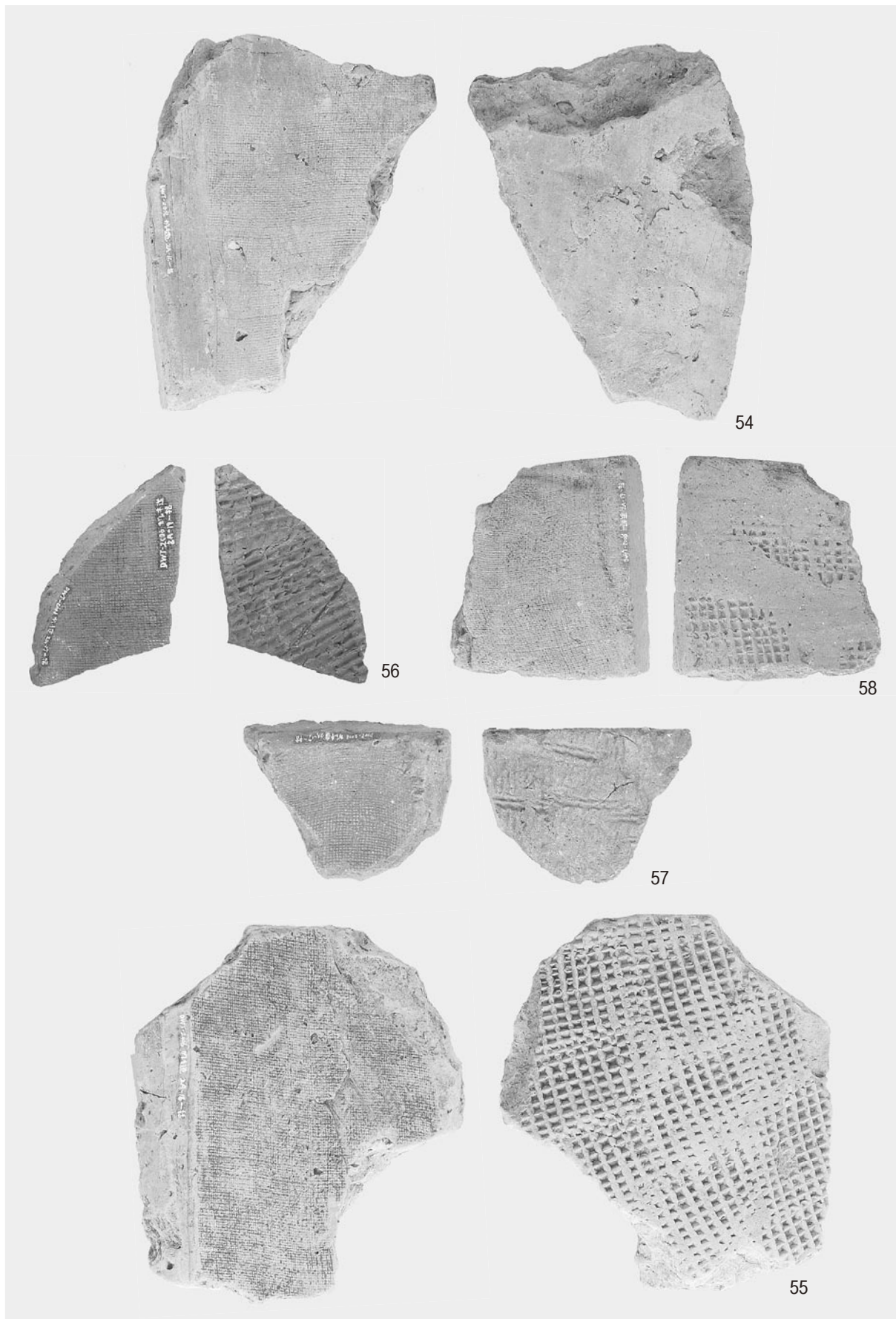
出土遺物 (6)



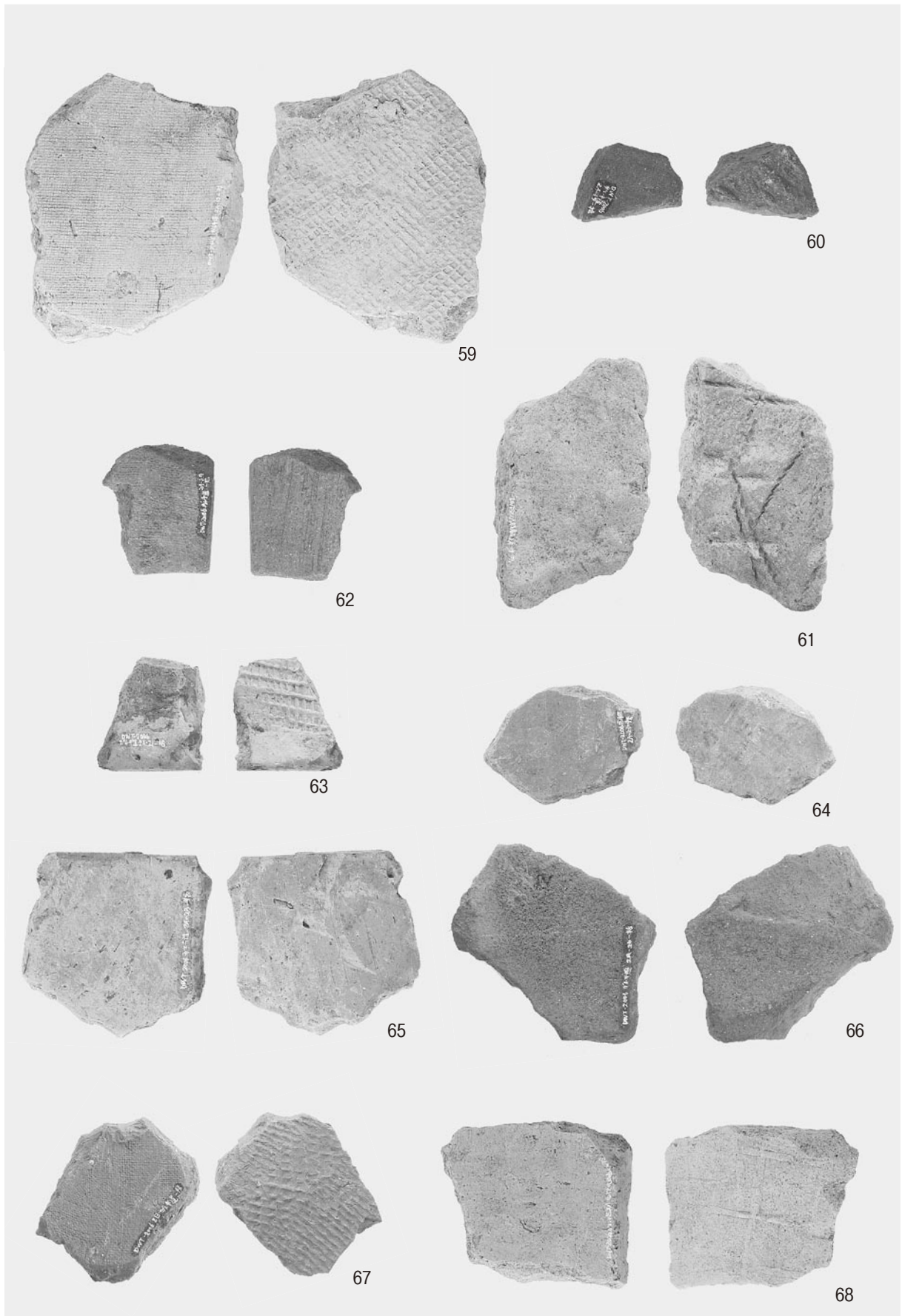
出土遺物 (7)



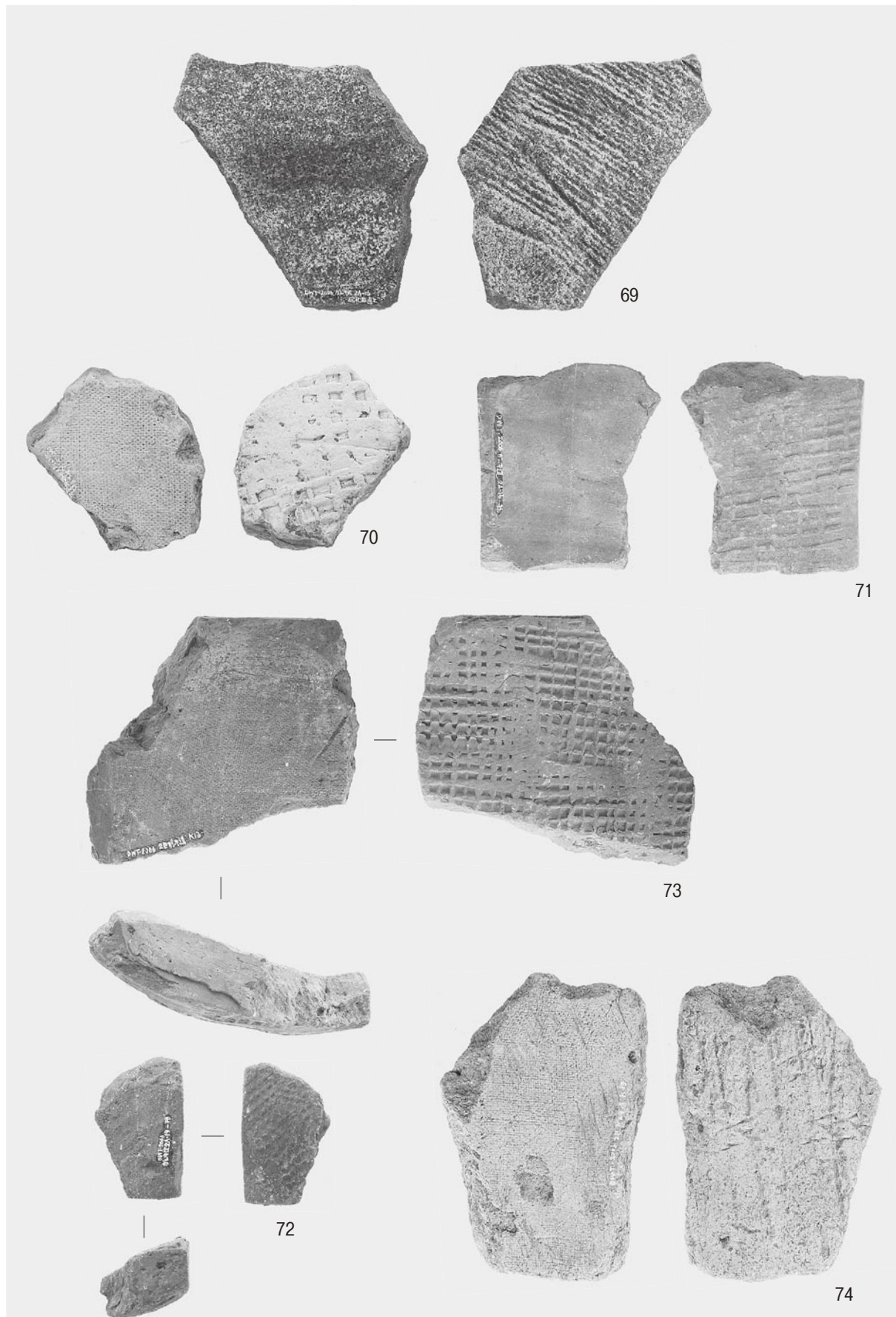
出土遺物 (8)



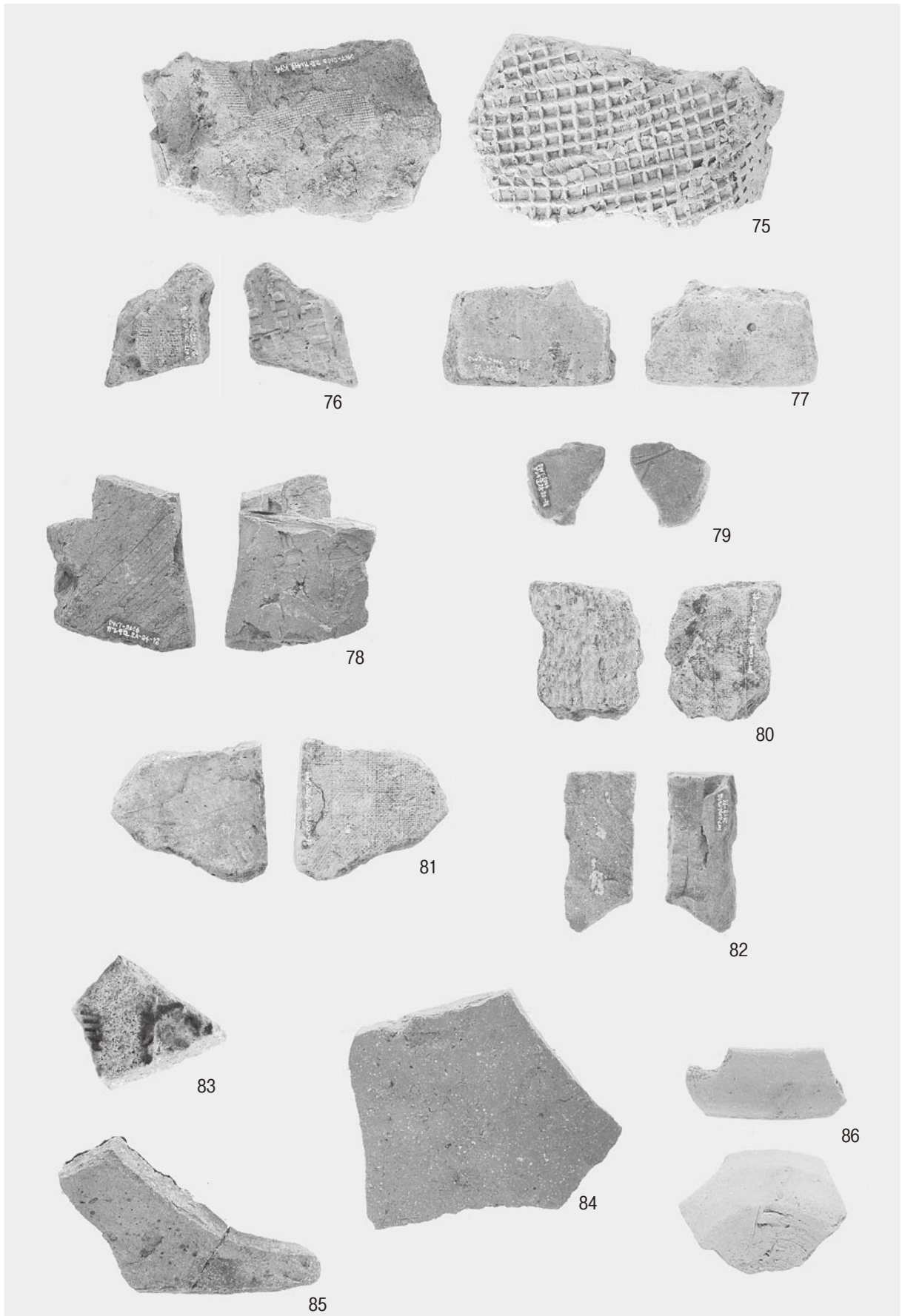
出土遺物 (9)



出土遺物 (10)

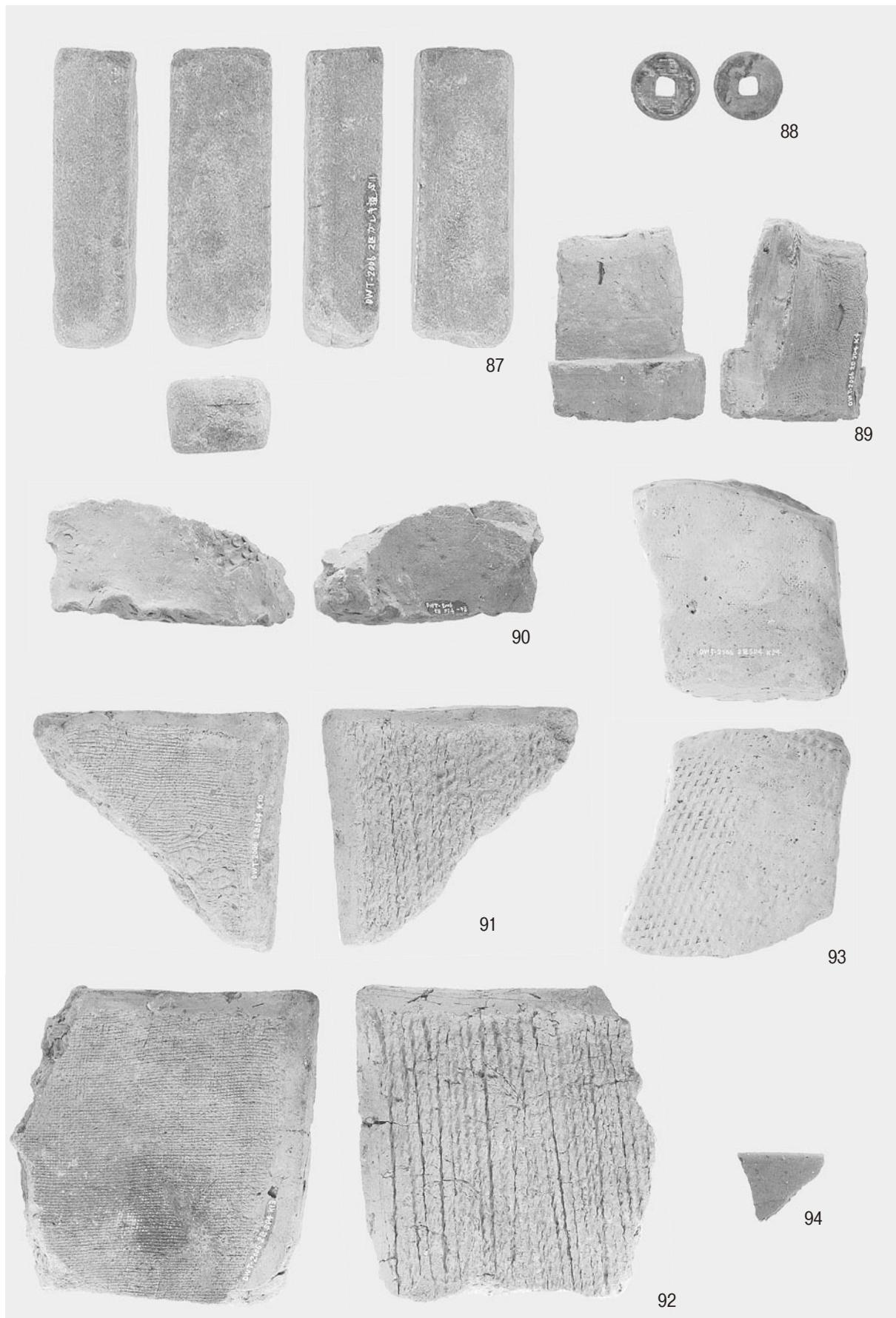


出土遺物 (11)

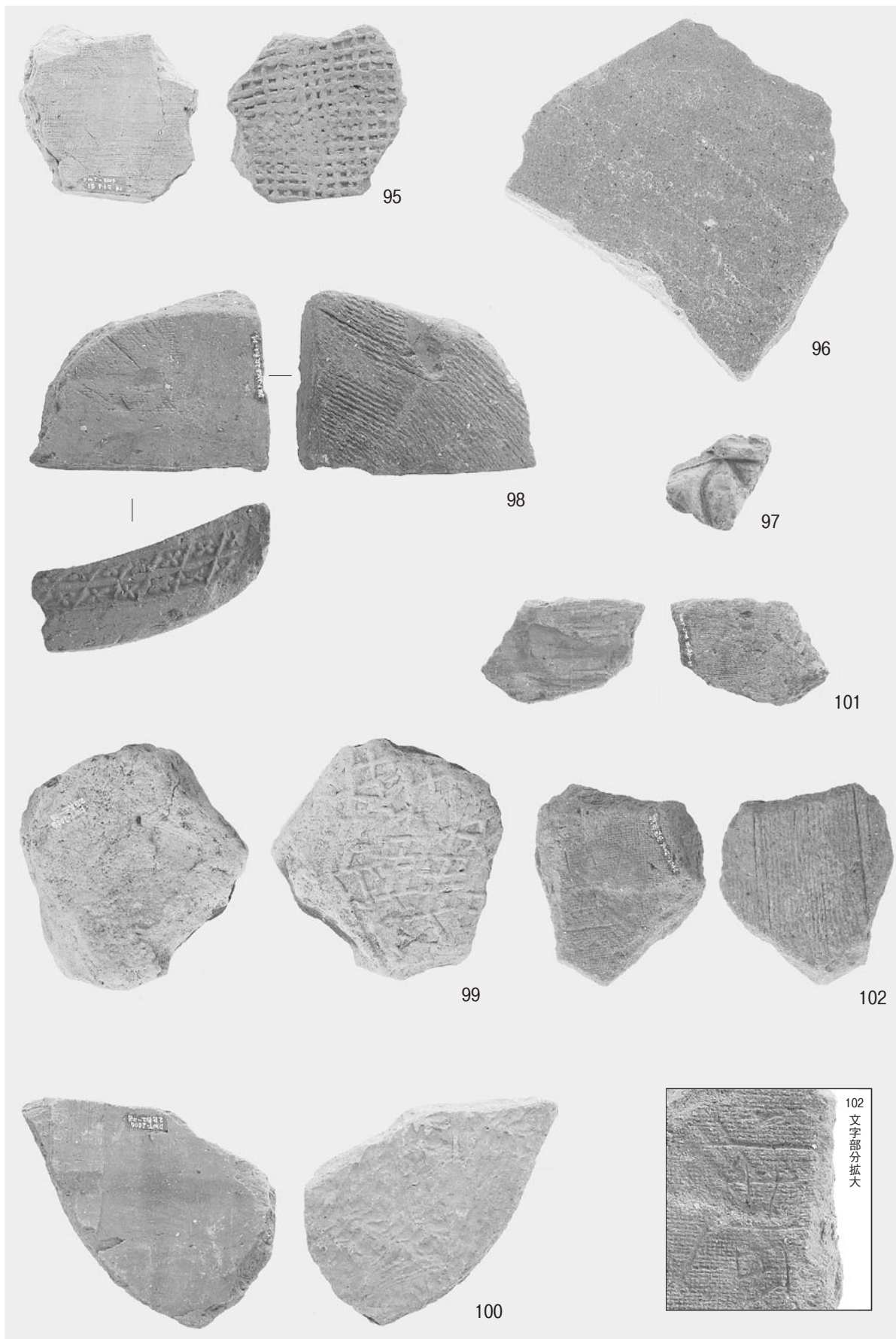


出土遺物 (12)





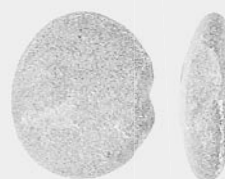
出土遺物 (13)



出土遺物 (14)



103(1/3)



104(1/3)



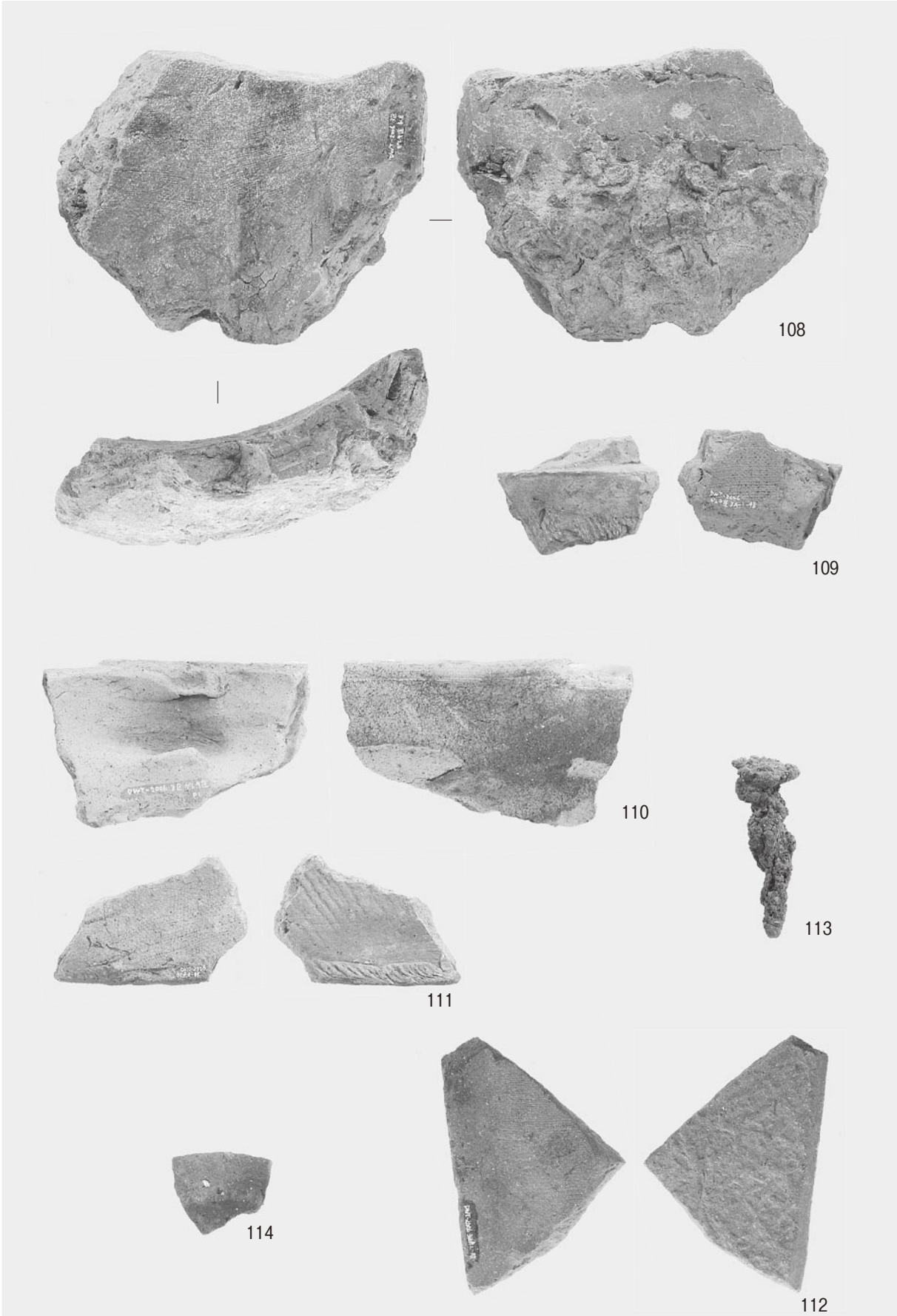
106 (1/3)



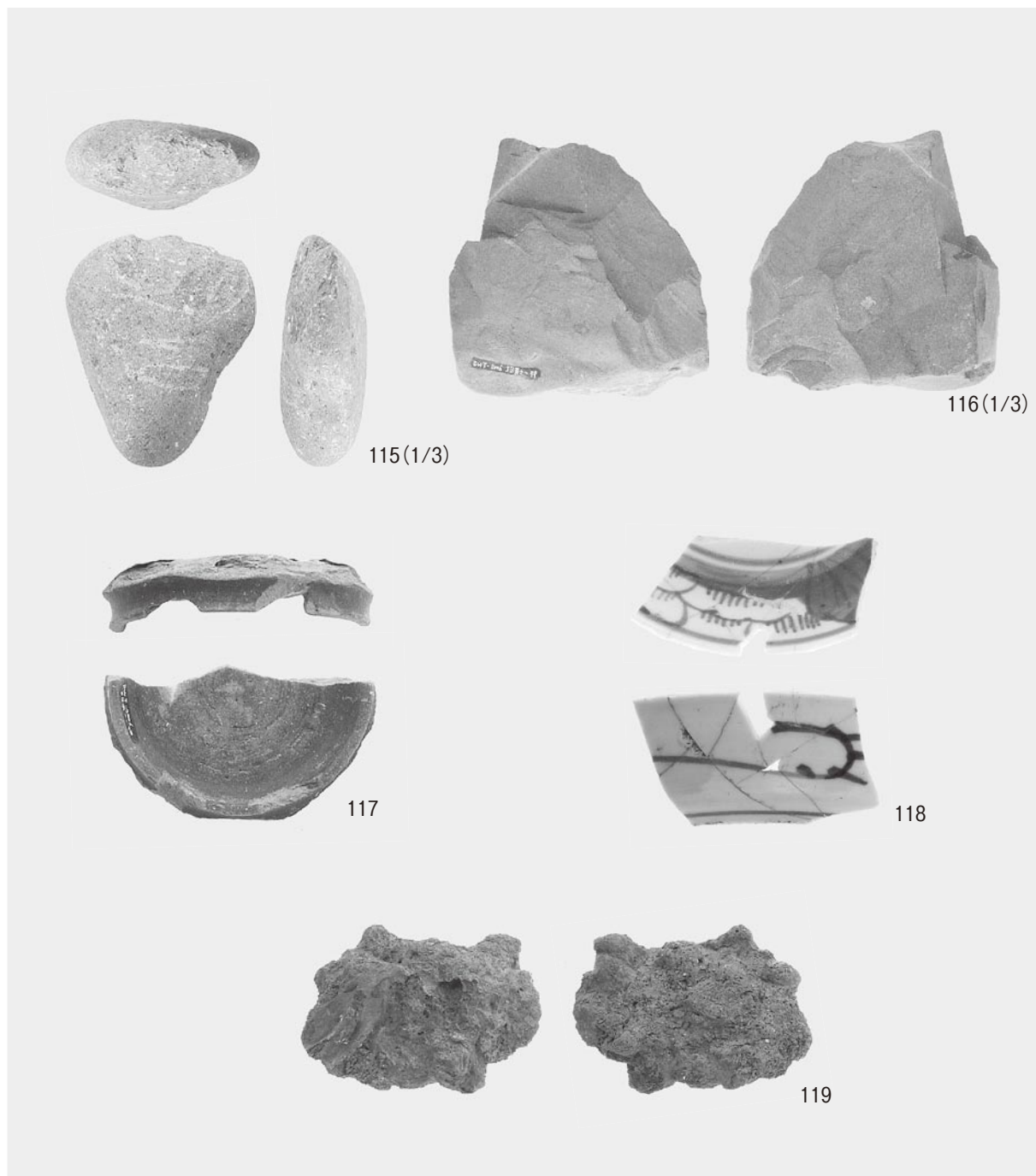
107



105(1/3)

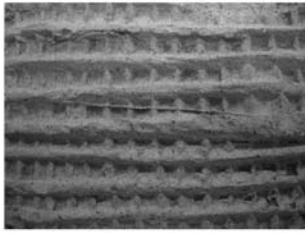


出土遺物 (16)

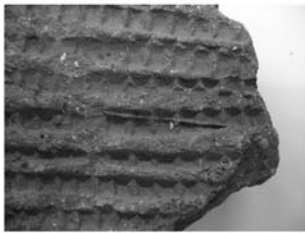


出土遺物 (17)

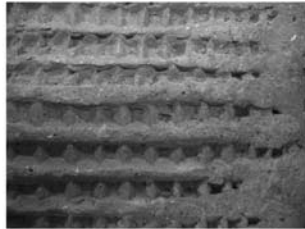
図版 26



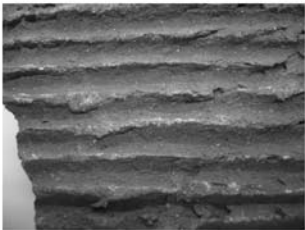
①叩き目 1 - A類



③叩き目 1 - B類



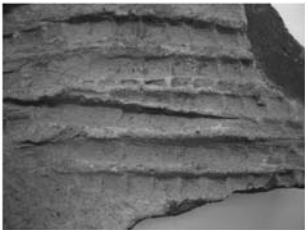
⑤叩き目 1 - B'類



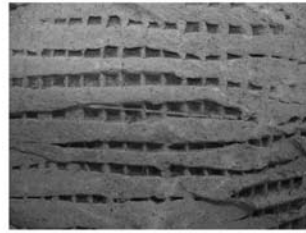
⑦叩き目 1 - D類



⑨叩き目 2 - A'類



⑪叩き目 3 - B類



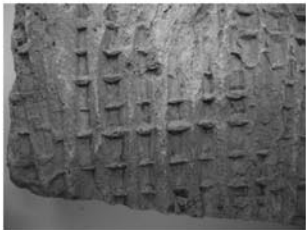
②叩き目 1 - A類



④叩き目 1 - B'類



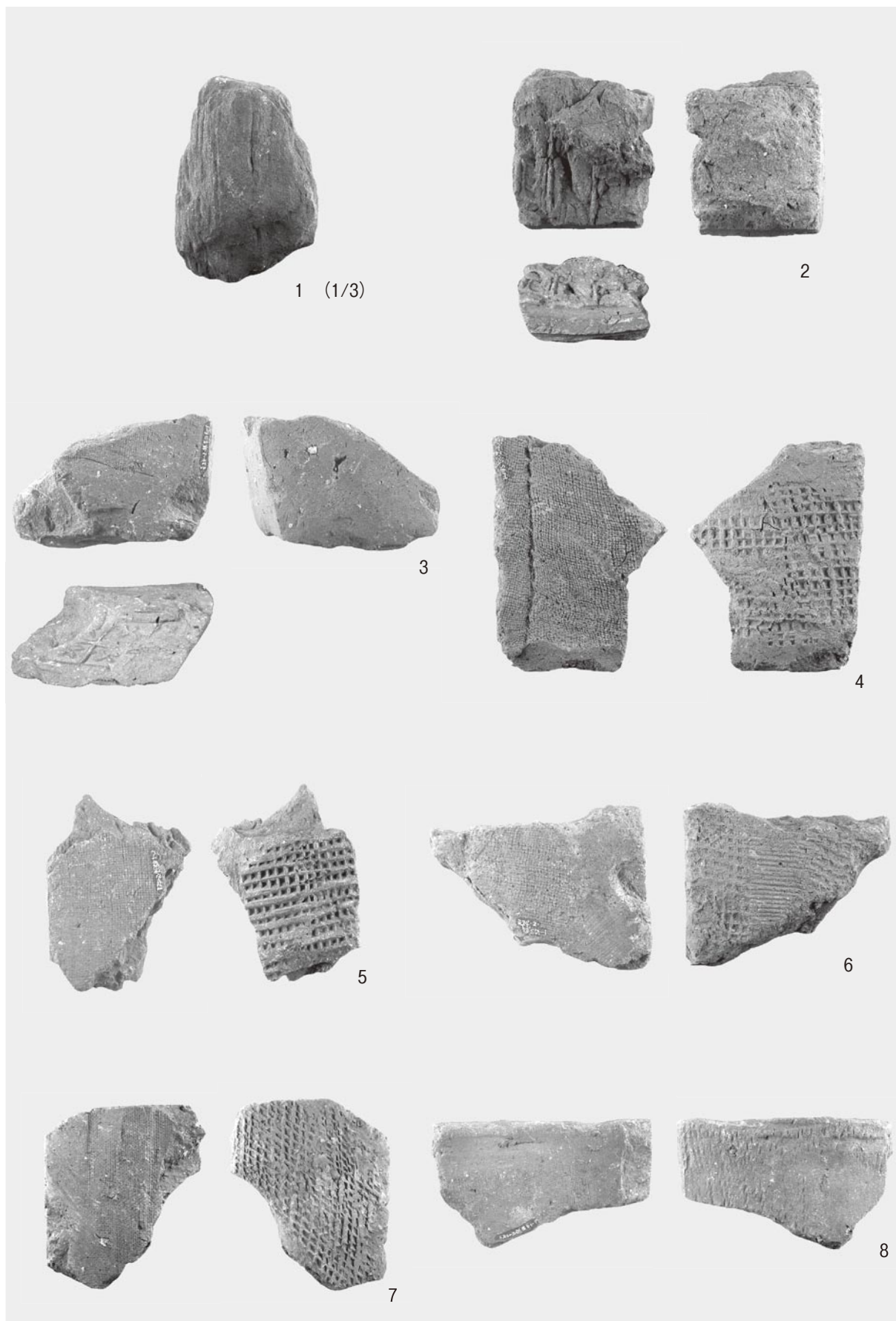
⑥叩き目 1 - C類



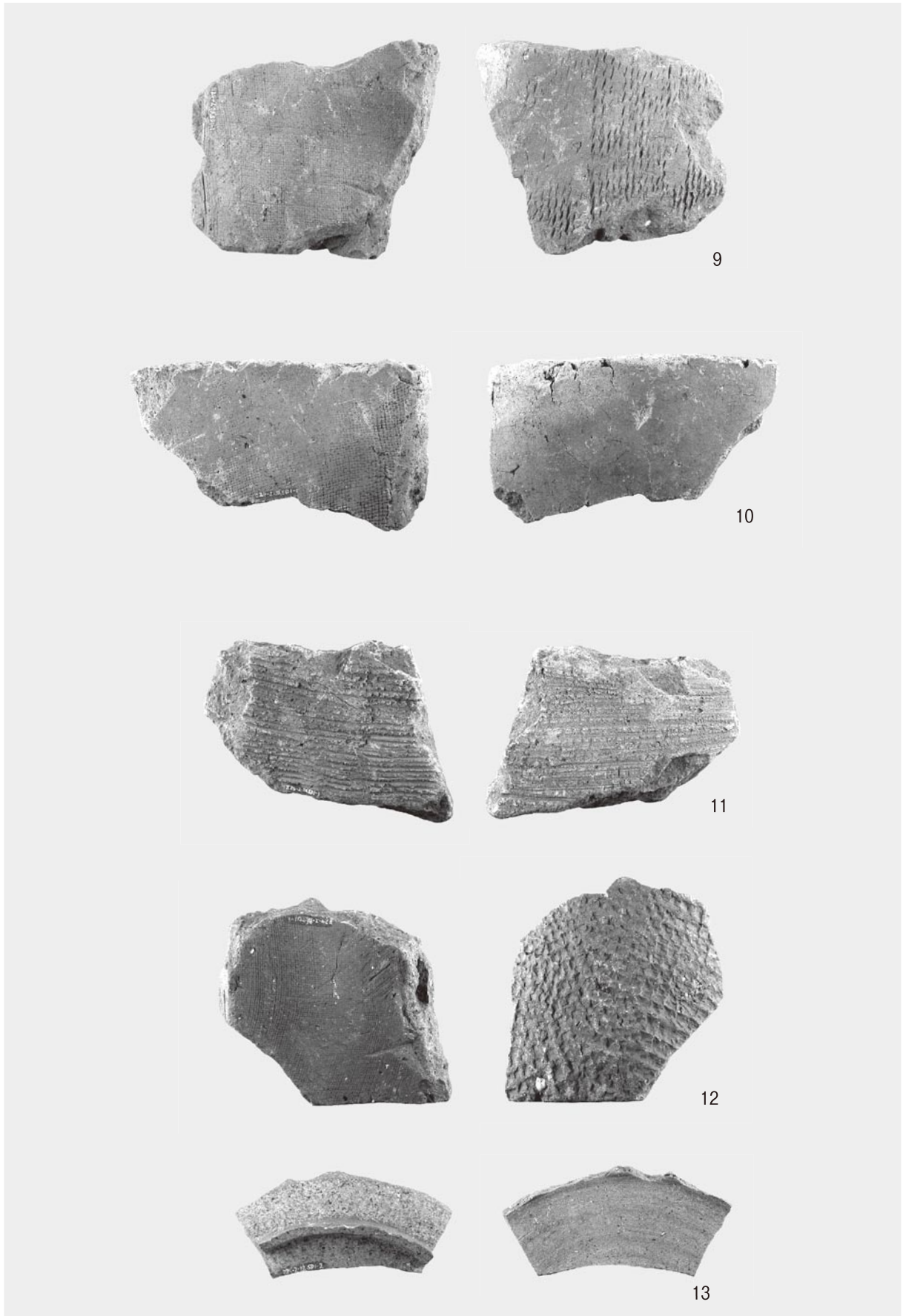
⑧叩き目 2 - A類



⑩叩き目 3 - A類



工事立会い調査出土遺物 (1)



工事立会い調査出土遺物（2）



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	あらいせき (だいにちてん)							
書名	アラヤ遺跡 (第2地点)							
副書名	市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第12集							
編集者名	佐々木藤雄・林 邦雄・市瀬俊一							
著者名	佐々木藤雄・川口武彦・関口慶久・新垣清貴・渥美賢吾・木本挙周・林 邦雄・小野麻人・市瀬俊一・大橋 生							
編集機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111							
発行年月日	2007 (平成19) 年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
あらいせき アラヤ遺跡	みとしわたりちょう 水戸市渡里町字アラヤ3061-4地先	08201	024	36° 24' 25"	140° 26' 01"	2007.1.22 ～ 2007.2.21	244 m <sup>2</sup>	道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
アラヤ遺跡	集落跡	縄文	なし		縄文土器, 石器		1区では東西に走る古代のものと思われる第1号溝を確認した。2・3区では昭和48年に確認されている瓦礫道の続きを確認した。瓦礫道内には常滑の甕などが含まれていることから、中世の長者山城跡に関連する遺構の可能性がある。また、2区では中世のものと思われる南北に走る第3号溝も確認した。4区では7尺間隔で並ぶ3基の柱穴を確認した。5区では同じく7尺間隔で並ぶ2基の柱穴を確認した。壁面を粘土で補強し、根石と思われる拳大の礫が確認された。このたびの調査により古代および中世以降の土地利用を考えていくうえで貴重な成果が得られた。	
		奈良・平安	溝跡3, 土坑2, ピット1		土師器, 須恵器, 墨書土器, 軒丸瓦, 軒平瓦, 文字瓦, 平瓦, 丸瓦, 炭化米			
		中世以降	溝跡3, 土坑3, ピット27, 瓦礫道		陶磁器 (常滑, 笠間, 肥前, 瀬戸・美濃等), 銭貨 (北宋銭・天聖元宝)			
		近・現代	溝跡1, 土坑1		なし			

※北緯・東経は測地系2000対応。Web版TKY2JD (Ver.1.3.79) による変換。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・インクジェットプリンターを使用し、 例) ミ024-2 SD1のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載文についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳, 図面台帳, 写真台帳があり, 検索が可能のように作成している。合計1冊 (綴り)
遺物保管方法	・出土遺物は報告書使用と未使用に分け遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお, 未使用分については種別毎に分類, 収納してある。

## 水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡 — 範囲確認調査報告書 —	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡 — 市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) —	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡 — グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡 — 市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡 — 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —	2006年3月発行
第6集	吉田古墳Ⅰ — 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・2次発掘調査報告書 —	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点) — 市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —	2006年3月発行
第8集	坏遺跡(第3地点) — ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —	2007年3月発行
第9集	坏遺跡(第4地点) — プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —	2007年3月発行
第10集	吉田古墳Ⅱ — 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書 —	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点) — 市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —	2007年3月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告第12集

### アラヤ遺跡

(第2地点)

— 市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷 平成19年3月26日

発行 平成19年3月26日

編集 株式会社東京航業研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 株式会社ウエタケ

〒101-0065

東京都千代田区神西田1-3-6

TEL 03-3291-3917